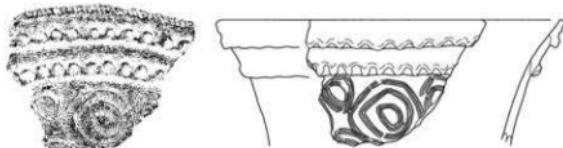


# 東前原遺跡

(第8地点第4次)

-区画道路6-27号線道路改良及び造成並びに流域間連下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-



2016

水戸市教育委員会



# 東前原遺跡

(第8地点第4次)

-区画道路6-27号線道路改良及び造成並びに流域間連下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-

2016

水戸市教育委員会





調査区の全景（南西から）



A 区全景（西から）





B 区 全景 (南から)



基本層序 (B 区・北東から)



SI107 カマド 遺物出土状況 (北から)



SI10 カマド 遺物出土状況 (西から)



SI107 P3 土層断面 (南から)



SI13 カマド 遺物出土状況 (東から)



## ごあいさつ

水戸市域の東側にある東前原遺跡は、那須岳を水源とする那珂川右岸の台地上に位置しています。本遺跡の周辺には、文献に残る最古の貝塚である国指定史跡「大串貝塚」や、6世紀後半に築造された首長墓とみられる北屋敷古墳群、奈良・平安時代に交通の要衝として機能した平津駅家の関連集落と考えられている梶内遺跡など、多くの重要遺跡が残されており、古くから政治・文化の中心地域のひとつとして繁栄してきたと考えられています。

近年、東前原遺跡が位置する東前町周辺は、区画整理事業に伴い宅地化が急速に進んでおり、周辺に位置する遺跡の様相も大きく様変わりしています。埋蔵文化財は、その性格上、開発などにより一度壊されてしまうと、二度と現状に復すことができないため、私たちひとりひとりが大切に保存しながら後世に伝えていかなければならない貴重な財産です。本市教育委員会といたしましては、その意義や重要性を踏まえ、開発事業との調和を図りながら、文化財の保護・保存に努めているところです。

今回の調査では、弥生時代から中～近世にかけての多数の遺構や遺物を確認しました。弥生時代の遺構としては、中期後半～後期前半にかけての竪穴建物跡が調査区北側に集中して見つかっており、過去の調査結果と併せて考えると、この時期の集落が台地の北端部に広がる風景が窺えつつあります。さらには、奈良・平安時代の竪穴建物跡が多数確認されたほか、東側隣地での発掘調査で確認されている大型の溝跡を検出しました。

これらの成果は、東前原遺跡における土地利用の変遷を復元するうえで重要な資料であります。また、近接する小原遺跡や、那賀郡衙正倉別院と推定される大串遺跡など、東前町近辺に存在する遺跡との関連性を考えるうえでも大きな手がかりとなるものです。

ここに刊行する本書が、豊かな地域史の一端を復元することで貴重な文化財に対する保護・活用の意識の高揚や郷土愛の育成へと繋がることを願い、学術研究等の資料として、広く御活用いただければ幸いです。

末尾ながら、今回の調査実施にあたり、多大なる御理解と御協力を賜りました近隣住民の皆様方、並びに種々の御指導・御助言を賜りました関係各位に心から感謝申し上げ、ごあいさつといたします。

平成 28 年 9 月

水戸市教育委員会

教育長 本多 清峰

## 例　　言

- 1 本書は、水戸市に所在する東前原遺跡(第8地点第4次)の発掘調査報告書である。
- 2 発掘及び整理調査は、区画道路6-27号線道路改良及び造成並びに流域関連下水道工事に伴い、水戸市教育委員会が行い、株式会社イビソクが支援した。
- 3 調査概要・及び調査組織は下記の通りである。

調査地　　水戸市東前町1121, 1192-4, 1209-3・5・6・7・9番地地内  
調査面積　1,670m<sup>2</sup>  
調査期間　平成28(2016)年3月8日～平成28(2016)年5月17日  
調査主体　水戸市教育委員会  
事務局　　七字　裕二 水戸市教育委員会事務局教育部長  
　　　　　長谷川　仁 同歴史文化財課埋蔵文化財センター所長  
　　　　　米川　暢敬 同文化財主事(調査担当者)  
　　　　　太田有里乃 同主事  
　　　　　昆　　志穂 同埋蔵文化財専門員  
　　　　　丸山優香里 同埋蔵文化財専門員  
　　　　　下山はる奈 同埋蔵文化財専門員  
　　　　　菅谷　瑛奈 同嘱託員(公開活用担当)  
　　　　　杉山　洋子 同嘱託員(庶務担当)  
調査担当　米川暢敬(水戸市教育委員会事務局教育部歴史文化財課埋蔵文化財センター文化財主事)  
調査支援　近藤美保(3月8日～4月8日迄)  
　　　　　小野麻人(4月11日～5月17日)(株式会社イビソク千葉営業所)  
調査補助員　新井泰輔、名久井伸哉(株式会社イビソク千葉営業所)  
調査参加者　青木翔吾、青木　誠、有田洋子、石川　勉、飯塚　弘、市毛友宣、岡野政雄、  
　　　　　河原井俊吉郎、小山司農夫、佐々木由二、塩野　進、清水　昊、白土和夫、菅谷末吉、  
　　　　　立原正一、谷川明正、寺門正信、根矢　稔、三澤壯太、皆川幸子、村上巧兒、八巻省三  
整理作業参加者　青木翔吾、安立美由樹、飯野正子、伊藤晴美、今井千恵、太田玄紀、勝又麻里夫  
　　　　　岸俊太郎、関根唯充、長谷川知美、長谷川玲子、原　孝子、福岡庸一、村山彩子

- 4 本書の執筆は、第1章第1・3節と第2章を米川・丸山、それ以外を小野、鈴木裕子が担当した。文責は、それぞれの文末に記載した。遺物集計については鈴木が担当した。編集は、米川の助言・指導のもと小野、鈴木が行った。
- 5 出土遺物及び図面・写真等の記録類は、報告書刊行後、一括して水戸市大串貝塚ふれあい公園埋蔵文化財センターにて保管している。
- 6 発掘調査から本書の刊行に至るまで、下記の方々・諸機関より御教示・御協力を賜った。記して深く謝意を表したい(敬称略・順不同)。  
茨城県教育庁総務企画部文化課、(有)東海建設、斎藤弘道、佐々木藤雄、前川雅夫

## 凡　　例

- 1 本文中に掲載した遺構実測図の縮尺は次の通りである。

全体図：1/300

竪穴建物跡：1/30, 1/60　　土坑・ピット：1/60　　溝：1/60, 1/80, 1/150  
遺物：1/3, 1/2, 原寸

- 2 遺構実測図中の座標値は公共座標(世界測地系)に基づく。方位は座標北、レベルは海拔高を示す。  
3 遺物の写真図版の縮尺は実測図と基本的には一致する。  
4 遺物番号は本文、挿図、写真図版と一致し、遺構ごとに通し番号とした。但し鉄滓は写真図版のみの掲載である。  
5 遺構・遺物実測図中の表示は以下の通りである。

全体図	—	擾乱
遺構：竪穴建物跡	□	硬面
	□	復元線
カマド構築材の粘土		
	□	燒土・火床面範囲
※その他特別なものは各頁に記載した。		
遺物	■	ピット内の柱の圧痕
	■	須恵器(断面)
	■	内面黒色処理
	■	灰釉陶器

- 7 遺物の注記に使用した遺跡名の略号は以下の通りである。

201259-8-4 (水戸市 旧常澄村(201)東前原遺跡(259)-第8地点第4次調査)

- 8 土層・遺物の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局ほか監修の、『新版標準土色帖』(2001年度版)に掲っている。  
9 遺構(ピット含む)凡例図は以下の通りである。

平面形態



円形



橢円形



長方形



不整形

断面形態



箱形



逆台形



段形



凹字形



楕形



皿形



箇形

- 10 土器観察表の「①胎土」の「針状物」はいわゆる白色針状物質=海綿骨針の略である。

## 本文目次

序文	
卷頭図版	
例言・凡例・目次	
第1章 調査に至る経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法と経過	2
第2章 遺跡の位置と環境	4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	5
第3節 東前原遺跡における既往の調査	8
第3章 調査の方法と成果	10
第1節 基本層序	10
第2節 遺構と遺物の概要	11
第3節 弥生時代	14
1 堅穴建物跡	
第4節 奈良・平安時代	22
1 堅穴建物跡	
2 土坑	
3 ピット	
第5節 中・近世	58
1 溝跡	
2 土坑	
3 ピット	
第6節 遺構外出土遺物	64
第7節 出土遺物集計表について	64
第4章 総括	72
引用・参考文献	
写真図版	
報告書抄録・奥付	

## 図版目次

第1図 東前原遺跡第8地点第1次調査試掘トレンチ配置図	1
第2図 道路の位置	4
第3図 周辺の道路	5
第4図 東前原遺跡における既往の調査地点	9
第5図 基本順序	10
第6図 A区遺構図	12
第7図 B区遺構図	13
第8図 SI01	14
第9図 SI01出土遺物	15
第10図 SI02	17
第11図 SI02出土遺物	17
第12図 SI05	19
第13図 SI05出土遺物	20
第14図 SI09	21
第15図 SI09出土遺物	21
第16図 SI03	23
第17図 SI03出土遺物	24
第18図 SI04(1)	25
第19図 SI04(2)	26
第20図 SI04出土遺物	27
第21図 SI06(1)	29
第22図 SI06(2)	30
第23図 SI06出土遺物	31
第24図 SI07	33
第25図 SI07出土遺物	34
第26図 SI08	35
第27図 SI08出土遺物	36
第28図 SI10	37
第29図 SI10出土遺物	38
第30図 SI11	39
第31図 SI11出土遺物	40
第32図 SI12	41
第33図 SI12出土遺物	41
第34図 SI13(1)	43
第35図 SI13(2)	44
第36図 SI13(3)	45
第37図 SI13出土遺物	46
第38図 SI14	48
第39図 SI14出土遺物	48
第40図 SI15	50
第41図 SI15出土遺物	51
第42図 SI16	52
第43図 SI16出土遺物	53
第44図 SI17	54
第45図 SI17出土遺物	55
第46図 泽良・平安時代の土坑	56
第47図 泽良・平安時代のピット	57
第48図 SD01	59
第49図 SD01出土遺物	60
第50図 SD02・SD03・SD04	61
第51図 中・近世の土坑	62
第52図 SK13出土遺物	62
第53図 中・近世のピット	63
第54図 道構外出土遺物(1)	65
第55図 道構外出土遺物(2)	66
第56図 道構の変遷	72

## 表 目 次

第1表 主要な周辺遺跡一覧	6
第2表 東前原遺跡における既往の調査一覧	9
第3表 SI01出土土器観察表	16
第4表 SI01出土石器観察表	16
第5表 SI02出土土器観察表	17
第6表 SI02出土石器観察表	18
第7表 SI05出土土器観察表	20
第8表 SI05出土土器製品観察表	21
第9表 SI09出土土器観察表	21
第10表 SI03出土土器観察表	24
第11表 SI03出土金属製品観察表	25
第12表 SI04出土土器観察表	28
第13表 SI04出土金属製品観察表	28
第14表 SI06出土土器観察表	31
第15表 SI06出土金属製品観察表	32
第16表 SI07出土土器観察表	34
第17表 SI07出土土器製品観察表	34
第18表 SI07出土金属製品観察表	34
第19表 SI08出土土器観察表	36
第20表 SI11出土土器観察表	38
第21表 SI11出土土器観察表	40
第22表 SI11出土金属製品観察表	40
第23表 SI12出土土器観察表	42
第24表 SI12出土金属製品観察表	42
第25表 SI13出土土器観察表	47
第26表 SI14出土土器観察表	49
第27表 SI15出土土器観察表	51
第28表 SI15出土金属製品観察表	51
第29表 SI16出土土器観察表	53
第30表 SI16出土土器観察表	53
第31表 SI17出土土器観察表	55
第32表 SI17出土石器観察表	55
第33表 泽良・平安時代の土坑一覧表	56
第34表 泽良・平安時代のピット一覧表	57
第35表 SD01出土陶器・土器観察表	60
第36表 中・近世の土坑一覧表	62
第37表 SK13出土土器観察表	63
第38表 SK13出土金属製品観察表	63
第39表 中・近世のピット一覧表	63
第40表 道構外出土土器観察表	66
第41表 道構外出土瓦観察表	67
第42表 道構外出土土器観察表	67
第43表 道構外出土石器観察表	67
第44表 出土遺物集計表(1) 泽良・平安時代:土器類	68
第45表 出土遺物集計表(2) 泽良・平安時代:須恵器	69
第46表 出土遺物集計表(3) 泽良・平安時代:土師器、須恵器以外の製品	70
第47表 出土遺物集計表(4) 泽良・平安時代:全体	70
第48表 出土遺物集計表(5) 弥生時代	71
第49表 出土遺物集計表(6) 中・近世	71

## 卷頭図版目次

卷頭図版1 調査区の全景 (南から)

A区全景 (西から)

卷頭図版2 B区全景 (南から)

基本層序 (B区・北東から)

S107 カマド 遺物出土状況 (北から)

S110 カマド 遺物出土状況 (西から)

S107 P3 土層断面 (南から)

S113 カマド 遺物出土状況 (東から)

## 写真図版目次

写真図版1 A区 完層全景 (南東から)

B区 完層全景 (北東から)

A区 基本層序 (東から)

A区 調査前現況 (南から)

B区 調査前現況 (南から)

S101 完層 (南東から)

S101 遺物出土状況 (西から)

S101 炉 完層 (西から)

写真図版2 S101 縦り方 完層 (南東から)

S102 完層 (南から)

S102 遺物出土状況 (西から)

S102 縦り方 完層 (西から)

S104・S105 横出状況 (東から)

S105 完層 (東から)

S105 土器出土状況 (西から)

S109 完層 (東から)

写真図版3 S103 完層 (南西から)

S103 遺物出土状況 (南西から)

S103 カマド 完層 (南西から)

S103 縦り方 完層 (南西から)

S104 東西土層断面 (南から)

S104 完層 (南西から)

S104 遺物出土状況 (南西から)

S104 鉄製品出土状況 (南西から)

写真図版4 S104 カマド 完層 (南西から)

S104 縦り方 完層 (南西から)

S106 検出状況 (西から)

S106 完層 (南西から)

S106 遺物出土状況 (西から)

S106 カマド 完層 (南西から)

S106 縦り方 完層 (南西から)

S107 完層 (西から)

写真図版5 S107 遺物出土状況 (西から)

S107 鉄製品出土状況 (北から)

S107 カマド 遺物出土状況 1 (西から)

S107 カマド 遺物出土状況 2 (北から)

S107 カマド 完層 (西から)

S107 P5 土層断面 (南から)

S107 縦り方 完層 (西から)

S108 完層 (南から)

写真図版6 S108 完層西部 (東から)

S108 狹帯器坏壊土状況 (東から)

S110 完層 (南から)

S110 カマド 遺物出土状況 (南から)

S110 カマド 完層 (南から)

S111 完層 (南から)

S111 狹帯器坏壊土状況 (南から)

S111 カマド 完層 (南から)

写真図版7 S112 完層 (北東から)

S112 土器器坏壊土状況 (北から)

S112 土層断面 (北から)

S112 カマド 完層 (北東から)

S112 カマド 土層断面 (北から)

S113 完層 1 (南から)

S113 完層 2 (西から)

写真図版8 S113 土層断面 (北西から)

S113 カマド 遺物出土状況 (南から)

S113 カマド 完層 1 (南から)

S113 カマド 完層 2 (東から)

S113 P4 土層断面 (西から)

S113 南西属 粘土塊出土状況 (北西から)

S113 縦り方 完層 (南から)

S114 完層 (南東から)

写真図版9 S114 カマド 完層 (南東から)

S115 完層 1 (西から)

S115 完層 2 (東から)

S115 烏製品出土状況 (南から)

S115 カマド 完層 (西から)

S115 素燒造構 完層 (北から)

S116 完層 (西から)

S116 遺物出土状況 (西から)

写真図版10 S116 土の器器出土状況 (西から)

S117 完層 (西から)

S117 遺物出土状況 (北東から)

S117 カマド 完層 (西から)

SK08 完層 (西から)

SK09 完層 (西から)

SK20 完層 (南から)

SK23 土層断面 (西から)

写真図版11 SD01 完層全景 (東から)

SD01 完層全景 (西から)

SD01 完層半部 (東から)

SD01 完層半部出部 (西から)

SD02 完層 (東から)

SD02 (右)・SD03 (左) 完層 (西から)

SD03 完層東半部 (北から)

写真図版12 SD03 土層断面 K (東から)

SD03 (左)・SD04 (右) 完層 (西から)

SD04 土層断面 F (東から)

SK06 完層 (東から)

SK06 土層断面 (西から)

SK13 完層 (北東から)

SK13 羽口出土状況 (北東から)

SK14 完層 (西から)

写真図版13 1. S101 出土遺物

2. S102 出土遺物

写真図版14 1. S105 出土遺物

2. S109 出土遺物

3. S103 出土遺物

写真図版15 1. S104 出土遺物

2. S106 出土遺物

写真図版16 1. S107 出土遺物

2. S108 出土遺物

写真図版17 1. S110 出土遺物

2. S111 出土遺物

3. S112 出土遺物

写真図版18 1. S113 出土遺物

2. S114 出土遺物

3. S115 出土遺物

写真図版19 1. S116 出土遺物

2. S117 出土遺物

写真図版20 1. SD01 出土遺物

2. SK13 出土遺物

3. 道構外出土遺物 (1)

写真図版21 1. 道構外出土遺物 (2)

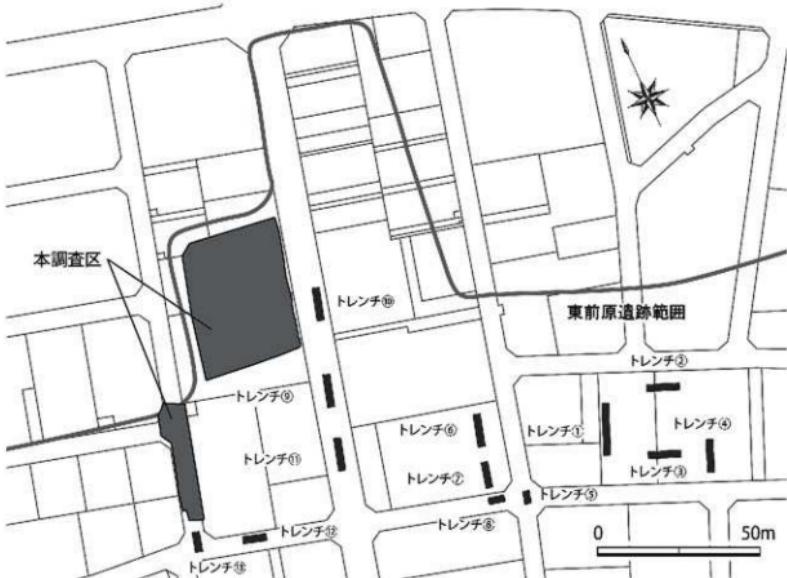
# 第1章 調査に至る経緯と経過

## 第1節 調査に至る経緯

平成27年6月10日付けて、土地区画整理事業に伴い、水戸市長（都市計画部市街地整備課東前地区開発事務所扱、以下「事業者」という）から、水戸市教育委員会（以下「市教委」という）教育長あて、「埋蔵文化財の所在の有無およびその取扱いについて」（教理第763号）が提出された。

開発予定地は周知の埋蔵文化財包蔵地「東前原遺跡」に該当していることから、平成27年6月16～19日に試掘調査を実施した。なお、開発予定地のうち埋蔵文化財包蔵地の範囲外とされていた箇所にも遺構の分布が想定されたことから、当該箇所にも調査区（トレンチ⑩）を設定した。当該試掘調査では、計13本の調査区を設定し、ほぼ全ての調査区から竪穴建物跡や溝跡をはじめとする多数の遺構・遺物を検出した（東前原遺跡第8地点第1次調査、教理第764号、第1図）。なお、試掘調査により遺跡の範囲がさらに北側の台地縁辺まで広がることを確認したため、後日に東前原遺跡の範囲変更を行っている。

以上のことから、本件は「茨城県埋蔵文化財発掘調査等取扱い基準」原則Ⅲ「恒久的な構造物の設置により相当期間にわたり埋蔵文化財と人の関係が絶たれ、当該埋蔵文化財が破損したに等しい状態となる場合」に該当すると判断された。そのため、市教委は、現状保存に向け事業者と協議を重ねたが、工事による影響は不可避であり、埋蔵文化財の現状保存は極めて困難であるとの結論に達した。このため市教委は、事業者から提出のあった文化財保護法第94条第1項に基づく通知について、



第1図 東前原遺跡第8地点第1次調査試掘トレンチ配置図(1:1,500)

記録保存を目的とした本発掘調査を実施すべき旨の意見書を付して茨城県教育委員会(以下「県教委」という)教育長あて進達した(教理第765号)。

この通知に対し、県教委教育長から平成27年7月15日付け文第1011号にて、工事着手前に発掘調査を実施すること、また、調査の結果重要な遺構が確認された場合にはその保存について別途協議を要する旨の指示・勧告があつた。

これを受け、市教委は工事対象地のうち、埋蔵文化財が確認された面積1,670m<sup>2</sup>を調査対象とし、平成28年3月8日～平成28年5月17日の期間をもって発掘調査を実施した。なお、当該地点は、事業範囲が広範であったため、工事実施区画にあわせて次数を分けており、これまでに工事対象地の南東側において、平成27年12月22日～平成28年1月20日の期間で第2次発掘調査を、当該地点の東側隣地において、平成28年3月1日～平成28年4月6日の期間で第3次発掘調査を行っている。これらの経緯から、当該地点は第8地点第4次として発掘調査を実施している。(米川・丸山)

## 第2節 調査の方法と経過

### (1) 発掘作業の経過

発掘調査は、平成28年3月8日から平成28年5月16日に実施した。調査区は、事業対象地のうちの1,670m<sup>2</sup>を対象とし、北側のA区、その南西側の細長いB区の2箇所に分かれている。これらの調査区を網羅するように、世界測地系の公共座標(第IX系)に基づき5m方眼のグリッドを設定し、北から南へA～R、西から東へ1～14とグリッド名を付した。

調査前の現況は、A区が住宅の上物撤去が済んだ空地、B区が区画道路6～27号線事業予定地の旧道部分と隣接する荒廃地であった。

3月8日から、重機による表土掘削をA区の北東側から開始し、並行して機材庫や仮設トイレの搬入にあたった。掘削の結果、現地表下1.0mで遺構確認面であるソフトローム層の上面に至った。この付近からは、弥生時代の竪穴建物跡であるSI01が検出された。同月15日までA区と統いてB区の表土掘削と排土の搬出を進めた。なお、A区の南西角から南側にかけては、電柱及び既存道路沿いに深い溝(SD01)の存在が確認されたため、安全上の理由を考慮して掘削を断念した。また、B区の北西の一画では、地山にまで達する大規模な搅乱が確認され、調査ができなかった。

3月16日より作業員を投入し、人力による遺構確認と掘削に着手。トータルステーションによる平面測量と遺物微細の写真測量、カメラ3台(デジタル(2,472万画素)・カラーリバーサルフィルム・モノクロフィルム)による写真撮影、断面図は主に手実測により適宜記録をとりつつ、弥生～奈良・平安時代の竪穴建物跡12軒ほかの遺構群の調査を進めた。4月26日に市教委担当者の終了確認を受け、ドローンによる空撮を行った。その後、翌27日に補足調査を行ってA区の調査は終了した。B区は、4月上旬より一部搅乱抜きなどの作業を行っていたが、本格的に遺構調査に入ったのは、5月6日からである。奈良・平安時代の竪穴建物跡5軒を中心とする遺構群の調査・記録を行い、同13日に市教委の終了確認を得た。ドローンによる空撮と補足調査を週明けの同16日に行い、17日の機材関係の撤収作業終了を以て、現地での調査を終了した。

### (2) 整理等作業の経過

整理作業は平成28年4月14日より9月31日までの約5箇月にわたって実施した。現場調査と並行して、手洗いによる遺物洗浄と接合作業、及び測量データの結線図化を進めた。現場終了後の5月

20日に、終了報告や埋蔵物発見届等各方面への提出書類の作成にあたった。

5月27日に遺物の洗浄を終了し、インクジェットプリンターによる注記作業を開始。7月7日から遺物の写真撮影と接合作業を行った。接合にはセメダインCを使用し、復元は石膏を用いて最小限に留めた。同時に遺構図面のデジタルトレース・修正を行い、図版を作成。7月5日に市教委による実測遺物の選別作業を行った後、遺物の手実測と採拓。実測図のデジタルトレースを行った。また、同時進行で現場記録写真(デジタル・カラーリバーサル・モノクロ)のアルバムへの収納と台帳作成を行った。原稿執筆と写真図版等の作成は6月15日より8月22日まで行い、順次報告書編集作業を実施した。8月29日に初稿を入稿。9月下旬に三校を校了し、印刷製本を行い、9月30日に本報告書の刊行となった。  
(小野)

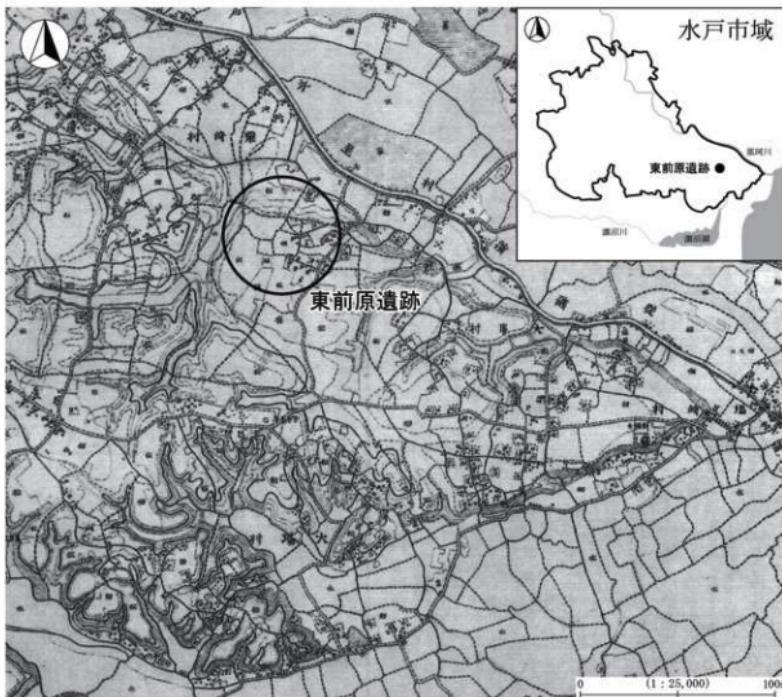


## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

水戸市は、関東平野の北東部、茨城県のほぼ中央に位置する。市域の北部には、西から東へ流れる那珂川とその支流により形成される沖積低地が広がり、これに沿うように東茨城台地が太平洋に向かって突き出している。その下流域右岸の大半が水戸市域となる那珂川は、栃木県の那須連山を水源として、八溝山地の西縁を南へ流れた後、烏山の南から方向を東へ変えて八溝山地を横断し、今度は御前山を背にして南東へ方向を変えて那珂台地と東茨城台地との間を太平洋へと流れ出る。この那珂川の存在により、栃木県域に広がる那須野原や喜連川丘陵などの内陸部と太平洋沿岸部とが水上交通によって結ばれることから、歴史的に水戸市域は交通の要衝地となることが多かった。

東前原遺跡は、東茨城台地の北東部をなす水戸台地の東側縁辺、標高約19mのところに位置しており、東西300m、南北150mほどの畠地に展開する。当該地周辺は明治18(1885)年には広範囲にわたって松林であったことが確認できるが(第2図・第3図)、近年では土地区画整理事業に伴い、大規模な土地改変が行われ、宅地化が進んでいる。



第2図 遺跡の位置 (○が東前原遺跡、1:25,000 明治18年7月第一管地方迅速測図)

## 第2節 歴史的環境

東前原遺跡が立地する東茨城台地、特に東端部には、縄文から近世に至るまで、数多くの遺跡が密集している。ここでは東前原遺跡の周辺に分布する遺跡群とそれらを取り巻く歴史的環境を概観する。東前原遺跡周辺における人々の営みの歴史は先土器時代にまで遡る。当該期の資料は、東前原遺跡と石川川を挟んだ対岸に位置する森戸古墳群からの出土例が知られているのみである。森戸古墳群では、第12号墳(大六天古墳)の発掘調査において、チャートやメノウから構成される石器群の出土が報告されている。それら石器群の大部分は墳丘盛土・周溝覆土内からの出土であるが、剥片であるものの、1点が周溝底面のローム中から出土している(伊藤 1976)。これらの資料のほか、明確に遺跡としてくられた範囲内の採集ではないが、水戸市百合が丘、下入野町地内などにおいて、ガラス製黒色ディサイトや硬質頁岩製の神子柴型尖頭器が採集されている(川口 2005, 2008)。



第3図 周辺の遺跡

(★: 本地点 1:30,000 水戸市埋蔵文化財包蔵地分布図(平成24年度版))

第1表 主要な周辺遺跡一覧

遺跡番号	名称	所在地	種別	遺物	備考
201-006	下胡遺跡	元石川町	集落跡	縄文土器(中・後), 打製石斧, 石鏽, 石錐, 磨石, 四石, 石棒, 石劍。土器片, 破土器(古後)	
201-141	雁沢遺跡	元石川町	集落跡	縄文土器(中), 弥生土器(後), 土師器(古前)	
201-175	大串貝塚	塙崎町	貝塚	縄文土器(前・後), 石製品, 貝月, 鋸野, 朝奕貝	一部国指定
201-176	大串遺跡	塙崎町	集落跡	縄文土器(前・後), 土師器(古・奈・平), 猿恋原(奈・平), 布日瓦, 灰釉陶器	
201-183	小原遺跡	東前町	集落跡	弥生土器(後), 土師器(古・奈・平), 猿恋原(奈・平)	
201-186	金山塙古墳群	大串町	古墳	円筒埴輪, 鉄鏽, 刀子	前方後円(1), 円3(5)
201-187	大串古墳群	大串町	古墳	五面鏡, 鋼輪, 直刀, 鉄鏽, 前鉗, 重環扁板付軒	前方後円1, 円1(5)
201-189	愛宕神社古墳	栗崎町	古墳		
201-192	森戸古墳群	森戸町	古墳	土師器(古), 円筒埴輪, 形象埴輪, 玉玉	前方後円1, 方0(1), 円15(17)
201-193	上平遺跡	栗崎町	集落跡	土師器(古・奈・平), 猿恋原(奈・平)	
201-201	横山廻跡	東前町	城郭跡		
201-202	和乎御跡	栗崎町	城郭跡		
201-242	高原古墳群	大堀町	古墳		円2
201-244	海訪南遺跡	大堀町	集落跡	土師器(古・奈・平), 猿恋原(奈・平)	
201-245	河越遺跡	大堀町	集落跡	土師器(古・奈・平), 猿恋原(奈・平), 球吉土器, 円面鏡, 細縄車, 砥石, 鉄鏽, 鉄鏽	
201-246	桜内遺跡	大串町	集落跡	土師器(古後, 奈・平), 猿恋原(奈・平), 刀子, 円曲鏡, 球吉土器, 陶器, 古銭, 銀貨	
201-247	高原遺跡	大串町	集落跡	弥生土器(後), 土師器(古・奈・平), 猿恋原(奈・平), 土師質土器, 銀貨	
201-248	北屋敷遺跡	大串町	集落跡	土師器(古後, 奈・平), 猿恋原(奈・平), 武, 陶器	
201-249	北屋敷古墳群	大串町	古墳	形象埴輪, 直刀, 小刀, 鉄鏽	円1(2)
201-251	伊豆屋敷跡	栗崎町	城郭跡		
201-252	上野遺跡	栗崎町	集落跡		
201-253	鴨性寺古墳	栗崎町	古墳		
201-254	フジヤマ古墳	栗崎町	古墳		
201-256	海訪神社古墳	栗崎町	古墳		
201-257	千鶴神社古墳	栗崎町	古墳		
201-258	打越遺跡	栗崎町	集落跡	土師器(奈・平), 猿恋原(奈・平)	
201-259	東前原遺跡	東前町	集落跡	弥生土器(後), 土師器(古・奈・平), 猿恋原(奈・平)	本調査遺跡
201-260	佐吉寺古墳	東前町	古墳		
201-261	大串廻跡	大串町	城郭跡		
201-263	宮前廻跡	大串町	集落跡	土師器(奈・平), 猿恋原(奈・平),	
201-299	上の下遺跡	東前町	包蔵地		

縄文時代の遺跡としては、第一に挙げるべきは大串貝塚であろう。大串貝塚は『常陸國風土記』那賀郡条に記された巨人伝説とともに著名な前期貝塚であり、貝塚としては、文献に記載された世界最古のものである。一部が国指定となっているが、その名に恥じぬ豊富な出土資料は、質・量とともに茨城県下における当該期の貝塚を凌駕している(水戸市教委 2010)。また、下烟遺跡では、加曾利E式、大木8b式期の竪穴建物跡をはじめとする遺構群が確認されており(井上 1985)、複式炉を有する住居跡が発見されるなど、中期から後期にかけての人々の営みを窺うことができる。

弥生時代については、東前原遺跡周辺における状況も水戸市全域における傾向に違わず、生活の痕跡は他時期のそれに比べてやや低調な傾向にある。しかしながら、後期に至っては、丘陵沿いの台地上や縁辺部に立地する小原遺跡、高原遺跡、雁沢遺跡などで遺物の採集や出土が報告されており、これらの調査成果の蓄積により、徐々にではあるが、水戸市域における弥生時代の土地利用の様相が像を結びつつある。

古墳時代を迎えると、大串古墳群、北屋敷古墳群、高原古墳群、森戸古墳群などを筆頭に、古墳が活発に築造されるようになる。これらの古墳のうち、北屋敷古墳群第2号墳では発掘調査が実施されており、円筒埴輪、武人をはじめとする人物埴輪、馬形埴輪など形象埴輪が多く出土した(井上 1995)。このうち、ほぼ全身が出土した武人埴輪は水戸市指定文化財となっている。集落の分布と

しては、中期の集落に係る資料に乏しく、周辺では管見に触れないが、前期の集落としては大串遺跡（井上 1994）、後期の集落としては梶内遺跡（樋村 1995）、小原遺跡（第3地点）などの調査事例がある。当該台地上においては、前期・後期とともに活発な土地利用がみてとれる反面、中期における土地利用が緩慢であると言わざるを得ない。このことは集落展開の動態について、中期において相応の変動があったことを示唆するものである。

奈良・平安時代となり、律令制下の中央政権体制が構築されていくなか、水戸市域においても地方末端支配を目的とした郡衙及び郡寺の造営が、渡里町に所在する台渡里官衙遺跡群において行われ、律令体制の中へと組み込まれていくこととなる。水戸市は全域が常陸國那賀郡域内にあり、当該遺跡周辺は同郡芳賀里（郷）に比定される（中山 1979）。当該時期の遺跡として、先ず注目すべきは大串遺跡の存在である。大串遺跡第7地点における発掘調査では、断面がV字状を呈する大型の溝によって区画された内部に、整然と並ぶ総地業の礎石建物跡3棟が確認されている。また、東柱をもち、壇地業を有する桁行6間×梁行3間の大型の掘立柱建物跡なども発見され、一般集落とは大きく異なる様相を示している。大型の掘立柱建物柱抜き取り穴からは多量の炭化材と共に炭化米が、区画溝からも炭化した穀稈や穀稈が出土しており、これらの建物が正倉としての性格を有し、火災により焼失していたことが明らかになっている。また、「厨」銘墨書き土器も出土するなど、官衙的色彩の強さが目立つ遺構・遺物群から、本遺跡は那賀郡内に設置された正倉別院であったであろうことが指摘されている（水戸市教委 2007）。

このほか、梶内遺跡は、7世紀から10世紀まで、途中希薄になる時期は存在するものの、比較的長く継続する集落跡として注視すべき遺跡である。当該遺跡では、「舍人」「長」や里（郷）名を記したとみられる「芳」銘墨書き土器、9点もの円面鏡を出土しており、官衙関連遺跡としての性格を匂わせる（樋村 1995）。また、東前原遺跡直近に位置する小原遺跡では、近年相次いで実施した発掘調査の成果により、6世紀から9世紀にかけて存続した集落であることが明らかになっており、「官」銘墨書き土器の出土から、梶内遺跡と同様の性格を有している可能性が考えられる（太田・土生 2015、齊藤・米川 2016）。以上のような遺跡群の集中する様は、『常陸國風土記』那賀郡条の「平津驛家西一二里有岡名曰大櫛」の記事（秋本 1958）とあわせ、東前原遺跡とその周辺地域が、常陸國那賀郡芳賀里（郷）の中核ともいえる地域であったことを物語っている。

中世、武士が実権を握る時代となり、東前原遺跡が所在する旧常澄村域と重なる恒富郷を根拠としていたのは、常陸平氏大掾氏の一流である石川氏であった（常澄村史編さん委員会編 1989）。東前原遺跡周辺の当該時期の遺跡としては、椿山館跡、和平館跡、大串原館跡が挙げられる。いずれの城館跡も土塁の残存が報告されているが、調査事例が少なく、その詳細については不明な点が多い（水戸市教育委員会 1999）。

近世において、当該地域の台地上は水戸城下の外縁部にあたり、必ずしも前代のような求心力を有する地域であるとは言い難い。しかしながら、当該時期に帰属する溝跡や土坑などは各所で散見され、その土地利用の痕跡を窺うことはできる。なかでも、『新編常陸国誌』などに立原伊豆守の居所と記されている伊豆屋敷跡では、発掘調査の結果、3条の土塁と1条の溝跡が確認されている（井上 1998）。

以上のように、東前原遺跡が立地する台地上には、縄文時代から近世に至るまで、豊富な遺跡が所在している。古代には、大串遺跡や梶内遺跡などの官衙関連遺跡が展開をみせ、古代常陸國那賀郡の中核であった台渡里官衙遺跡群との色濃い関連性は疑うべくもない。現在、東前原遺跡周辺における調査の蓄積には目覚ましいものがある。これらの調査成果の丹念な検討から、当該地域の歴史像が結ばれていくことが期待される（引用・参考文献は第4章末尾参照）。

### 第3節 東前原遺跡における既往の調査

東前原遺跡における調査は、平成20(2008)年の第1地点の試掘調査から始まり、今次調査地点を含めて計12地点において行われている(第4図、第2表)。これらの半数は個人住宅建築に伴う調査面積が狭小な試掘調査であり、東前原遺跡南端部に位置する第6地点にて性格不明遺構が1基確認されたことを除き、明確に埋蔵文化財として捉えられる遺構は検出されていない。しかしながら、表探や調査区表土中では少なからず遺物が散見されていることから、埋蔵文化財が確認できなかつた地点周辺に未だ発見されていない遺構が存在している可能性は極めて高い。また、近年の土地区域整理事業に伴う市道敷設範囲や整地予定地では、3地点(総調査面積434.5m<sup>2</sup>)に亘る試掘調査を実施しており、そのほぼ全ての調査区から濃密な埋蔵文化財の分布を確認している。そのうち、これまでに第3地点第2次及び第8地点第2次で本發掘調査を実施している。なお、第8地点は、事業範囲が広範であったため、工事実施区画にあわせて次数を分け、今般の發掘調査を第4次として実施している。

第3地点第2次では、竪穴建物跡1軒(奈良・平安)や掘立柱建物跡2棟(時期不明)、土坑9基(奈良・平安時代、中近世)、溝跡6条(奈良・平安時代)、柱穴状遺構1基(時期不明)を検出しており、出土遺物としては、土師器、須恵器、鉄製品、石製品、獸骨がある。竪穴建物跡は、一辺が6mを超えるものから2.5mの小型のものなど様々な規模の建物がみられ、主軸方向は北北西—南南東を主とするが、東—西に向いたものもわずかに存在することから、異なる時期の集落が展開していたことが推測される。なお、当該地点で確認された竪穴建物跡の多くは北壁にカマドを持つ形状を基本としているが、そのうち1軒のみ、真北隅にカマドを持つ竪穴建物跡が確認されていることも注視される。

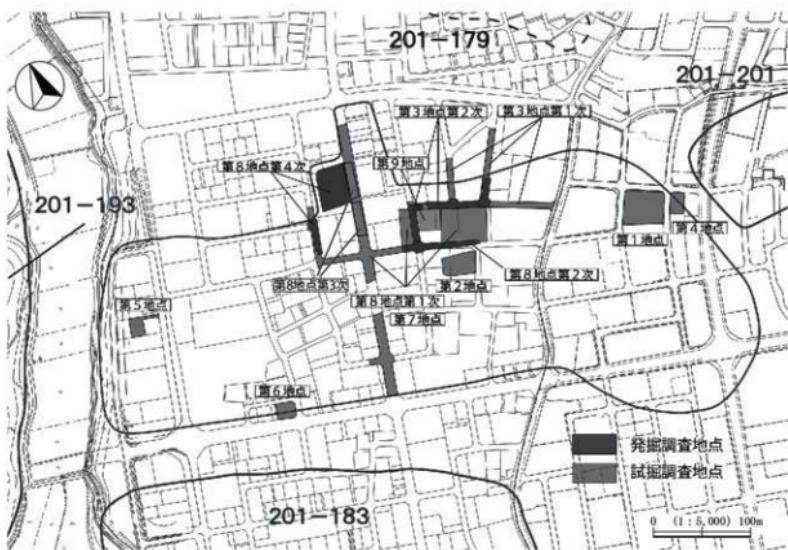
第8地点第2次では、竪穴建物跡6軒(奈良・平安)、掘立建物跡5軒(中近世)、ピット5基(中近世)、土坑9基(中近世)、ピット状遺構群1群(中近世)、溝跡2条(中近世)が確認されており、遺物は土師器(奈良・平安)、須恵器(奈良・平安)、土師質土器(中近世)、陶磁器、銅製品(煙管)が出土している。ほとんどの竪穴建物跡は全体の1/2程度のみの検出に留まり、全容は確認できなかった。建物の主軸は概ね南北方向に向いており、1軒のみ一辺が7m程の大型の竪穴建物跡があるものの、それ以外は4m程度のものが多く、規模や出土遺物から奈良・平安時代に帰属するものとして考えられる。その他、中～近世の円形や方形の粘土張り土坑も検出している。

第8地点第3次では、竪穴建物跡17軒(弥生・奈良・平安)、掘立柱建物跡3軒(奈良・平安)、ピット98基(奈良・平安)、土坑12基(奈良・平安)、溝跡2条(奈良・平安)、竪穴状遺構2基(奈良・平安)、井戸跡1基(中近世以降)、土坑1基(中近世以降)が確認されており、弥生土器、土師器(奈良・平安)、須恵器(奈良・平安)、灰釉陶器(奈良・平安)、土器(奈良・平安)、瓦(奈良・平安)、土製品(奈良・平安)、手捏土器(奈良・平安)、石製品(奈良・平安)、鉄製品(奈良・平安)が出土している。当該地点では、東前原遺跡においては初の確認事例である弥生時代後期の竪穴住居跡2軒を確認している。また、調査区中央には東西に走る大型の溝跡を検出しており、集落を囲繞する区画溝としての機能が想定されているが、築研状の形状や周辺に中世館跡が点在する環境から中世以降まで時期が下ることも考えらえる。なお、本調査区地点においてもこの溝跡の延長プランが確認されている。

これらの多くの竪穴建物跡の確認から、一時その営みが確認されない時期もあるものの、古墳～奈良・平安時代にかけて展開した比較的規模の大きい集落跡であることは明らかとなっている。また、中～近世の遺構も点在していることから長きに亘って土地利用がなされてきたことも間違

ない。

東前原遺跡における主要な発掘調査結果は以上のとおりである。東前原遺跡の全容を語るためにには更なる追加調査を待ちたいが、これまでの調査にて発見された遺構群の在り様から、当該遺跡は東前原地域における土地利用の動態を伝える極めて重要な物証に位置づけられる。  
(米川・丸山)



第4図 東前原遺跡における既往の調査地点 (1:5,000)

第2表 東前原遺跡における既往の調査一覧

地点名	次数	種別	調査期間	調査箇所	調査原因	遺構	遺物	備考
第1地点	1	試験	H.20.11.1.	東前2丁目57・60	個人住宅建築	—	○	
第2地点	1	試験	H.24.2.2.	東前町1098	個人住宅建築	—	—	
第3地点	1	試験	H.26.5.8. ~ 5.6.	東前町1104-1 ~ 1118-1	土地区画整理事業	○	○	
第4地点	1	試験	H.26.7.30.	東前2丁目61, 62	個人住宅建築	—	○	
第5地点	1	試験	H.27.1.22.	東前第二土地区画整理事業75街区符号15区画	個人住宅建築	—	—	
第3地点	2	発掘調査	H.27.2.9. ~ 3.10.	東前町1106-1, 1113, 1115-2, 1116-1, 1117, 1118-1	土地区画整理事業	○	○	
第6地点	1	試験	H.27.4.28.	東前町1147	個人住宅建築	○	○	
第7地点	1	試験	H.27.5.8.	東前町1124-1 ~ 1126	土地区画整理事業	○	○	
第8地点	1	試験	H.27.6.16. ~ 6.19.	東前町1120 ~ 1122-1	土地区画整理事業	○	○	
第9地点	1	試験	H.27.7.15.	東前第二土地区画整理事業48街区符号6・7区画	個人住宅建築	—	—	
第8地点	2	発掘調査	H.27.12.22. ~ H.28.1.20.	東前町1118-1ほか	土地区画整理事業	○	○	
第8地点	3	発掘調査	H.28.3.1. ~ 4.6.	東前町1120, 1209-2・7・9, 1209-10の一部	土地区画整理事業	○	○	
第8地点	4	発掘調査	H.28.3.8. ~ 5.16.	東前町1121, 1192-4, 1209-3・5・6・7・9	土地区画整理事業	○	○	本報告書

## 第3章 調査の方法と成果

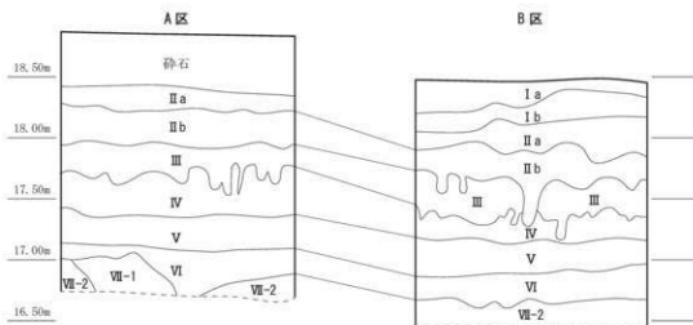
### 第1節 基本層序

A区の西端部中央(TP1), B区南端部(TP2)において基本土層確認のためのテストピットを設け、土層観察作業を行った。I層は近現代の耕作層(表土)で、現地表面を形成する縮りのない耕作土(Ia層)と、その下のやや縮まる旧耕作層(Ib層)に細別される。弥生時代および奈良・平安時代の遺構はII層上面、中・近世と推定される遺構も同よりそれぞれ掘り込まれていた。本来の掘り込み面はより上層と考えられるが、後年の土地造成や耕作等削平・攪拌、正確なところは判然としない遺構確認面はIII層上面とした。VII層が鹿沼バミス層になるが、特にTP1を中心に、地下水の影響によると推定される褐色ローム色に変色した部分が観察された。

基本土層の概要は以下の通りである。

(小野)

- I a. 10YR3/1 黒褐色土 粘性やや有 縮りなし ローム粒・炭化物微量含む。現代の。表土。  
I b. 10YR3/1 黑褐色土 粘性縮りやや有 ローム粒微量含む。旧。  
II a. 10YR2/2 黑褐色土 粘性縮り有 ローム粒・ロームブロック・赤色粒微量含む。遺構の掘り込み面。  
II b. 10YR3/3 暗褐色土 粘性縮り有 ローム粒・ロームブロック少量、黒色粒微量含む。ローム漸移層。根擾乱により侵食されている。  
III. 10YR4/6 褐色土 粘性縮り有 黒色粒・赤色粒微量、微小黄白色軽石ごく微量含む。ソフトローム層。  
IV. 10YR5/6 黄褐色土 粘性有 縮り強い 黑色粒・微小黄白色軽石ごく微量含む。ハードローム層。  
V. 10YR5/6 黄褐色土 粘性有 縮り強い 黑色粒ごく微量含む。上層よりやや暗い。第2黒色帯。  
VI. 10YR4/6 黄褐色土 粘性有 縮り強い 黑色粒ごく微量含む。上層より硬い。  
VII-1. 10YR6/6 明黄褐色土 粘性縮り有 褐色土状に変色した鹿沼層。水被りの影響か。  
VII-2. 10YR7/8 黄橙色土 粘性なし 縮り強い 鹿沼バミス層。一部褐色土状の色調に変色。



※ 土層観察地点は第6・7圖に示す。

第5図 基本層序 (1/40)

## 第2節 遺構と遺物の概要

本調査で検出された遺構は以下の通りである。弥生時代の竪穴建物跡4軒、奈良・平安時代の竪穴建物跡13軒、土坑4基とピット10基、中・近世の溝4条、土坑3基とピット6基が検出された。断絶はありながらも3時代の生活の痕跡がみられたということになる。遺構の分布をみると、弥生時代の竪穴建物跡はA区の北半部に10~15mの間隔をおいてみられる。台地縁辺に近い場所に立地しているともいえる。時期はいずれも弥生時代後期前半と考えられる。奈良・平安時代の竪穴建物跡は南北に長い調査地点の全面に展開する。各竪穴建物跡は切り合いがある建物跡は1箇所のみで、2~10mほどの間隔で散在している。これらの建物跡は奈良時代から平安時代初期~中期であり、この中で2分割されるが、後者の方が軒数が多い。本地点の中央を横断する溝は出土遺物から中・近世と推定されるが、4条共にほぼ並行して東西行している。奈良・平安時代の遺構を壊しており、また竪穴建物跡の軸方位ともずれる。出土遺物は中世~近世のものであり、この時代が奈良・平安時代と一線を画していることは明らかである。なお検出された土坑・ピットは調査区内に点在していて、ピットは並びのみられるものはなかった。

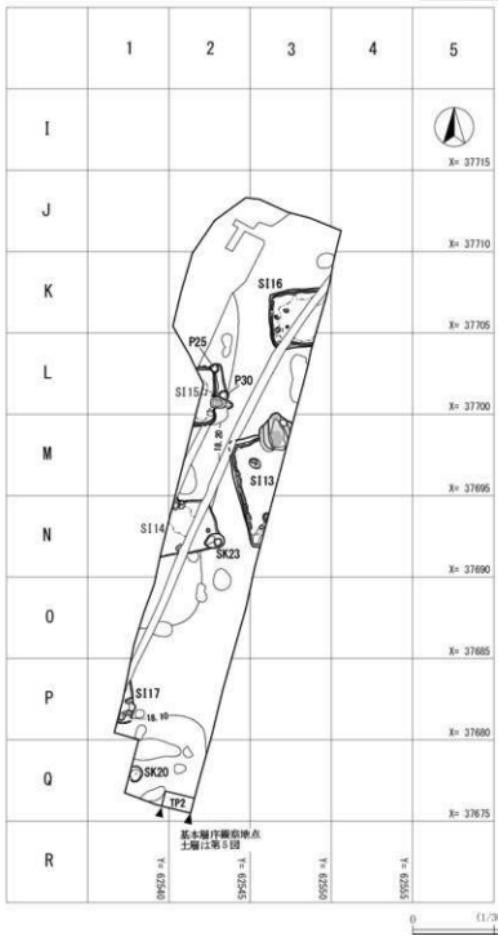
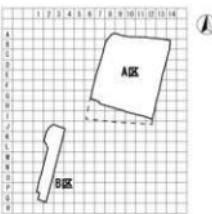
出土遺物は弥生土器が総数434点で、出土場所別に分けると、遺構内は計256点、遺構外は計178点である。器種別・材質別では壺・甕・土製品・石器がみられた。奈良・平安時代は総数2,973点で出土場所別でみると、遺構内の土師器1,476点、須恵器630点、灰釉陶器1点、土製品4点、石製品6点、金属製品9点、製鉄関連遺物18点の計2,146点、遺構外の土師器443点、須恵器377点、瓦4点、石製品5点の計829点である。土師器・須恵器の器種別では壺・高台付壺・壺蓋・塊・高台付塊・皿・高台付皿・盤・鉢・高杯・甑・壺・圓面鏡・小型甕・張がみられる。石製品は支脚がみられ、金属製品の器種は刀子・鎌・釘等がある。特筆すべき遺物としては、S103で類似する2種類の墨書が須恵器壺にみられた。また破片ではあるが、須恵器圓面鏡の破片がS113で出土している。S107からは製鉄関連(小鍛冶)遺物の羽口や鐵滓が検出された。中・近世の遺物は総数16点で、遺構内は計11点で、その内訳は中世の陶器3点、金属製品2点、製鉄関連遺物2点、近世の土器3点、中近世の土製品1点である。遺構外は計5点。

なお、遺構の掲載方法は、特に土坑、ピット(竪穴建物跡に伴うものを除く)は一覧表を作成した。出土遺物も時代毎に破片数、個体数を算出し、第44~49表 出土遺物集計表1~6にまとめた。また、各遺構の事実記載の「出土遺物」の項の集計数は、特にことわらない限りその遺構に伴う時代の遺物のみ掲載している。その遺構に伴わないと考えられる時代の遺物で、図化し得た遺物は第3章第6節 遺構外出土遺物に掲載した。

(鈴木)



第6図 A区遺構図



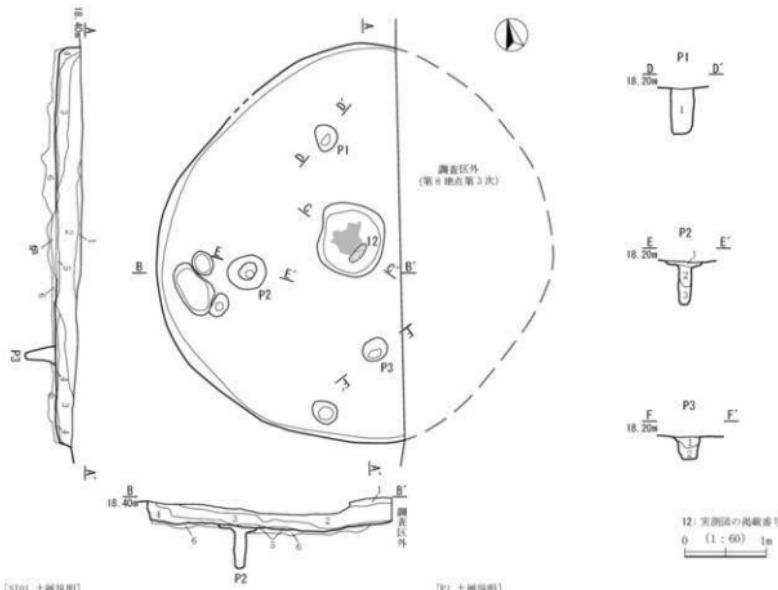
第7図 B区遺構図

### 第3節 弥生時代

#### 1 穴室建物跡

S101

位置・重複関係等 A区の北東部、C・D-13・14グリッドに位置する。東から南にかけての3分の1ほどが調査区外である。



[S101 土層説明]

- 10YRA/4 棕色土 粘性繊り有 ローム粒多量、黑色粘少量、赤色粘少量含む。
2. 10YRA/6 棕色土 粘性繊り有 ロームブロック多量、黑色粘・赤色粘中量含む。
3. 10YR2/2 黑褐色土 粘性繊り有 ローム粒少量、ロームブロック・黑色粘中量、赤色粘少量含む。
4. 10YRC/4 墓褐色土 粘性繊り有 ローム粒・ロームブロック中量、黑色粘少量含む。
5. 10YR3/3 墓褐色土 粘性繊り無 ロームブロック多量、黑色粘少量含む。
6. 10YRA/6 棕色土 粘性やや有 繊り無い ロームブロック多量含む、貼床構造土。

[P1 土層説明]

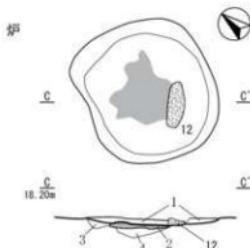
1. 10YR2/2 黑褐色土 粘性繊り有 ローム粒少量、黑色粘少量含む。

[P2 土層説明]

1. 10YR2/2 黑褐色土 粘性繊り有 ローム粒少量含む。
2. 10YR2/3 墓褐色土 粘性繊り有 ローム粒中量含む。
3. 10YR3/3 墓褐色土 粘性繊り有 ローム粒中量、ロームブロック中量含む。

[P3 土層説明]

1. 10YR2/3 墓褐色土 粘性繊り有 ロームブロック少量含む。
2. 10YR2/3 黑褐色土 粘性繊り有 ローム粒・ロームブロック中量含む。



第8図 S101

**形状と規模** 平面形は梢円形を呈し、規模は長軸4.82m、残存値で短軸3.55m、深さ21~33cmを測る。主軸方位は、N-48°-Wを示す。

**壁** 最大壁厚は25cmを測り、ほぼ垂直に掘り込まれている。

**床** 褐色土を用いて全面にわたり、厚さ4~18cmの貼床を構築していた。床面はやや起伏を持つものの、全面にわたって踏み固められ、よく縮まっていた。西壁際と南壁際の床面には窪みがみられる。

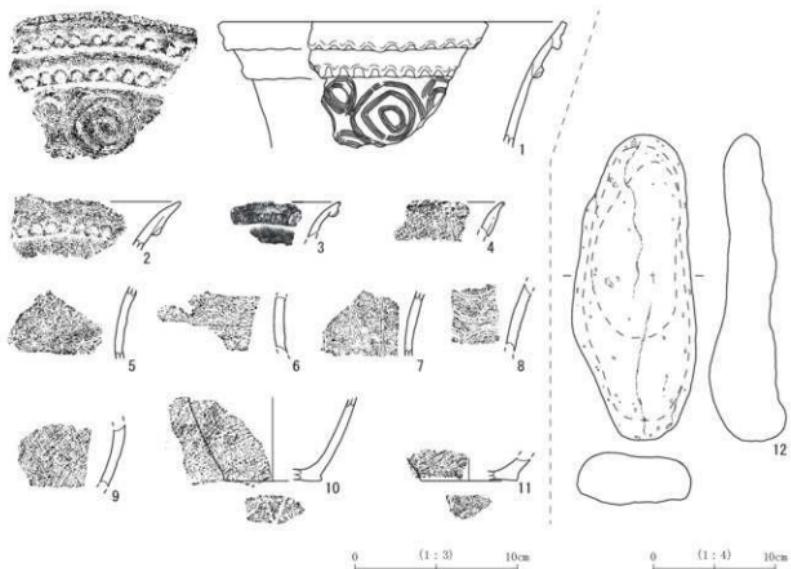
**ピット** 3基検出された(P1~3)。規模はP1が直径33cm、深さ54cm、P2が48×42cm、深さ54cm、P3は30×24cm、深さ30cmを測る。これらは位置と規模・形状から、主柱穴と考えられる。

**炉** 建物跡のほぼ中央に1基構築されていた。南北0.96m、東西0.9m、深さ2~3cmの南北にやや長い梢円形を呈する。火床面はよく赤変している。火床面の南側に炉石(12)が置かれていた。

**覆土** 5層に分けられる。暗褐色土、黒褐色土、褐色土が流れ込んだような堆積を示し、自然堆積と考えられる。6層は貼床である。

**遺物** 覆土中から床面にかけて弥生土器82点、石製品1点(炉石)が出土した。図示したのは12点である。1は、頸部に3本同時施文具による2重・3重の同心円文を描く。2~6も頸部にいずれも3本同時施文具による横走・縦走・斜行文が施され、8は上向き2段、下向き1段の連弧文を施文している。磨石転用炉石(12)は上面に磨り痕が顕著ではあるが、最終的には炉石として使用され、ほぼ全面が赤化していた。

**時期** 出土遺物からは、弥生時代中期後半から後期前半の所産と推定される。



第9図 S101出土遺物

第3表 S101出土土器観察表

No.	器種	法徴(cm)	器形・技法の特徴	計測値(—)前元底、(+)既存底		
				①胎土・②焼成・③色調	出土位置	備考
1	甕	口径:(21.4) 最高:(7.7) 底径:-	口縁～頸部片。頸部から口縁部に向けて外傾して立ちあがる。口唇部は平坦で、半筋綱文類を横位同軸。口縁部は2条の縦筋をめぐらし、各下端に溝する押圧痕。頸部には3条単位の沈線で、2重・3重の同心円文。内外面ともコロナグ。内面下部はタチナグ。	① 小窓、長石、石英粒を含む。 ② 良好。 ③ 外面褐色、内面褐褐色。	北半部 覆土	
2	甕	口径:(-) 最高:(-) 底径:-	口縁～頸部片。頸部から口縁部に向けて外傾して立ちあがる。口縁部は1条の縦筋をめぐらし、下端に溝する押圧痕。頸部には3条単位の沈線で横筋文。口縁部内外面はコロナグ。	① 長石、石英粒を含む。 ② 良好。 ③ 内外面褐色。	東半部 覆土	内面運付着。
3	甕	口径:(-) 最高:(-) 底径:-	口縁～頸部片。頸部から口縁部に向けて直立して立ちあがる。口唇部は突起で、細かい目白を有す。口縁部は1条の縦筋をめぐらし、下端に鋸歯状目。内面はコロナグ。	① 微妙な食入。 ② 良好。 ③ 略褐色。	北半部 覆土	
4	甕	口径:(-) 最高:(-) 底径:-	口縁部片。口縁部は複合口縁。口唇部は解脱5・平底面で、側面突起を加える。口縁部は付加条綱文1+Lを横位同軸。	① 青砂粒を含む。 ② 良好。 ③ 外面黒褐色、内面暗褐色。	北半部 覆土	
5	甕	口径:(-) 最高:(-) 底径:-	頸部片。体部から内溝し、頸部は外反気味に立ちあがる。外面は附加条2種綱文1+K。内面はコロナグ。	① 烧粘輪、裏母を含む。 ② 良好。 ③ 外面褐色、内面褐色。	西半部 床面	
6	甕	口径:(-) 最高:(-) 底径:-	頸部片。頸部は3条単位の沈線による横筋文。底径文は2段以上。内面はコロナグ。	① 長石、石英粒を含む。 ② 良好。 ③ 略褐色。	南半部 床面	
7	甕	口径:(-) 最高:(-) 底径:-	頸部片。頸部は3条単位の沈線で横筋文、斜筋文。内面はコロナグ。	① 長石、石英粒、雲母、針状物を含む。 ② 普通。 ③ 略褐色。	北半部 床面	
8	甕	口径:(-) 最高:(-) 底径:-	頸部片。外面は23条単位の沈線で上向き弧縫文を2段。その下は下向き弧縫文。内面はコロナグ。	① 長石、石英粒を含む。 ② 良好。 ③ 外面褐色、内面暗褐色。	南半部 床面	
9	甕	口径:(-) 最高:(-) 底径:-	体部片。外面は付加条綱文1+Lを横位同軸。内面はコロナグ。	① 微妙な食入。 ② 良好。 ③ 外面暗褐色、内面黒褐色。	北半部 覆土	
10	甕	口径:(-) 最高:(5.1) 底径:(6.0)	平底から体部は内腹しつ立ちあがる。体部下位から底盤上面まで半筋綱文1Rを横位同軸。底盤外周に木葉模。内面はコロナグ。	① 長石、石英粒を多量に含む。 ② 普通。 ③ 外面褐色、内面褐色。	南半部 床面	外曲運付着、内曲運燃熱風。
11	甕	口径:(-) 最高:(1.4) 底径:(6.0)	平底から体部は直腹直上で直立し外傾する。体部下位は付加条綱文1種の1R+Kを横位同軸。底盤外周に木葉模。内面はコロナグ。	① 長石、石英粒、裏母含む。 ② 普通。 ③ 外面褐色、内面黒褐色。	南半部 覆土	内面運付着。

第4表 S101出土石器観察表

No.	器種	法徴(cm)	重量(g)	特徴	計測値(—)前元底、(+)既存底		
					石材	出土位置	備考
12	石器 磨石	長さ:29.3 幅:31.9 厚さ:6.3	2,998.3	完形品。上下面、側面に磨り板。上面の磨り板は粗著。	安山岩	炉上面	炉石に転用、全面被燃。

## S102

位置・重複関係等 A区の北端、A・B-11・12グリッドに位置する。北側の半分以上が調査区外である。西壁の一部と北側床面を搅乱により削られていた。

形状と規模 平面形は長楕円形と推測され、規模は残存値で長軸2.18m、短軸3.26m、深さ26cmを測る。主軸方位は、N-10°-Eを示す。

壁 最大壁高は27cmを測り、比較的急傾斜で掘り込まれている。

床 褐色土を用いて全面にわたり、厚さ2~4cmの貼床を構築していた。床面は概ね平坦で、全面が踏み固められていた。

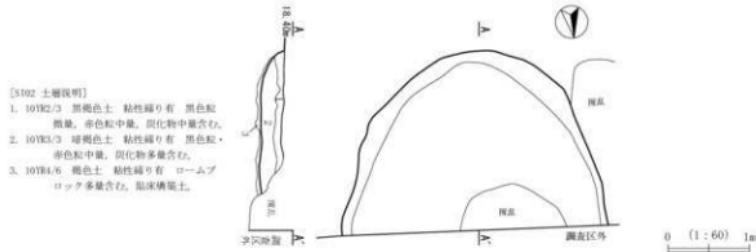
ピット 調査区内では確認されなかった。

炉 調査区内では確認されなかった。

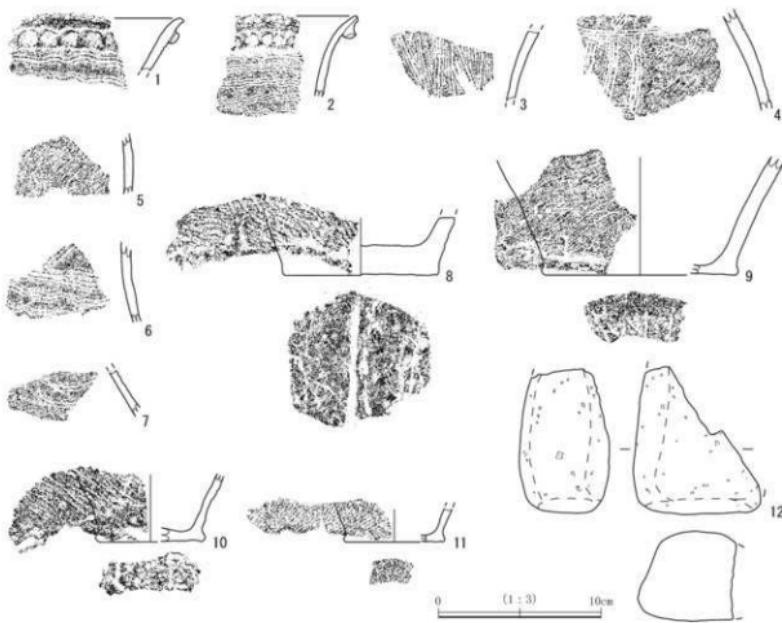
覆土 2層に分けられる。暗褐色土、黒褐色土が流れ込んだような堆積を示し、埋没状況は、自然堆積と考えられる。3層は貼床である。

遺物 弥生土器119点、石器1点(磨石)が出土した。図示したのは12点である。覆土の中～上層のものが多い。土器(11)、石器(12)は床面からの出土である。

時期 出土遺物からは、弥生時代後期前半の所産と推定される。



第10図 S102



第11図 S102出土遺物

第5表 S102出土土器観察表

No.	器種	法値(cm)	器形・技法の特徴	測量値 (—) 深度値 (—) 幅巾		
				①胎土	②性成	③色調
1	壺	口径: 18.5 器高: - 底径: -	口縁一部鋸切片。胎部から内溝しつつの縫隙に至る。口肩部は平場で、付加条縫文(ヨーク)を押出回転。口縁直下に1条の縫隙をめぐらし、下端に連続する押压痕。底部は4稜柱位の沈窪で底状文2段。内部はヨコナガズ。	①長石、石英粒、針状物を含む。 ②良好。 ③外表面褐褐色。内面褐色。		東半部 床面
2	壺	口径: - 器高: - 底径: -	口縁一部鋸切片。胎部から縫隙に向けて外反して立ちあがる。口縁部は1条の縫隙をめぐらし、下端に連続する押压痕。口肩部は平場で、付加条縫文(ヨーク)を施す。内部はヨコナガズ。	①長石、石英粒、針状物を含む。 ②良好。 ③褐色。		西半部 壁土
3	壺	口径: - 器高: - 底径: -	縫隙片、縫隙上端に横肋比縫がめぐり、以下に3条単位の比縫で、U字形を描く。内部はヨコナガズ。	①長石、石英粒を含む。 ②良好。 ③褐褐色。		東半部 床面

No.	器種	法量(cm)	器形・技法の特徴	①胎土・②焼成・③色調	出土位置	備考
4	壺	口径: - 器高: - 底径: -	瓶部～体部。体部から頸部にかけて内側する。頸部は無文地に3本単位の波線で下端を内側に。斜行文を描く。体部には单把縫文L型の模印回転の地文に3条単位の波線で縦長の長方形区画文。内面はヨコナダ。	①長石、石英粒を含む。 ②良好。 ③外面部灰褐色。内面部褐色。	西半部 覆土	
5	壺	口径: - 器高: - 底径: -	体部片。体部は付加条縫文L型+Lを模印回転で施す。内面はヨコナダ。	①長石、石英粒、雲母、針状物を含む。 ②良好。 ③暗褐色。	東半部 床面	外面部模付着。
6	壺	口径: - 器高: - 底径: -	瓶部片。瓶部上部に4条単位の波線で横縫文の上に斜行文。下部は2条縫文で波状文を2段以上。内面はヨコナダ。	①長石、石英粒を含む。 ②良好。 ③褐色。	東半部 覆土	
7	壺	口径: - 器高: - 底径: -	瓶部～体部。体部から頸部にかけて内側する。頸部に3条単位の波線で上向き波状文を描く。体部は付加条縫文L型+Lを模印回転。内面はヨコナダ。	①長石、石英粒を含む。 ②良好。 ③褐色。	東半部 覆土	外面部模付着。
8	壺	口径: - 器高: (3.5) 底径: (9.6)	平底から体部は各層して立ちあがり、底端部は突出する。底部外面に木葉瓶。体部下位は付加条縫文L型+Lを模印回転。内面はナガ。	①長石、石英粒、雲母、针状物を多量に含む。 ②普通。 ③赤褐色。	西半部 覆土	
9	壺	口径: - 器高: (7.2) 底径: (12.0)	平底から体部は外傾して立ちあがる。底端部は突出する。底部外面に木葉瓶。体部下位は付加条縫文L型+L。内面はヨコナダ。	①長石、石英粒、雲母、针状物を含む。 ②良好。 ③外面部黄褐色。内面部褐色。	西半部 床面	
10	壺	口径: - 器高: (4.1) 底径: (6.8)	平底から体部は各層して立ちあがる。底端部は突出する。底部外面に木葉瓶。体部下位は付加条縫文L型+Lを模印回転。内面はヨコナダ。	①長石、石英粒を含む。 ②良好。 ③暗褐色。	東半部 床面	外面部模付着。
11	壺	口径: - 器高: (2.0) 底径: (6.2)	平底から体部は各層して立ちあがる。底端部は突出する。底部外面は有目瓶。体部下位は单把縫文L型を模印回転。内面はヨコナダ。	①砂粒。针状物を含む。 ②普通。 ③外面部褐色。内面部灰褐色。	東半部 床面	外面部熟成。

第6表 S102出土石器観察表

No.	器種	法量(cm)	重量(g)	特徴	石材	出土位置	備考
12	石器 磨石	長さ(9.1) 幅 (7.7) 厚さ: 5.6	(369.1)	欠損。断面は削減している。上下面および側面(2面)に磨り痕を残す。	安山岩	西半部 床面	

## S105

位置・重複関係等 A区の北西部、B・C-8・9グリッドに位置する。中央部S104に。

形状と規模 平面形は闊丸長方形を呈し、長軸4.75m、短軸3.52m、深さ30~35cmを測る。主軸方位は、N-54°-Wを示す。

壁 最大壁高は32cmを測り、ほぼ垂直に掘り込まれている。

床 地山のⅢ層上面を床としていた。床面は概ね平坦で、全面が踏み固められていた。

ピット 中央付近より6基が確認された(P1~6)。このうち、P2~5は重複するS104の掘り方中から検出されたが、位置及び覆土の様相から本跡に伴うと判断した。規模・形状と位置から、P1・2・3・6が主柱穴と考えられる。規模はP1は残存値で30×18cm、深さ48cm、P2が30×24cm、深さ24cm、P3は30×27cm、深さ36cm、P6は33×24cm、深さ30cmを測る。またこれ以外のP4・5は小型である。規模はP4が21×15cm、深さ14cm、P5は直径15×12cm、深さ36cmを測る。

土坑 東壁に接して2基の土坑が検出された(SK1・2)。切り合はSK1がSK2を切り込んでいる。建物廃絶時点でSK1は開口していたと考えられる。SK1は平面形は半円形で、北壁に接する。規模は長軸83cm、短軸40cm、深さ10cmを測る。SK2は平面形は半円形で、北壁に接する。規模は残存値で長軸80cm、短軸50cm、深さ15cmを測る。

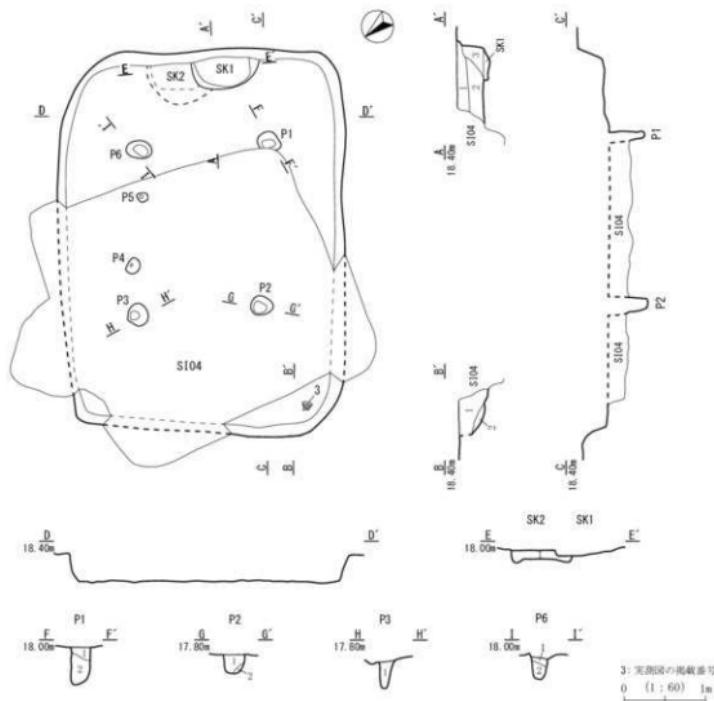
炉 S104の構築時に削平されたと推測される。

覆土 3層に分けられる。黒褐色土が流れ込んだような堆積を示し、埋没状況は、概ね自然堆積と考えられる。

遺物 弥生土器50点、土製品1点(紡錘車)が出土した。また、弥生土器は重複するS104の覆土中

からも95点が出土しているが、これは本跡からの混入であると判断して、掲載遺物の対象とした。図示したのは弥生土器14点、土製品1点である。3は西隅床面での出土で、頸部に4本同時施文具により背合わせ型の重層連弧文が施文されている。14は土製鍊車で、側面には刻みが入れられている。

時期 出土遺物からは、弥生時代後期前半の所産と推定される。



[SK1 土層説明]

1. 10W2/2 黒褐色土 粘性繊り有 ローム粒中量、黒色粒・赤色粒微量含む。
2. 10W1/2 黒褐色土 粘性繊り有 ローム粒・粘土粒少量含む。
3. 10W1/2 黒褐色土 粘性繊り有 ローム粒・ロームブロック・赤色粒少量含む。

[SK2 土層説明]

1. 10W3/2 黒褐色土 粘性繊り有 ローム粒・ロームブロック少量、赤色粒微量含む。

[SK3 土層説明]

1. 10W2/3 黒褐色土 粘性繊り有 ロームブロック多量、赤色粒微量含む。

[P1 土層説明]

1. 10W2/2 黒褐色土 粘性繊り有 ローム粒少量、ロームブロック中量含む。
2. 10W3/4 塗褐色土 粘性やや有 繊り有 ローム粒多量、ロームブロック少量、黒色粒微量含む。

[P2 土層説明]

1. 10W3/3 塗褐色土 粘性有 繊りやや有 ローム粒多量、黑色粒微量含む。
2. 10W4/4 塗褐色土 粘性繊り有 ローム粒多量含む。

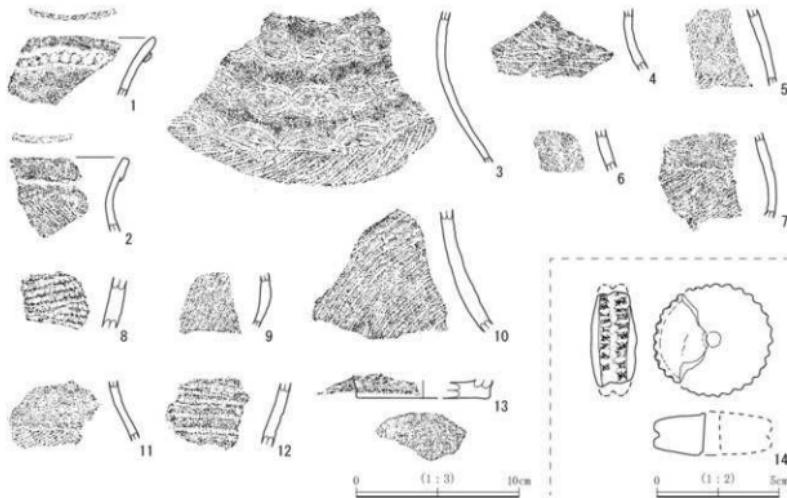
[P3 土層説明]

1. 10W4/4 塗褐色土 粘性繊り有 ローム粒多量含む。

[P6 土層説明]

1. 10W3/2 塗褐色土 粘性やや有 繊り有 ロームブロック中量、黑色粒微量含む。
2. 10W4/4 塗褐色土 粘性繊り有 ロームブロック多量、黑色粒微量含む。

第12図 S104



第13図 S105出土遺物

第7表 S105出土土器観察表

No.	器種	法典(cm)	器形・技法の特徴	出発場(1)前文組、(2)後文組		
				①断土・②焼成・③色調	出土位置	備考
1	壺	口径: - 器高: - 底径: -	口縁部へ斜面片。頭部から口縁部に向けて外傾して立ちあがる。口縁部は單葉織文と横柱回転。口縁部無文部下に1条の降垂をめぐらせる。降垂上には連續する押抜痕。無部には4条単位の压縮で後文式を2段。下に横脱文。内面はヨコナガ。	①長石、石英粒を含む。 ②普通。 ③暗褐色。	北東部 覆土	
2	壺	口径: - 器高: - 底径: -	口縁へ斜面片。頭部から口縁部に向けて外傾して立ちあがる。口縁部は複合口縁で無文部。口唇部は單葉織文類。頭部は付加条織文類。無部は横柱回転。頭部は付加条織文類。内面はヨコナガ。	①長石、石英粒を含む。 ②普通。 ③暗褐色。	S104 覆土	外曲環付器。
3	壺	口径: - 器高: - 底径: -	頭部へ体部片。体部は内側し、頭部は直立気味に立ちあがる。頭部に4条単位の伏継で横脱文と上部に対する連続文を描。体部との接続部には上向き張脱文の描く(張脱文は左から右へ施す)。体部は付加条織文類。内面はヨコナガ。	①長石、石英粒、針状物を含む。 ②良好。 ③外曲褐色～暗褐色。内面褐色。	東端部 床面	外曲面下辺覆付器。
4	壺	口径: - 器高: - 底径: -	頭部へ体部片。体部から内溝して頭部は直立して立ちあがる。外表面は付加条織文とHを基位。斜位回転。内面はナダ。	①長石、石英粒、針状物を含む。 ②良好。 ③外曲褐色。	S104 覆土	
5	壺	口径: - 器高: - 底径: -	頭部へ体部片。体部から内側して頭部に変る。体部と頭部は3条単位の沈継の横脱文で区画し、その後上に斜行文。体部は付加条織文H+L。内面はナダ。	①長石、石英粒、針状物を含む。 ②良好。 ③暗褐色。暗褐色。	北東部 覆土	
6	壺	口径: - 器高: - 底径: -	頭部片。頭部は直立気味となる。外表面に3条単位の沈継でY字形を描く。内面はヨコナガ。	①長石、石英粒を含む。 ②普通。 ③暗褐色。	北東部 覆土	
7	壺	口径: - 器高: - 底径: -	頭部へ体部片。体部から頭部へ内溝して立ちあがる。頭部と体部を4条単位の沈継の横脱文で区画し、頭部は後文式を2段。体部は結節回転文を伴う付加条織文H+L。内面はヨコナガ。	①長石、石英粒を含む。 ②普通。 ③暗褐色。	北東部 覆土	外曲環付器。 内曲被熟剥落。
8	壺	口径: - 器高: - 底径: -	体部片。外表面は单葉織文Hを横柱、斜位回転。内面は丁寧なヨコナガ。	①長石、石英粒を含む。 ②良好。 ③外曲褐色。内面褐色。	北東部 覆土	
9	壺	口径: - 器高: - 底径: -	体部片。体部は内溝して立ちあがる。体部は付加条織文H+Lを横柱回転。内面はヨコナガ。	①長石、石英粒を含む。 ②普通。 ③外曲褐色。暗褐色。内面褐色。	S104 覆土	
10	壺	口径: - 器高: - 底径: -	頭部へ体部片。体部から頭部にかけて外反して立ちあがる。外表面付加条織文H+Lを横柱回転。内面はヨコナガ。	①長石、石英粒を含む。 ②良好。 ③黄褐色。	S104 覆土	
11	壺	口径: - 器高: - 底径: -	頭部へ体部片。体部から頭部にかけて外反して立ちあがる。頭部と体部を4条単位の横脱文で区画し、頭部は沈狀文と横脱文。体部は結節回転文を伴う付加条織文Hを横柱回転。内面はナダ。	①長石、石英粒を含む。 ②普通。 ③外曲褐色。内面灰褐色。	S104 覆土	内曲被熟剥落。

No.	器種	法華(cm)	器形・技法の特徴	①胎土・②焼成・③色調	出土位置	備考
12	壺	口径: - 器高: - 底径: -	体部片。体部は外傾して立ちあがる。外面は付加条綱文R+L。内面はナグ。	①長石、石英粒を含む。 ②普通。 ③褐色。	S104 覆土	内面焼付有。
13	壺	口径: - 器高(1.3) 底径: (8.4)	平底から体部は直立変形に立ちあがる。体部下位は付加条綱文R+Lを横回転。底部外面に布目模。内面はナグ。	①長石、石英粒を含む。 ②普通。 ③褐色。	S104 覆土	

第8表 S105出土土器観察表

No.	器種	法華(cm)	重量(g)	特徴	法華編: ( )前元編, ( )既存編		
					①胎土・②焼成・③色調	出土位置	備考
14	土器品 絆輪車	直径: (4.8) 孔径: (3.6) 厚さ: 0.9	(11.8)	中央穿孔。上下面ナグ。側面には1条の沈線をめぐらし、上下端に刻目を行す。	①長石、石英粒を含む。 ②普通。 ③褐色。	南西角 床面	

## S109

位置・重複関係等 A区の西壁際, E-7グリッドに位置する。西側の大部分が調査区外である。

形状と規模 平面形は長楕円形あるいは隅丸長方形を呈し、残存値で長軸3.2m、短軸0.97m、深さ20~28cmを測る。主軸方位は、N-2°-Eを示す。

壁 最大壁高は30cmを測り、ほぼ垂直に掘り込まれている。

床 Ⅲ層上面と、古い倒木痕を床としていた。床面はやや起伏を持ち、縦りはやや弱い。

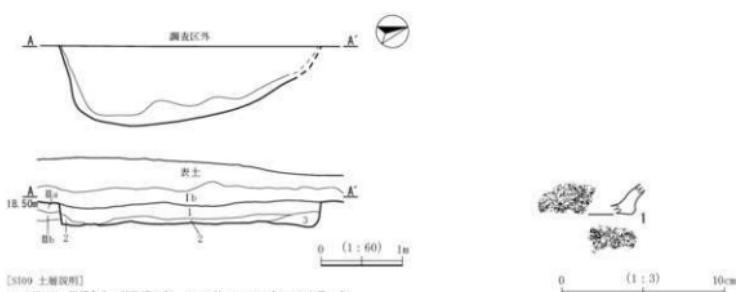
炉 調査区内では確認されなかった。

覆土 3層に分けられる。黒褐色土及び黒色土が流れ込んだような堆積を示し、自然堆積と考えられる。

遺物 覆土中から弥生土器2点が出土した。図化したのは1点のみである。

時期 出土遺物は少ないものの、弥生時代後期前半と推定される。

(小野・鈴木)



第15図 S109出土遺物

第14図 S109

第9表 S109出土土器観察表

No.	器種	法華(cm)	器形・技法の特徴	①胎土・②焼成・③色調	出土位置	備考
1	壺	口径: - 器高: - 底径: -	平底から体部は外反して立ちあがる。体部下位は付加条綱文R+L。底部外面に布目模。	①長石、石英粒を含む。 ②普通。 ③褐色。	覆土	

## 第4節 奈良・平安時代

### 1 竪穴建物跡

S103

位置・重複関係等 A区北西部、C-8・9グリッドに位置する。

形状と規模 平面形は正方形を呈し、規模は南北3.02m、東西3.39m、深さ24~36cmを測る。主軸方位は、N-21°-Eを示す。

壁 最大壁高は25cmを測り、比較的急傾斜で掘り込まれている。

壁溝 北西角付近から南東角までの壁沿いに確認された。幅13~20cm、深さ5~8cmを測る。

床 褐色土を用いて全面にわたり、厚さ2~12cmで貼床を構築していた。やや起伏を持つものの、概ね平坦である。西壁沿いを除き、全面にわたって踏み固められ、硬化していた。

ピット 南壁際で2基確認された(P1・2)。P1は18×21cm、深さ18cm、P2は直径24cm、深さ20cmを測る。位置からすると出入り口に伴うものと推定される。

床下土坑 贊床の下から土坑が3基確認された(SK1~3)。SK1はカマド焚口前方に位置するが、上面が硬化しており、覆土中に焼土を含まないことから、カマドに先行すると判断した。平面形は半円形で、規模は残存値で長軸96cm、短軸60cm、深さ12cmを測る。SK2・3は掘り方の掘削中に検出された。SK2は西壁際に位置し、平面形は不整梢円形を呈し、長軸114cm、短軸96cm、深さ18cmを測る。SK3は東壁寄りに位置する。平面形は梢円形を呈し、長軸99cm、短軸69cm、深さ30cmを測る。いずれもロームブロックを含む埋め戻したような覆土である。

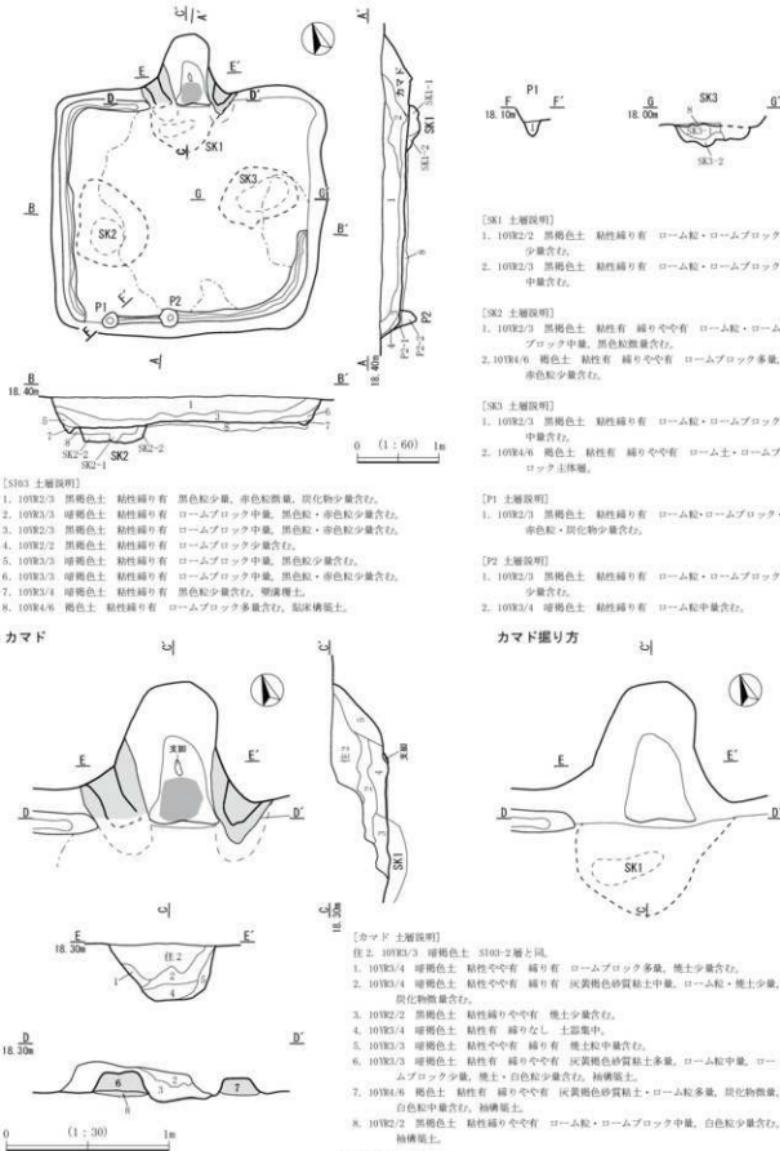
カマド 北壁の中央に構築されていた。規模は残存値で長108cm、幅118cm、両袖部の内法42cmを測る。袖部は灰褐色砂質粘土と暗褐色土の混合土を用いて構築されており、竪穴建物跡の覆土と似ていたために確認・検出が困難であった。天井部は崩落しており、2層がそれに該当すると考えられる。燃焼部から煙道部には、広い範囲に焼土が堆積しており、火床面は赤化している。火床面奥に支脚の最下部(凝灰岩製切石)のみが残されていた。

覆土 7層に分けられる。黒褐色土、暗褐色土が流れ込んだような堆積を示し、自然堆積と考えられる。8層は貼床である。

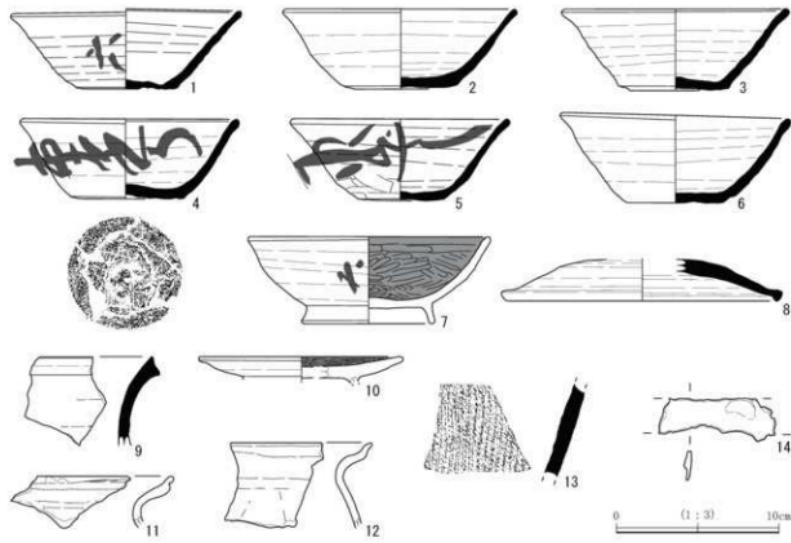
遺物出土状況 カマドの正面から北東隅にかけては、床面に环や甕の破片が散在していた。

遺物 覆土から土師器278点(环類、高台付环・高台付皿・小型甕・甕)、須恵器87点(环・环蓋・甕)、石製品1点(支脚)、金属製品1点(器種不明)、掘り方から土師器14点(甕)、須恵器2点(甕)が出土した。図化したのは覆土から出土した14点である。1~6の須恵器环はいずれも類似する器形で、底部は回転ヘラ切りのものが主である。7・10は内黒処理の高台付环と皿である。11・12は常縦型甕である。須恵器环には体部外面に墨書のあるものが4点みられる。1・7の体部には漢数字の「六」のような文字があり、4・5の体部には縦書き3文字?が書かれるが、同じ文字のように思われる。1・7も同じ文字であるとすれば、2個体ずつ認められるということになる。

時期 出土遺物からは、9世紀中葉と推測される。



第16図 S103



第17図 S103出土遺物

第10表 S103出土土器観察表

%	器種	法値(cm)	器形・技法の特徴	①粉土・②焼成・③色調	出土位置	備考
1	須恵器 环	口径:14.2 器高:5.9 底径:6.4	平底から体部は直線的に外傾して立ちあがり、口縁部は外反する。外側は横に擦り残る。内面はヨコナナ。底部外側は回転へタ切りの後、回転へタケツリ。	①小穂、長石、石英粒を含む。 ②良好。 ③灰青灰色。	北東部 床面	体部外面(墨書き) [六点](横向き)
2	須恵器 环	口径:14.9 器高:4.9 底径:7.1	平底から体部は内溝気味に立ちあがり、口縁部は外反する。内面はヨコナナ。底部外側は回転へタ切りの後、回転へタケツリ。	①長石、石英粒を含む。 ②良好。 ③灰色。	北東部 床面	
3	須恵器 环	口径:14.0 器高:5.0 底径:6.8	平底から体部は内溝気味に立ちあがり、口縁部は外反する。外側に擦り残り、内面はヨコナナ。底部外側は回転へタ切りの後、回転へタケツリ。中央部は少し凹み、焼成前の焼け跡(不明)あり。	①長石、石英粒、針状物を含む。 ②良好。 ③灰色。	南東部 壁面	
4	須恵器 环	口径:13.5 器高:4.9 底径:7.0	平底から体部は内溝気味に立ちあがり、口縁部は外反する。内面はヨコナナ。底部外側は回転へタ切りの後、回転へタケツリ。中央部は少し凹み、焼成前の焼け跡(不明)あり。	①長石、石英粒を含む。 ②良好。 ③明るい灰色。	南西部 床面	体部外面(墨書き) [不明](墨書き) [文字なし]
5	須恵器 环	口径:13.5 器高:5.0 底径:5.2	平底から体部は内溝気味に立ちあがり、口縁部は外反する。内面はヨコナナ。底部外側は回転へタ切りの後、ハタケツリ。体部下位に擦り残り、内面はヨコナナ。	①長石、石英粒、針状物を含む。 ②良好。 ③灰色。	背面窓付村 壁上	体部外面(墨書き) [不明](墨書き)
6	須恵器 环	口径:14.2 器高:5.5 底径:6.2	平底から体部は内溝気味に立ちあがり、口縁部は外反する。内面はヨコナナ。底部外側は回転へタ切りの後、回転ナダ。	①小穂、長石、石英粒、針状物を含む。 ②良好。 ③深紅色。	北東部 壁上	外面保材村。
7	土師器 高台付環	口径:14.8 器高:5.3 底径:6.2	平底から体部は内溝して立ちあがり、口縁部に割れ。高台はやや外傾して貼付。体部下半は回転へタケツリ。上半はヨコナナ。高台部外側は回転ナダ。高台内側は丁寧なタガキ、黒色地。	①長石、石英粒を少許含む。 ②良好。 ③深紅色。	南東部 壁面	体部外面(墨書き) [六点](横向き)
8	須恵器 环画	口径:17.3 器高:2.6	天井部は平田字になり、縁部に向て落輪する。端部は堅く立ちあがる。天井部は回転へタケツリ。内外面はヨコナナ。縁部内外面は墨ねき痕で、変色。	①小穂、長石、石英粒含む。 ②良好。 ③灰色。	南東部 壁上	
9	須恵器 環	口径: - 器高: - 底径: -	体部から縁部は外反して立ちあがり、口縁部は外斜が付。内面はヨコナナ。表面自然剥離跡。	①長石、石英粒含む。 ②良好。 ③外赤黄褐色、内面暗褐色。	南東部 壁上	
10	土師器 高台付皿	口径:12.5 器高:1.6 底径:7.0	平底から体部は直線的に外傾して開き、口縁部に張る。高台は外傾して貼付(欠損)。底部外側はヨコナナ。高台部外側は回転ナダ。内面は丁寧なタガキ、黒色地。	①長石、石英の微粒含む。 ②良好。 ③深紅色。	北西部 床面	
11	土師器 皿	口径: - 器高: - 底径: -	縁部はくびれ、口縁部はぐの字状に立ちあがり、口縁部は擴みあげ。内面はヨコナナ。	①長石、石英粒を含む。 ②良好。 ③褐色。	北西部 壁上	

12	土師器 甕	口径: - 底高: - 底径: -	瓶頭はくびれ、口縁部はくの字状に立ちあがり、口唇部は摘みあげ、外側 口縁部・瓶頭部はコナデ。体圓はナダ。内底はナダ。	① 長石、石英粒を含む。 ② 良好。 ③ 外面滑熱感。内面褐色。	カマド 埋土	
13	須恵器 甕	口径: - 底高: - 底径: -	瓶頭片。外表面は縦位の平行タキ目。内面は剥落のため調査は不明。	① 長石、石英粒。實得を含む。 ② 良好。 ③ 塗灰色。	埋土	北西部被熱。

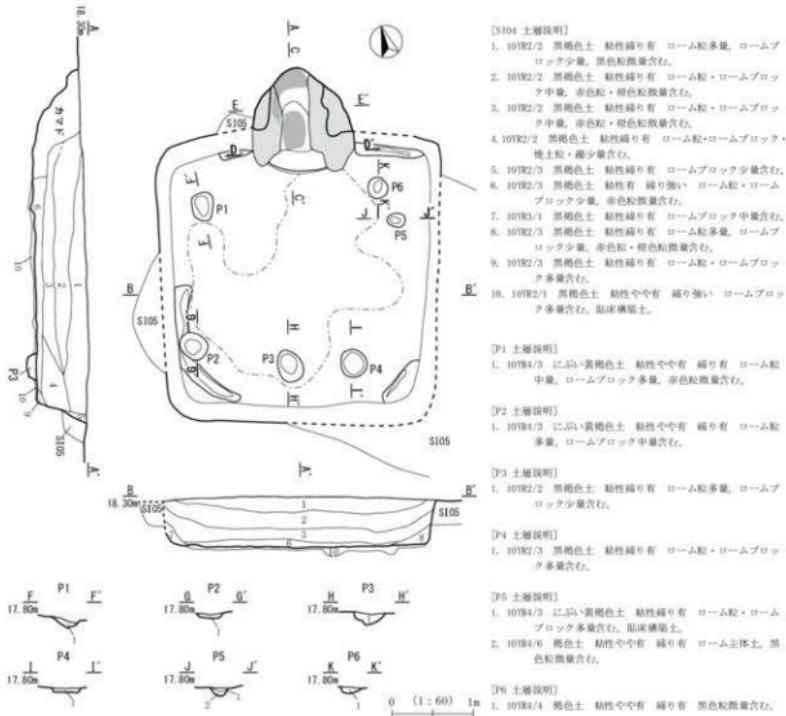
第11表 S103出土金属製品観察表

No.	形種	法徴(cm)	重量(g)	特徴	出土位置	備考
14	鉄製品 不明	長さ: (7.1) 幅: (2.6) 厚さ: (0.4)	9.7	平らな鉄製品。刃部を持つか。	北東部 床面	

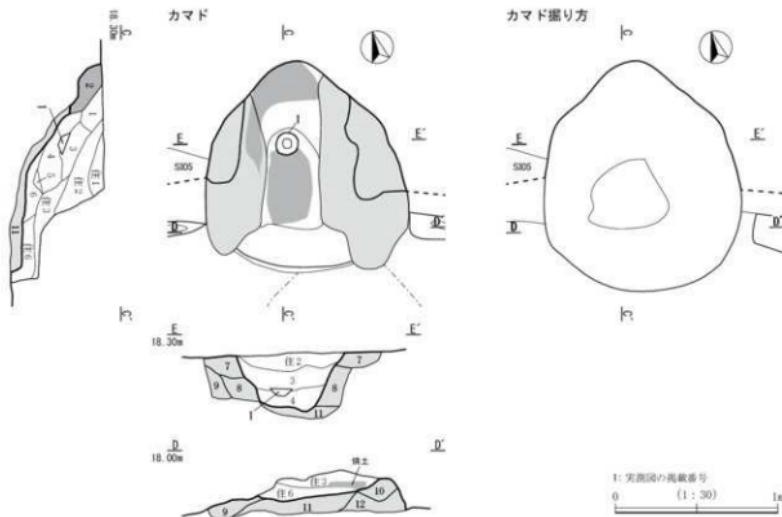
## S104

位置・重複関係等 A区の北西部、B・C-8・9グリッドに位置する。S105の中央部を切り込んでおり、本遺構の床面はS104の床面を突き抜けて、IV層に達していた。

形状と規模 平面形は正方形を呈し、規模は残存値で南北3.60m、東西3.52m、深さ57~62cmを測る。主軸方位は、N-13°-Eを示す。



第18図 S104(1)



〔カマド・土壤説明〕

- 住上. 10YR2/2 黒褐色土 S104-1層と同。
- 住上. 10YR2/2 黑褐色土 S104-2層と同。
- 10YR2/2 黑褐色土 S104-3層と同。
- 住上. 10YR2/3 黑褐色土 S104-6層と同。
- 1. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 粘性繊りやや有 ローム粒・焼土中量、繊少量含む。  
崩落天井部。
- 2. 10YR2/3 黑褐色土 粘性なし 繊りやや有 地下多量、炭化物少量含む。傳道の被熱面。
- 3. 10YR2/2 黑褐色土 粘性繊り有 ロームブロック・燒土少量含む。
- 4. 10YR3/3 嫩褐色土 粘性繊りやや有 地下多量、燒土塊・被熱ロームブロック多量。  
炭化物微量含む。天井崩落部。
- 5. 10YR2/2 黑褐色土 粘性繊りやや有 地上粘・地上少量含む。
- 6. 10YR2/3 黑褐色土 粘性やや有 繊り有 ローム粒多量、燒土・炭化物少量含む。

第19図 S104(2)

壁 最大壁高は62cmを測り、ほぼ垂直に掘り込まれている。

壁溝 北壁のカマドの両脇と南西・南東の角付近に断片的に確認された。幅10~24cm、深さ4~7cmを測る。

床 黒褐色土を用いてほぼ全面にわたり、厚さ2~10cmの貼床を構築していた。床面は概ね平坦である。中央部から西側にかけて踏み固められ、硬化していた。

ピット 建物跡の四隅近くと南側中央の壁沿いに6基確認された(P1~6)。規模はP1は39×27cm、深さ12cm、P2は直径36cm、深さ9cm、P3は48×36cm、深さ12cm、P4は36×30cm、深さ6cm、P5は21×18cm、深さ12cm、P6は27×24cm、深さ9cmを測り、いずれも浅い。P3は位置からみれば出入口に伴う可能性がある。

カマド 北壁の中央に構築されていた。全長133cm、幅124cm、両袖部の内法34cmを測る。袖はにぶい黄褐色砂質粘土と暗褐色土の混合土を用いて構築されていた。天井部は崩落しており、1~4層が該当すると考えられる。この層の上に、完形品の須恵器環(1)が正位で出土した。燃焼部から煙道部には、広い範囲にわたって焼土が堆積しており、火床面は赤化している。煙道部の奥壁は特に被

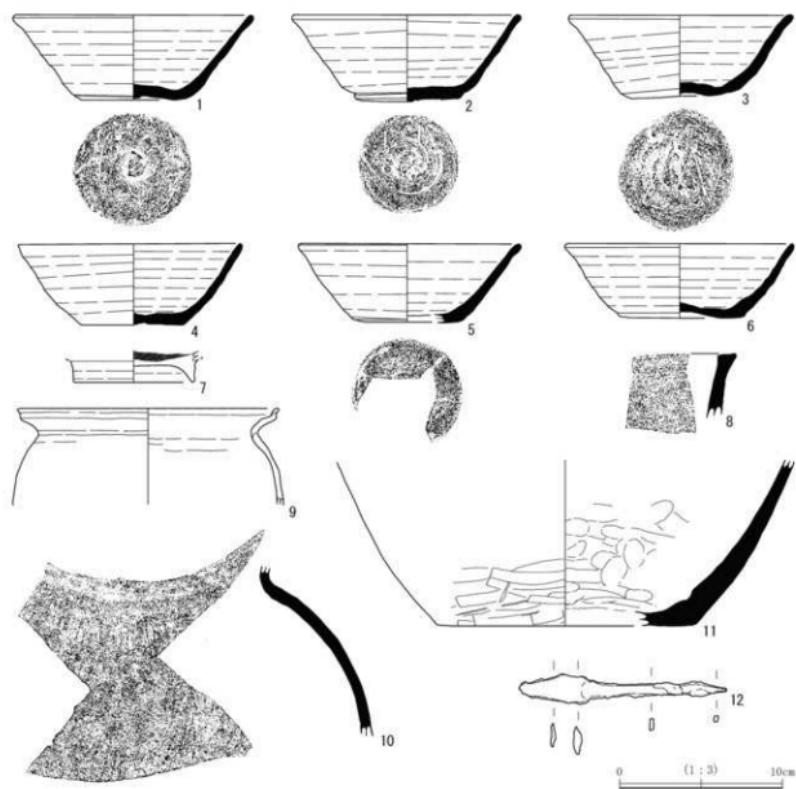
熱が強く、厚い焼土の堆積がみられた(2層)。カマドの構築順序は、地山Ⅲ層の掘り方へ暗褐色土(11層)を入れて底面を形成し、その上を火床面としていた。つまり、建物の床面より8cm高い位置で火を焚いていたと推測される。

覆土 9層に分けられる。黒褐色土が流れ込んだような堆積を示し(1~4層)、自然堆積と考えられる。10層は貼床である。

遺物出土状況 覆土中の出土が主で、特に北半部に多くみられた。

遺物 土師器91点(环・高台付环)、須恵器85点(环・盤・甑・甕)、金属製品1点(刀子か)が出土した。図化したのは12点である。1~6は須恵器環で底部回転ヘラ切りで外周回転ヘラケズリを施す類似する器形・胎土の製品である(胎土に白色針状物質を含む)。1~3はいずれも底部に焼成前の刻書が施される。この刻書は連続する山型文であり、同一窯の同時期生産の可能性もある。

時期 出土遺物の中から9世紀中葉と推測される。



第20図 S104出土遺物

第12表 S104出土土器観察表

No.	器種	法量(cm)	器形・技法の特徴	法量値：( )前元値、( )既存値		
				①射土・②焼成・③色調	出土位置	備考
1	須恵器 环	口径:14.8 器高:5.2 底径:7.0	平底から縁部は直線的に外傾して立ちあがる。内面はヨコナガ。底部外面は回転ヘラ切りの後、外周回転ヘラケズリ。焼成前の縫割(連続山型文)あり。	①長石・石英粒、針状物を含む。 ②良好、解化赤褐色。 ③黄灰色。	カマド 裏土	口縁部環付着。
2	須恵器 环	口径:14.1 器高:5.3 底径:6.7	平底から縁部は外傾して立ちあがる。内面はヨコナガ。底部外面は回転ヘラ切りの後、外周回転ヘラケズリ。焼成前の縫割(連続山型文)あり。	①長石・石英粒、針状物を含む。 ②良好。 ③灰黄色。	北西部 裏土	
3	須恵器 环	口径:13.8 器高:5.1 底径:7.3	平底から縁部は外傾して立ちあがる。内面はヨコナガ。底部外面は回転ヘラ切りの後、外周回転ヘラケズリ。焼成前の縫割(連続山型文)あり。口縁部内外重ね焼きで変色。	①長石・石英粒、針状物を含む。 ②良好。 ③灰白色。	南東部 裏土	
4	須恵器 环	口径:13.7 器高:5.0 底径:6.4	平底から縁部は直線的に外傾して立ちあがる。口縁部は外反する。内面はヨコナガ。底部外面は回転ヘラ切りの後、外周回転ヘラケズリ。	①長石・石英粒、針状物を含む。 ②良好。 ③灰白色。	南西部 裏土	
5	須恵器 环	口径:13.6 器高:4.8 底径:6.7	平底から縁部は直線的に外傾して立ちあがる。口縁部は外反する。内面はヨコナガ。底部外面は回転ヘラ切りの後、外周回転ヘラケズリ。底部焼成前の縫割(不明)あり。	①長石・石英粒、針状物を含む。 ②良好。 ③灰黃褐色。	北西部 裏土	
6	須恵器 环	口径:14.0 器高:4.5 底径:7.8	平底から縁部は内傾して立ちあがる。口縁部は外反する。内面ヨコナガ。底部外面は回転ヘラ切りの後、外周回転ヘラケズリ。	①長石・石英粒、針状物を含む。 ②良好。 ③灰黃褐色。	北東部 裏土	
7	土師器 高台付壺	口径:— 器高:(1.9) 底径:(7.4)	直底から体部は外傾して立ちあがる。高台部は直立して瓶付。瓶頭は尖り丸味。高台内部には回転ナナ、高台中央には回転ヘラケズリ。底部内面は丁寧なナナ。黑色絞り。	①長石・石英粒。雲母を含む。 ②良好。 ③外曲褐色。内面黒色。	北東部 裏土	
8	須恵器 瓶	口径:— 器高:— 底径:—	体部から縁部は外反気味に立ちあがる。口部は平坦。外表面はヨコナガ。	①長石・石英粒。雲母を含む。 ②良好。 ③灰白色。	裏土	
9	土師器 甕	口径:(16.0) 器高:(5.8) 底径:—	直底ばかり。口縁部2つの字状に立ちあがる。口唇部は彫みかずらわれる。外表面の縁部と瓶頭はヨコナガ。体部はナナ。内面ナナ。	①長石・石英粒。雲母を含む。 ②良好。 ③褐色を呈する。	北西部 裏土	
10	須恵器 甕	口径:— 器高:— 底径:—	口縁部欠損。体部は内傾して立ちあがる。瓶頭でくびれる。体部内面は円形並て具眼。外周縦線の平行タタキ目。	①長石・石英粒を含む。 ②良好。 ③灰黃褐色。	裏土	
11	須恵器 甕	口径:— 器高:(10.1) 底径:(16.0)	平底から体部は外傾して立ちあがる。体部下部は丁寧なナナを施し、体部外表面の直底際は横窓のヘラケズリ。内面はナナ。	①小鏡・長石・石英粒を含む。 ②良好。 ③外曲褐色。内面灰褐色。	カマド内	

第13表 S104出土金属製品観察表

No.	器種	法量(cm)	重量(g)	特徴	法量値：( )前元値、( )既存値		
					出土位置	備考	
12	新製品 刀子か	長さ:12.8 幅:1.7 厚さ:0.5	11.1	光面品。基部は尖り、体頭は断面長方形を呈し、実端の刃部は折れ曲がる。刃部は両側が薄くななり、両刃と考えられる。	南東部 裏土		

## S106

位置・重複関係等 A区の中央西側、E-7・8グリッドに位置する。

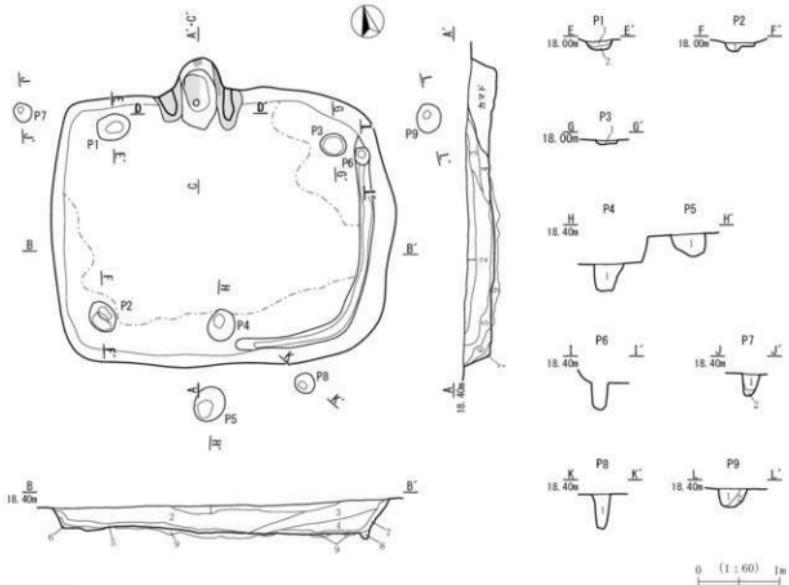
形状と規模 平面形は長方形を呈し、南北3.40m、東西4.26m、深さ24~37cmを測る。主軸方位は、N-14°-Eを示す。

壁 最大壁高は37cmを測り、急傾斜で掘り込まれている。

壁溝 東壁から南壁の東半にかけて確認された。幅12~20cm、深さ2~8cmを測る。

床 褐色土を用いて西南部に貼床を構築していた。概ね平坦である。北西角を除く壁際以外は、踏み固められ、硬化していた。

ピット 建物跡の南東を除く角部と南壁中央に5基確認された(P1~4・6)。規模はP1が42×36cm、深さ12cm、P2は42×30cm、深さ9cm、P3は33×30cm、深さ6cm、P4は42×30cm、深さ30cmを測る。浅いものが多い。P4は位置からすると出入口に伴うものと推定される。北東角の壁溝内にP6が存在する。規模は24×18cm、深さ33cmを測る。また、建物跡の外側にも4基確認され(P5・7・8・9)、覆土や形状、位置から本跡に伴うと判断した。位置はP5が南壁中央の外側、P7は北西角の外側、P8は南壁東側、P9は北東角の外側にある。規模はP5は45×36cm、



【S106 土層説明】

- 10YR3/3 増褐色土。粘性繊り有 ローム粒中量。ロームブロック少量。炭化物少量。黒色粒中量。褐色粒少量含む。
- 10YR3/4 増褐色土。粘性やや有 ローム粒多量。ロームブロック少量。黑色和微量含む。
- 10YR3/3 増褐色土。粘性強い 繊り有 ローム粒・ロームブロック多量。黑色粒・褐色粒中量。赤色粒少量含む。径5cm以内の増褐色土多量混入。
- 10YR4/3 増褐色土。粘性繊り有 ロームブロック・他土・黒色土・赤色粒中量。褐色粒少量含む。
- 10YR4/4 黄褐色土。粘性強い 繊り有 ロームブロック多量。黑色粒・褐色粒少量。炭化物微量含む。
- 10YR2/2 黑褐色土。粘性強い 繊り有 ローム粒・ロームブロック多量。黑色粒中量。褐色和微量含む。
- 10YR8/3 黄褐色土。粘性繊り有 ロームブロック中量含む。
- 10YR2/2 黑褐色土。粘性繊り有 ローム粒・ロームブロック多量含む。
- 10YR4/6 閔色土。粘性やや有 繊り強い ロームブロック多量。黑色粒微量含む。粘束構造土。

【P1 土層説明】

- 10YR2/2 黑褐色土。粘性繊り有 ロームブロック多量。黑色粒微量。褐色粒中量。他土多量。炭化物中量含む。增褐色土との互層。
- 10YR5/6 黄褐色土。粘性強い 繊り有 黑色粒微量。施土少量含む。

【P2 土層説明】

- 10YR5/6 黄褐色土。粘性強い 繊り有 黑色粒微量含む。褐色シルトとの互層。

【P3 土層説明】

- 10YR3/4 にがい黄褐色土。粘性繊り有 黑色粒少量含む。

【P4 土層説明】

- 10YR3/2 増褐色土。粘性繊り有 黑色粒微量含む。径5cm以内の黄褐色シルトブロック混入。

【P5 土層説明】

- 10YR3/2 増褐色土。粘性繊り有 ロームブロック多量。黑色粒少量。褐色粒微量含む。

【P7 土層説明】

- 10YR3/3 増褐色土。粘性繊りやや有 ローム粒多量。ロームブロック少量。黑色粒微量含む。
- 10YR4/6 閔色土。粘性繊り有 ローム粒多量。ロームブロック少量含む。

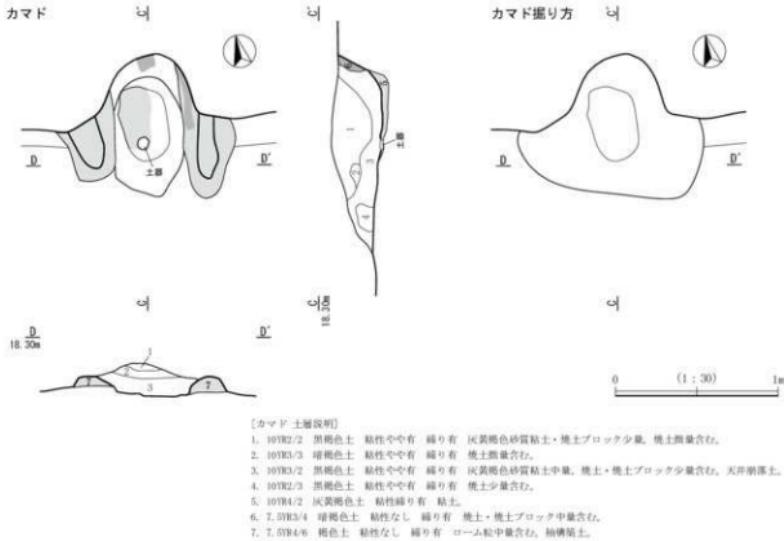
【P8 土層説明】

- 10YR2/3 黑褐色土。粘性繊り有 ロームブロック少量。黑色粒微量含む。

【P9 土層説明】

- 10YR2/3 黑褐色土。粘性繊りやや有 ロームブロック少量含む。

第21図 S106(1)



第22図 S106(2)

深さ30cmを測る。P7は21×18cm、深さ36cmを測る。P8は24×21cm、深さ45cmを測る。P9は36×30cm、深さ24cmを測る。

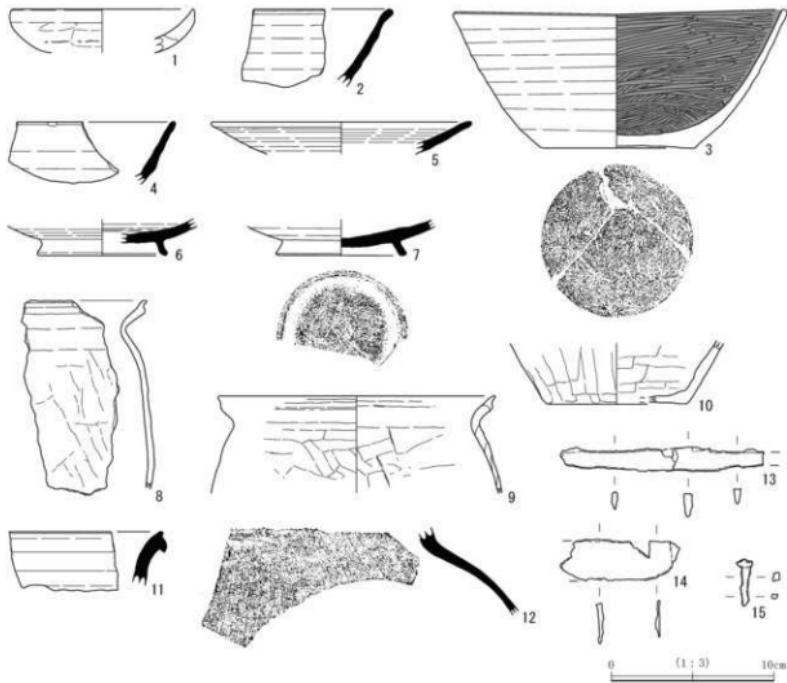
**カマド** 北壁の中央やや西寄りに構築されていた。全長92cm、幅110cm、両袖部の内法40cmを測る。袖部はにぶい黄褐色砂質粘土と褐色土の混合土を用いて構築されていた(7層)。天井部は崩落しており、3層がそれに該当すると考えられる。燃焼部から煙道部には、広い範囲にわたって焼土が堆積しているが、明瞭な火床面は確認できなかった。煙道部の奥壁は特に被熱が強く、厚い焼土の堆積が見られた。底面のやや奥に、灰黄褐色の粘土を敷設していた(5層)。この粘土の焚口側の先端に、土師器壺の底部が逆位で出土した。あるいは、この上に支脚を据えていたとも考えられる。

**覆土** 8層に分けられる。暗褐色土、黒褐色土、褐色土などが流れ込んだような堆積を示し、自然堆積と考えられる。9層は貼床である。

**遺物出土状況** 西半部の覆土中から多くが出土しており、東半部ではほとんど出土しなかった。

**遺物** 土師器137点(壺・皿・甕)、須恵器25点(壺・高台付壺・壺蓋・盤・壺・甕)、金属製品3点(刀子・鎌・釘)が出土した。なお、これ以外に掘り方から土師器1点(甕)が検出された。図化したのは15点であるが、破片が多い。1は小型の丸底の壺である。3はほぼ完形の鉢であるが、西壁際から正位で出土した。5~7は須恵器の盤であるが、器形・胎土から木葉下窓跡群の製品と推定される。8・9は器壁の薄い常縦型甕である。

**時期** 出土遺物の様相、特に須恵器の盤、土師器甕の形態から8世紀後半と思われる。

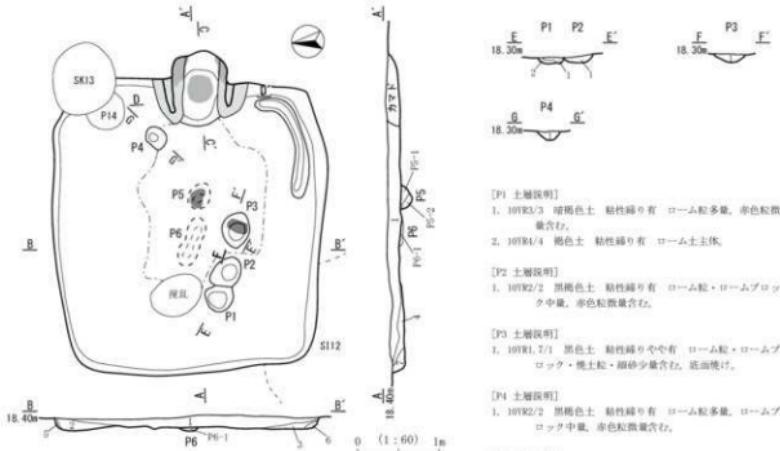


第23図 S106出土遺物

第14表 S106出土土器観察表

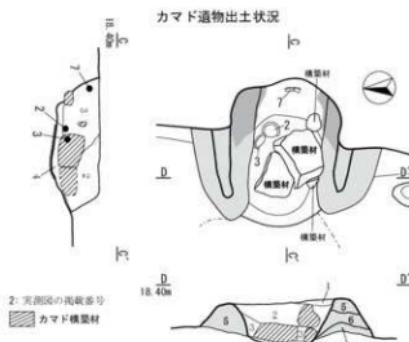
No.	器種	法値(cm)	器形・技法の特徴	測量(1)・復元(2)・既存(3)		
				①断土	②焼成	③色調
1	土器器 环	口径:(11.0) 器高:(2.7) 底径:-	丸底から体部は内側して立ちあがる。口縁部は尖り灰味となる。口縁部外 面はヨコナダ。	① 黒砂粒を含む。 ② 良好。 ③ 鮮褐色。	西北部 層土	
2	土器器 环	口径:- 器高:- 底径:-	体部から口縁部は外傾して立ちあがる。口縁部は外反する。外外面はヨコ ナダ。	① 小織。長石、石英粒。針状 物を含む。 ② 良好。 ③ 灰色。	北東部 層土	口縁部外面丸 いている。
3	土器器 环	口径:20.6 器高:8.5 底径:9.4	平底から口縁部は内側して立ちあがる。体部外面上半はヨコナダ。下半は ヘラケタリ。底部外周は回転ヘラケタリ。内面は丁寧なくがき。黒色地盤。	① 長石粒を少量含む。 ② 良好。 ③ 外面暗褐色。内面黒褐色。	北西部 層土	
4	土器器 环	口径:- 器高:- 底径:-	体部下位に模有を有し、体部は外傾して立ちあがる。外外面はヨコナダ。	① 長石、石英粒。針状物を含む。 ② 良好。 ③ 灰色。	北東部 層土	
5	土器器 环	口径:(16.0) 器高:(2.0) 底径:-	体部から口縁部は外傾して立ちあがる。外外面はヨコナダ。	① 長石、石英粒、針状物を含む。 ② 良好。 ③ 灰色。	北東部 層土	
6	土器器 环	口径:- 器高:(2.2) 底径:(10.0)	底部から体部は外傾して立ちあがる。高台部は外傾して貼付。端部は内 削が付。底部回転ヘラカタリ。高台部外周回転ナダ。内面はヨコナダ。 底部外周には焼成前の縫割【×】あり。	① 長石、石英粒。針状物を含む。 ② 良好。 ③ 灰色。	北東部 層土	
7	土器器 环	口径:- 器高:(2.2) 底径:(8.0)	底部から体部は外傾して立ちあがる。高台部はやや外傾して貼付。端部 は内削が付。高台部外周回転ナダ。内面はナダ。底部外周には焼成前 の縫割【×】あり。	① 大粒の長石、石英粒。針状 物を含む。 ② 良好。 ③ 灰色～暗灰色。	西北部 層土	内面削している。





#### [S107 土層説明]

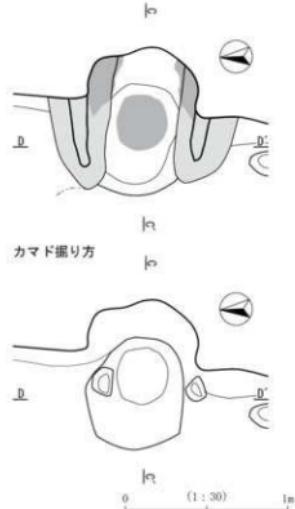
- 10YR2/2 黒褐色土 粘性繊り有 ローム粒・ロームブロック・桃色粘少量含む。
- 10YR2/3 黒褐色土 粘性繊り有 ローム少量、白色粘微量含む。
- 10YR2/3 黑褐色土 粘性繊り有 ローム少量、白色粘微量含む。
- 10YR2/3 黑褐色土 粘性繊り有 ローム粒・ロームブロック多量、黑色粘微量含む。
- 10YR2/3 黑褐色土 粘性繊り有 ローム粒中量含む。
- 10YR2/2 黑褐色土 粘性繊り有 ローム粒・ローム少量、赤色粘微量含む。
- 10YR2/2 黑褐色土 粘性繊り有 ローム粒・ロームブロック少量、赤色粘微量含む。



#### [カマド 土層説明]

- 10YR2/2 黑褐色土 粘性や有 繊り有 ローム粒・桃色粘少量含む。
- 10YR2/2 黑褐色土 粘性や有 繊り有 ローム粒多量、桃色粘・被熱範囲ブロック中量含む。天井崩落土。
- 10YR2/2 黑褐色土 粘性や有 繊り有 桃色粘・被熱範囲ブロック少量含む。天井崩落土。
- 10YR2/3 黑褐色土 粘性や有 繊りや有 ローム粒中量、桃色粘少量含む。
- 10YR2/2 黑褐色土 粘性や有 繊り有 にぶい黄褐色砂質粘土・ローム粒中量、桃色粘・被熱範囲ブロック少量含む。被熱範圍。
- 10YR2/3 黑褐色土 粘性や有 繊り有 にぶい黄褐色砂質粘土・ロームブロック少量、桃色粘少量含む。被熱範圍。
- 10YR1.7/1 黑色土 粘性繊り有 ロームブロック中量、桃色粘少量含む。被熱範圍。

#### カマド



第24図 S107



器 1 点(壺), 土製品 2 点(羽口), 金属製品 1 点(棒状の不明製品), 製鉄関連遺物 15 点(鉄滓)が出土した。図示したのは 11 点, 写真のみ掲載した鉄滓が 10 点である。2・3 の土師器は回転糸切り痕を残すもので, 2 は底部の内面のみ黒色処理で薄手である。年代は 10 世紀後葉と考えられる。5 の須恵器は底径の大きい木葉下窓跡群の製品と推定するが, 混入であろう。4 は土師器の口縁部片であるが, 外面に「十」字形の墨書が残る。6 は高台付塊であるが, SI15 にも類似する製品がある。12~21 は鉄滓類である(写真のみ掲載, 写真図版 16)。12~14 は椀型滓である。15 は羽口の先端部片, 16~21 は鉄滓の小破片である。P 6 の覆土からは鍛造剝片が検出されており, これも写真を掲載した(写真図版 16)。

時期 出土遺物からは, 10 世紀後葉と推測される。

### SI108

位置・重複関係等 A 区の北西部, D・E-13 グリッドに位置する。全体の約 7 割は調査区外である(第 8 地点第 3 次調査で報告)。北西隅から中央にかけては, 損壊で壊されている。

形状と規模 確認部分の平面形は長方形を呈し, 規模は残存値で南北 3.55m, 東西 1.20m, 深さ 36~40cm を測る。主軸方位は, N-7°-E を示す。

壁 最大壁高は 40cm を測り, ほぼ垂直に掘り込まれている。

壁溝 確認部分を全周する。幅 20~23cm, 深さ 5cm を測る。

床 暗褐色土を用いて貼床を構築していた。床面はほぼ平坦で, 確認部分は硬化していた。

ピット 調査区内では確認されなかった。

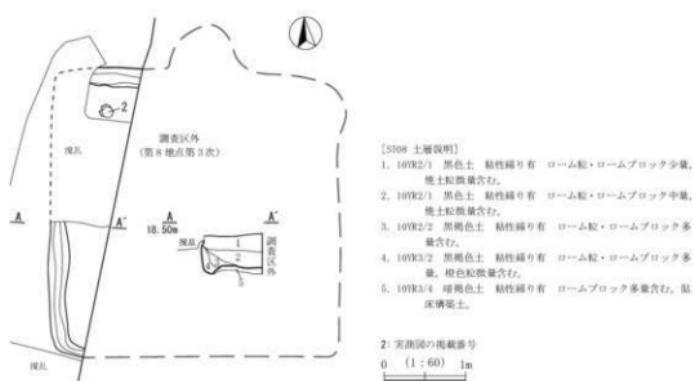
カマド 調査区内では確認されなかった。

覆土 4 層に分けられる。黒色土, 黒褐色土が流れ込んだような堆積を示し, 自然堆積と考えられる。

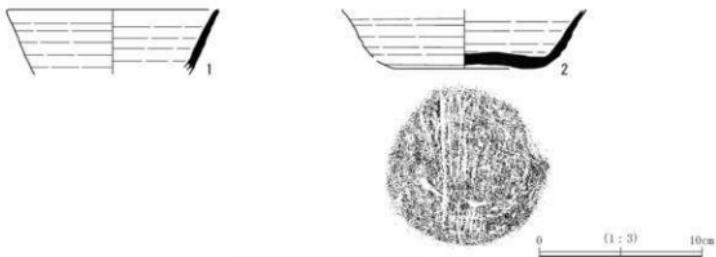
第 5 層は貼床である。

遺物 調査した部分が少なかったため遺物も少ない。土師器 3 点(壺), 須恵器 6 点(环・环蓋)である。図化したのは 2 点のみである。2 の須恵器は底径の大きなタイプである。

時期 出土遺物からは, 8 世紀後半と推測される。



第 26 図 SI108



第27図 S108 出土遺物

第19表 S108 出土土器観察表

No.	器種	法値(cm)	器形・技法の特徴	注釈欄(1)直次級、(2)既存級		
				①歯土・②焼成・③色調	出土位置	備考
1	須恵器 环	口径:13.0 器高:4.0 底径:-	体部から口縁部にかけて外傾する。ヨコナデ。	①長石・石英粒・針状物を含む。 ②良好。 ③灰化。	覆土	
2	須恵器 环	口径:- 器高:3.6 底径:9.0	平底から体部は外傾して立ちあがる。底面外周回転へク切りの後、外周は回転へラケズ。施表面の線列(一定方向の複数の直線)あり。	①長石・石英粒・雲母を含む。 ②やや不良。 ③黄灰色。	床面	

### S110

位置・重複関係等 A区の南西部、G-10、H-10・11グリッドに位置する。南西隅をP12に、南西部をSK06にそれぞれ切り込まれ、北西隅を搅乱に壊される。

形状と規模 平面形は長方形を呈し、規模は南北2.52m、東西3.00m、深さ32~38cmを測る。主軸方位は、N-3°-Eを示す。

壁 最大壁高は35cmを測り、急傾斜で掘り込まれている。

壁溝 北・東・南で確認され、西壁と東壁中央では一端切れている。幅12~20cm、深さ5~8cmを測る。

床 地山のⅢ層上面を床としていた。床面は概ね平坦で、中央から北東隅にかけて硬化していた。

ピット 南壁中央に1基確認された(P1)。規模は42×30cm、深さ18cmを測る。位置からすると出入口に伴うものと推定される。

カマド 北壁のほぼ中央に構築されていた。全長95cm、幅103cm、両袖部の内法は42cmを測る。袖部は地山のⅢ層を5~13cmほど削り残した上に、にぶい黄褐色砂質粘土と暗褐色土の混合土を用いて構築されている。燃焼部東壁に張り付くように26×20cm、厚さ12cmの凝灰岩製の切石1点が据えられていた。天井部は崩落しており、1~3層がそれに該当すると考えられる。燃焼部から煙道部には、広い範囲にわたって焼土が堆積しており、火床面は赤化している。奥壁東側が強く被熱していた。火床面北側に凝灰岩製の支脚が直立で据えられていた。カマドの内部からは、大量の土師器片と須恵器片が出土した。また切石と対応する左袖内側には、土師器腹片(18)が据えられていたと思われる状態で検出された。

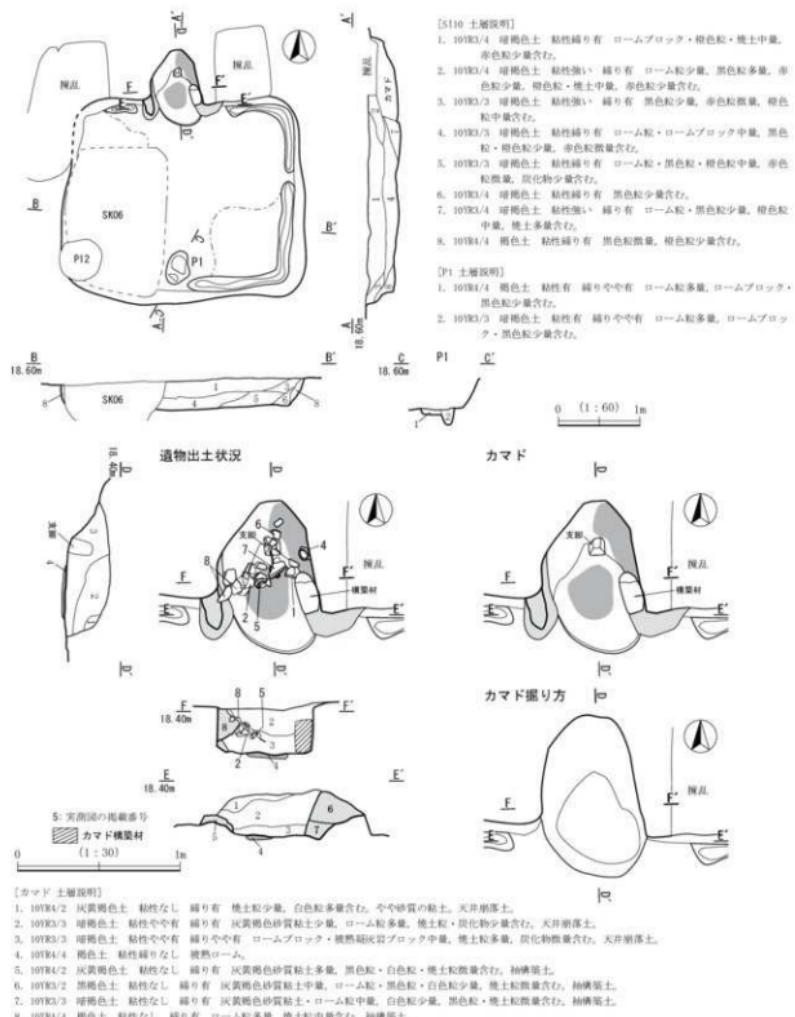
覆土 8層に分けられる。暗褐色土が流れ込んだような堆積を示し、自然堆積と考えられる。

遺物出土状況 カマド覆土内から多くの遺物が出土した(1・2・4~8)。これらはカマド2層と3層の間、覆土中の出土であり、建物跡発掘時ではない可能性がある。

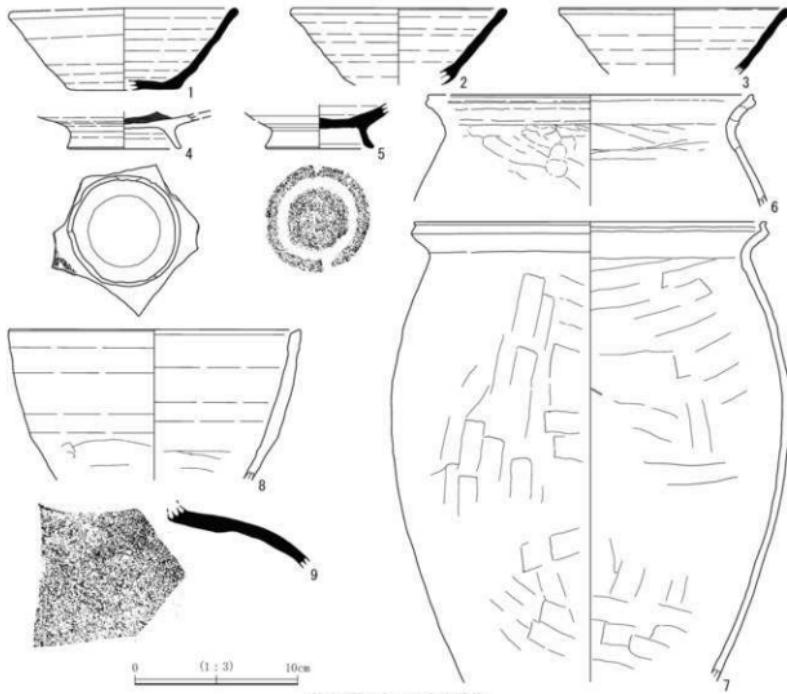
遺物 土師器176点(环・高台付塊・鉢・小型甕・甕)、須恵器65点(环・高台付环・环蓋・壺・甕)、石製品1点(支脚)、製鉄関連1点(鐵滓)。図化したのは7点、写真のみ掲載は1点である。1~3

は須恵器壺で、2・3は体部のみであるが、底部は回転ヘラ切りと推定する。5は須恵器高台付壺である。6・7は常縦型甕である。4の土師器高台付壺は体部外面に墨書が僅かに残っている。10は鉄滓であるが(覆土から出土;写真図版17), S107からの混入と思われる。

時期 出土物の様相からは、9世紀中葉と推測する。



第28図 S107



第29図 S110出土遺物

第20表 S110出土土器観察表

No.	器種	法長(cm)	器形・技法の特徴	①胎土・②地成・③色調	出土位置	備考
1	須恵器 环	口径:14.1 器高:7.0 底径:7.0	平底から口縁部は外傾して立ちあがる。口縁部は外反する。底面部には凹面へり切の痕。ヘラケヅリ。内外面はヨコナガ。	① 長石、石英粒、斜状物を含む。 ② 良好。 ③ 硫褐色。	カマド内	
2	須恵器 环	口径:13.3 器高:4.7 底径: -	体部から口縁部は直線的に外傾する。体部下位はヘラケヅリ。内外面はヨコナガ。	① 長石、石英粒、斜状物を含む。 ② 良好。 ③ 外面部灰白色。内面灰白色。	カマド内	
3	須恵器 环	口径:14.2 器高:4.1 底径: -	体部から口縁部は直線的に外傾する。内外面はヨコナガ。	① 長石、石英粒、斜状物を含む。 ② 良好。 ③ 硫褐色～黒褐色。	南東部 覆土	
4	土師器 高台付環	口径: - 器高:(2.3) 底径:7.0	平底から体部は外傾して立ちあがる。高台部は外傾して貼付。端部は平頭。高台部内外面はヨコナガ。高台内部はヘラケヅリ。内面は丁寧なことが、黒色処理。	① 磨光粒、當母を含む。 ② 良好。 ③ 外面部褐色。内面黒褐色。	カマド内	体部表面付着 体部下位:墨書き [不明]。
5	須恵器 高台付环	口径: - 器高:(2.7) 底径:6.6	平底から口縁部は外傾して立ちあがる。高台は外傾して貼付。端部は内側へり。高台部内外面は凹面へリナガ。高台内部はヘラケヅリ。内面はヨコナガ。	① 長石、石英粒、斜状物を含む。 ② 良好。 ③ 黄色。	カマド内	被焼(燒土付着)。
6	土師器 甕	口径:(20.0) 器高:(6.0) 底径: -	肩部でくびれ。口唇部と端部を揃みあわせ。体部外面はナダ。内外面はヨコナガ。内面はヘラケヅリ。	① 長石、石英粒を含む。 ② 良好。 ③ 黄色。	カマド内	被熱剥落。
7	土師器 甕	口径:(21.6) 器高:(8.2) 底径: -	体部中央に最大幅を有す。肩部でくびれ。口唇部は心字状に立ちあがる。口唇部は端部を揃みあわせ。体部外面はナダ。外面部はヨコナガ。内面はヨコナガ。	① 長石、石英粒、當母を含む。 ② 普通。 ③ 黄褐色。	カマド内	体部内外下位焼付着。
8	土師器 甕	口径:(18.0) 器高:(9.2) 底径: -	体部から口縁部は内傾して立ちあがる。口唇部は内側へり。体部外面上位はヨコナガ。下位はヘラケヅリ。内面はヨコナガ。	① 磨光粒を含む。 ② 良好。 ③ 硫褐色、褐色。	カマド内	
9	須恵器 甕	口径: - 器高: - 底径: -	体部片。体部上位から肩部にかけて内傾する。内面はヨコナガ。外面部然焼落。	① 長石、石英粒を含む。 ② 良好。 ③ 外面部灰白色。内面灰白色。	北東部 覆土	

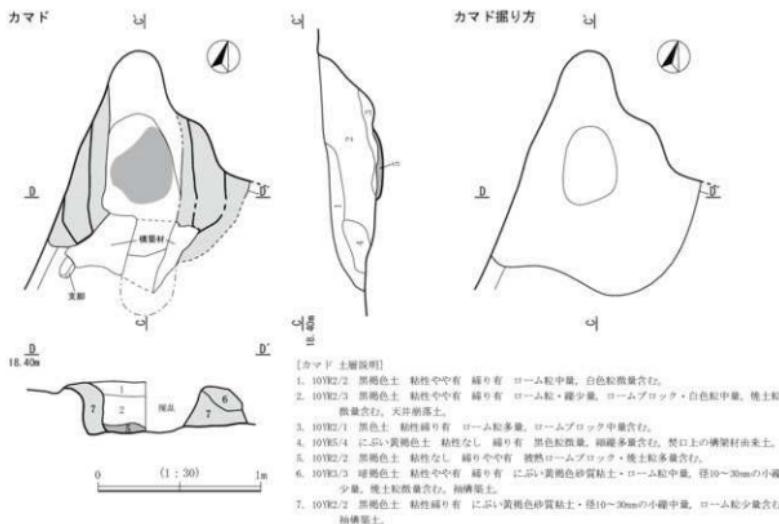
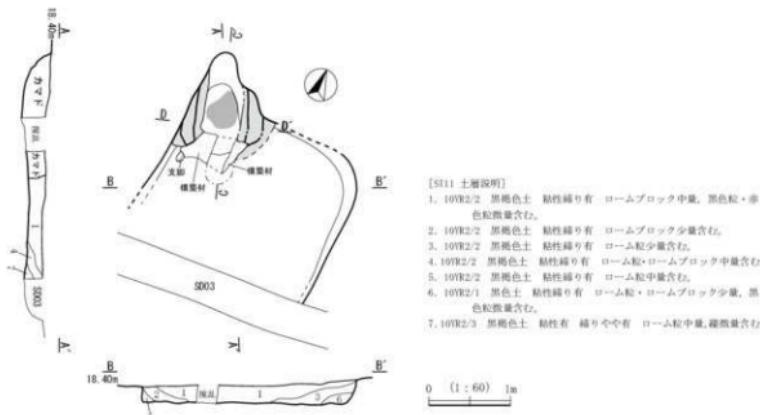
## S111

位置・重複関係等 A区中央西側, F-8・9グリッドに位置する。南壁をSD03に切り込まれている。

形状と規模 平面形は正方形を呈する小型の建物跡である。残存高南北1.95m, 東西2.40m, 深さ17~30cmを測る。主軸方位は, N-7°-Eを示す。

壁 最大壁高は27cmを測り、ほぼ垂直に掘り込まれている。

壁溝 確認されなかった。



第30図 S111

**床** 地山のⅢ層上面を床としていた。床面は概ね平坦で、カマド焚口前のみ硬化していた。

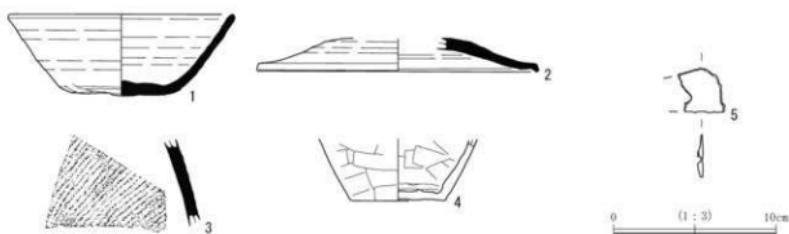
**ピット** 確認されなかった。

**カマド** 北西隅に構築されている。主軸方向は、N-20°-Wで、西壁の北側の延長線上に煙道部が延びる。全長127cm、幅130cm、両袖部の内法46cmを測る。袖部はにぶい黄褐色砂質粘土と黒褐色土・暗褐色土の混合土を用いて構築されていた。天井部は崩落しており(2層)、4層は焚口上の構架石材の由来土と推測される。構架石材は硬い凝灰岩の切石である(切石の中央部は攪乱で欠失し、2分割されている)。燃焼部から煙道部にかけての焼土の堆積は薄いが、火床面は赤化している。構築材の西側から、凝灰岩製の切石の支脚が倒れた状態で出土した。

**覆土** 7層に分けられる。黒褐色土が流れ込んだような堆積を示し、自然堆積と考えられる。

**遺物** 土師器39点(环・甕), 須恵器17点(环・环蓋・壺・甕), 石製品1点(支脚), 金属製品1点(不明製品)が出土したが、いずれも覆土中に検出された。図化したのは5点である。1は底部回転ヘラ切りの須恵器环である。4は常総型甕の底部である。

**時期** 出土遺物から9世紀前葉～中葉と推測される。



第31図 S111出土遺物

第21表 S111出土器観察表

No.	器種	法量(cm)	器形・技法の特徴	①熱土・②焼成・③色調	出土位置	備考
1	須恵器 环	口径:14.0 器高:3.0 底径:7.5	平底から縁部は外傾して立ちあがる。内外面はヨコナガ。底部外面は回転ヘラ切りの後、各周回転ヘラケズリ。内外口縁～体部上半は褐灰色に変色(進ね焼き色)。	①長石・石英粒。針状物を含む。 ②良好。 ③灰青～褐灰色。	南東部 覆土	
2	須恵器 环甕	口径:(17.0) 器高:(2.0)	天井部は平坦で、縁部に向って外傾し、縁部は短く立つ。天井部は回転ヘラケズリ。内外面はヨコナガ。	①小窓、長石、石英粒を含む。 ②良好。 ③灰青色。	南東部 覆土	
3	須恵器 甕	口径: - 器高: - 底径: -	体部平。外面に斜位の平行タキ目。内面はヨコナガ。	①小窓、長石、石英粒を含む。 ②良好。 ③暗灰色。	南東部 覆土	
4	土師器 甕	口径: - 器高:(3.8) 底径:(5.8)	平底から体部は外傾して立ちあがる。体部外面下辺は横位のヘラケズリ。底面はナデ。	①長石、石英粒含む。 ②普通。 ③外山黒褐色。内面暗灰褐色。	覆土	外山塚付近。

第22表 S111出土金属製品観察表

No.	器種	法量(cm)	重量(g)	特徴	出土位置	備考
5	鉄製品 不明	長さ:(2.9) 幅:(2.7) 厚さ:(3.3)	(3.3)	薄く扁平な鉄製品。	覆土	

## S112

位置・重複関係等 A区南西端, H-7・8グリッドに位置する。南側大部分が調査区外に延びる。北東側でS107に切り込まれている。

形状と規模 平面形は正方形ないし長方形を呈し、残存値で南北1.72m、東西1.27m、深さ60~72cmを測る。主軸方位は、N-87°-Wを示す。

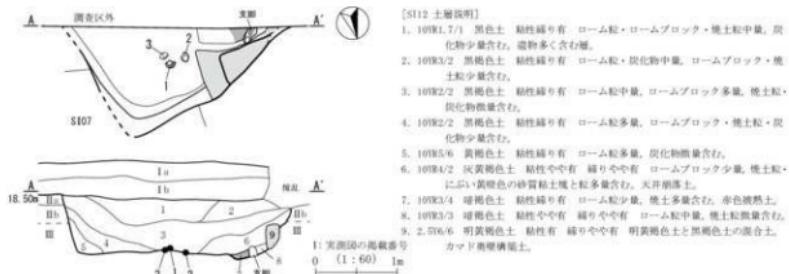
壁 最大壁高は72cmを測り、ほぼ垂直で掘り込まれている。

壁溝 確認されなかった。

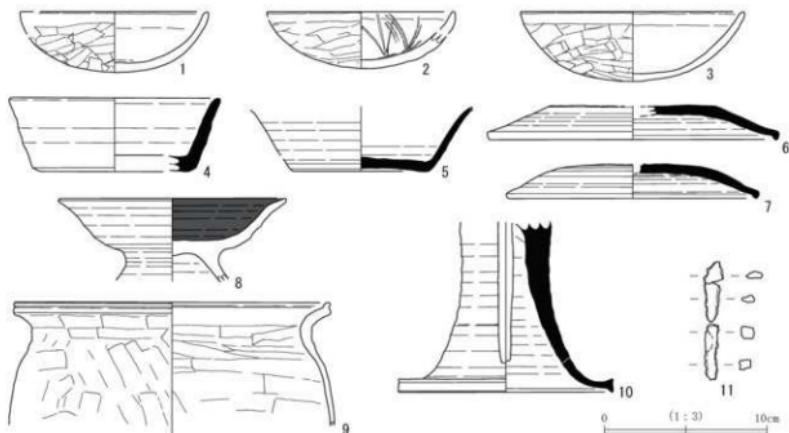
床 地山のⅢ層中と、古い倒木痕を床としていた。床面は概ね平坦で、よく踏み固められていた。

ピット 調査区内では確認されなかった。

カマド 北西隅に構築されている。検出されたのはカマド北半部で、具体的には右袖部から火床面の北半分と推定される。このことからカマドの位置は建物跡の北西隅と推測され、煙道部は北壁の延長上にあると推定される。規模は残存値で長さ133cm、幅94cmである。袖部は灰黄褐色とにぶい黄橙色、明黄褐色の砂質粘土の混合土を用いて構築されていた。天井部は崩落しており(6層)、燃焼部から

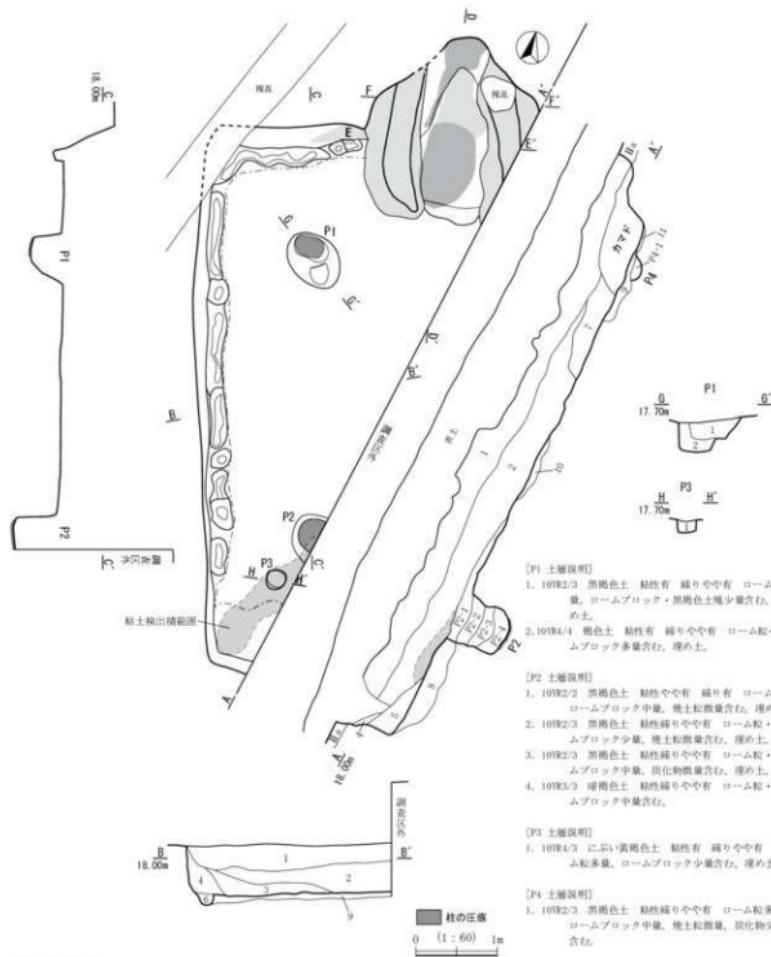


第32図 S112



第33図 S112 出土遺物



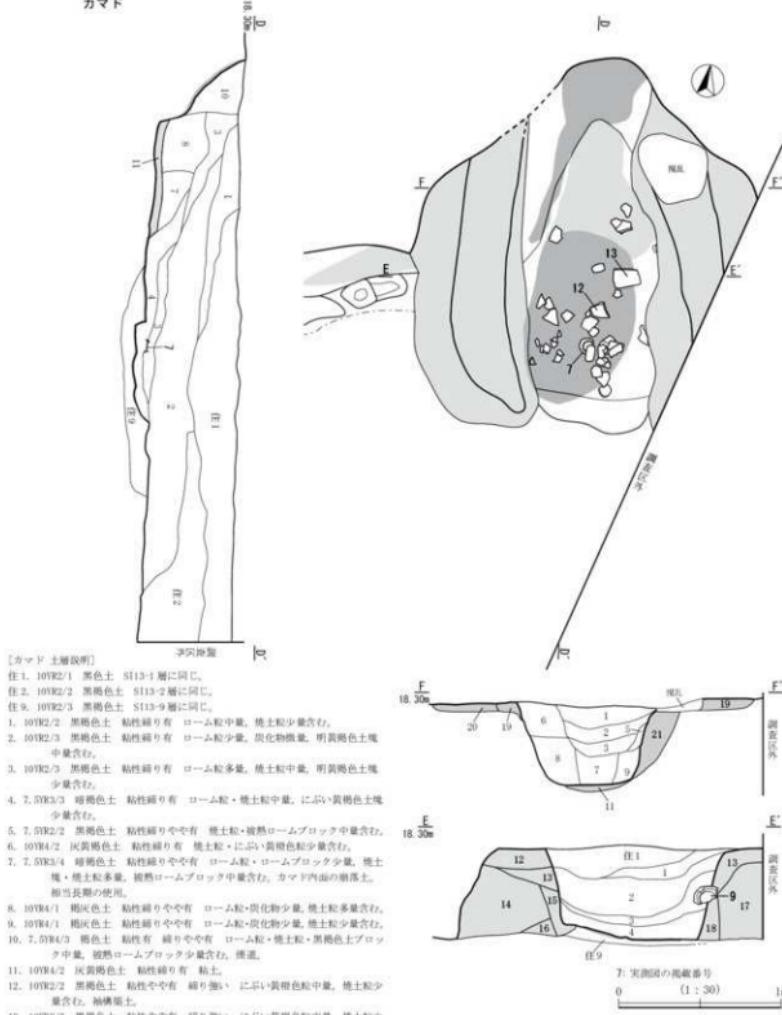


[S113 土層説明]

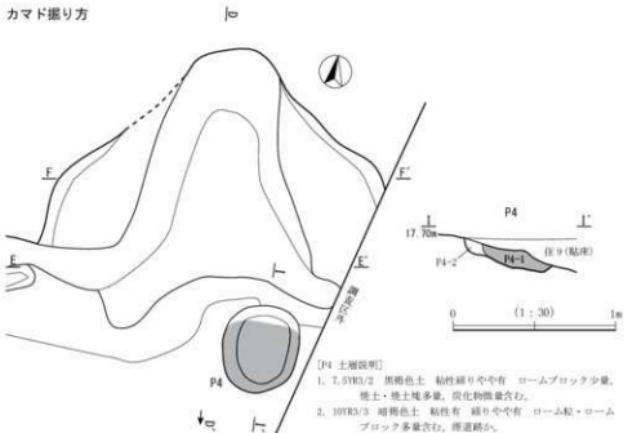
1. 10YR2/1 黒褐色土 粘性繊り有 ローム粘・ロームブロック・赤褐色微量含む。
2. 10YR2/2 黒褐色土 粘性繊り有 ローム粘・ロームブロック中量。地土粒微細。黒褐色土ブロック少量、輪座状の硬いロームブロックをE2以南に含む。埋め土。
3. 10YR3/3 黒褐色土 粘性繊り有 ローム粘・ロームブロック多量含む。
4. 10YR2/4 底黄褐色土 粘性繊り有 ローム粘半量。ロームブロック少量。黒褐色土塊微量含む。埋め土。
5. 10YR2/3 黑褐色土 粘性繊り有 ローム粘・ロームブロック少量。地土粒微細含む。埋め土。
6. 10YR2/4 底黄褐色土 粘性繊り有 ローム粘・ロームブロック中量含む。埋め土。
7. 10YR2/3 黑褐色土 粘性繊り有 ローム粘・ロームブロック・地土粘・地土小ブロック・炭化物少量。地土粒微量含む。カマドの燃れた土。
8. 10YR3/3 黑褐色土 粘性繊り有 ローム粘・ロームブロック多量含む。輪座構造土。
9. 10YR2/3 黑褐色土 粘性有 繊り強い ローム粘・ロームブロック多量。炭化物少量含む。輪座構造土。
10. 10YR3/3 埋褐色土 粘性有 繊り強い ローム粘・ロームブロック多量。炭化物少量含む。輪座構造土。
11. 10YR2/1 黒褐色土 粘性有 繊り強い ローム粘・ロームブロック少量含む。輪座構造土。

第34図 S113(1)

カマド



第35図 S113(2)



第36図 5113(3)

**壁** 最大壁高は84cmを測り、ほぼ垂直に掘り込まれている。カマド左袖脇の北壁には、幅17cmにわたって灰白色粘土の付着が観察された。

**壁溝** 南西隅付近を除き全周する。規模は幅15~25cm、深さ5~10cmを測る。溝の底面は0.7~2.0mの不均等な間隔の10~20cmの深さのピットがみられた。

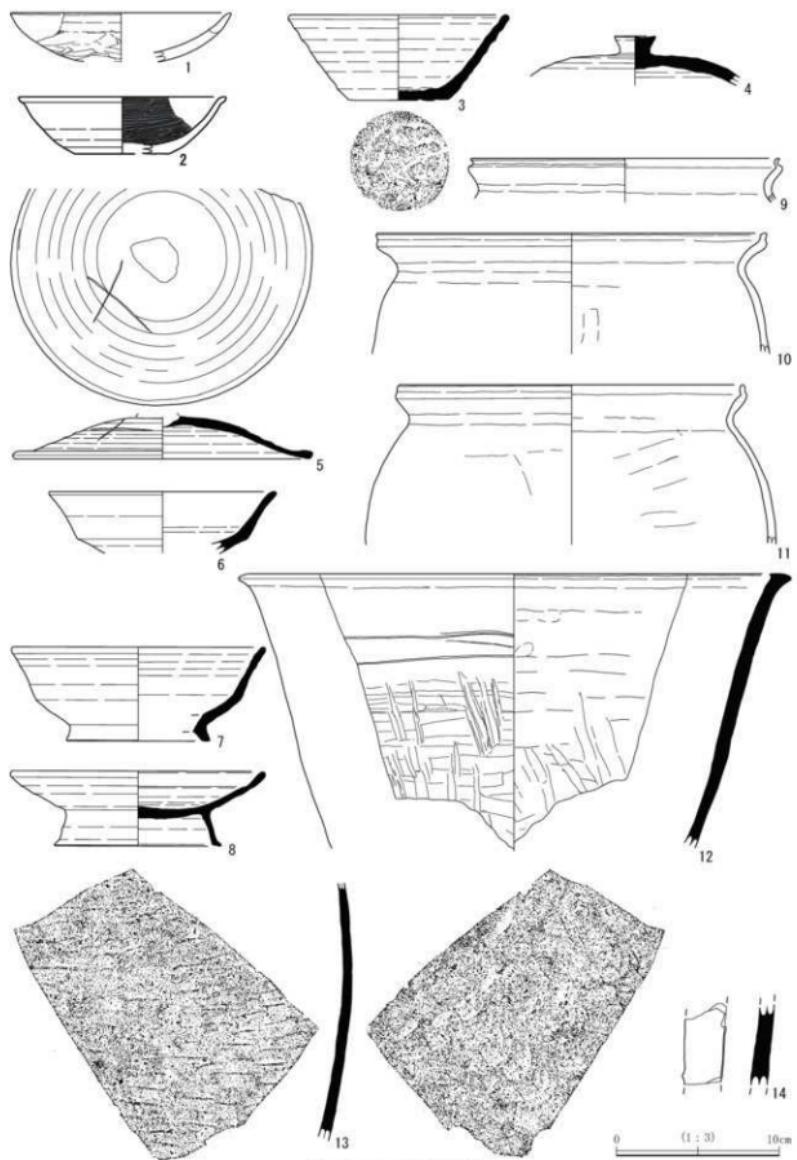
**床** 地山のⅢ層中を床とし、P1から北壁の間付近と、中央部、南西隅など部分的に暗褐色と黒褐色土を用いて貼床としていた。床面は概ね平坦で、壁溝際まで全面にわたってよく硬化していた。

**ピット** 建物跡の北西に1基(P1)、南西に2基(P2・3)、またカマド前方の貼床下から1基(P4)確認された。北西のP1と南西のP2の規模は、P1が80×52cm、深さ32cm、P2が残存値で60×36cm、深さ72cmを測る。どちらも大型でロームブロック混じりの埋め戻したような覆土を持つ。地山VI層近くまで掘り込まれ、底部には柱圧痕が認められた。規模・形状と位置からは、主柱穴と考えられる。P2の南側に位置するP3の規模は、直径24cm、深さ16cmを測る。P4は焚口の直下で焼土を多量に含む土を覆土としていた。規模は46×44cm、深さ12cmを測る。

**カマド** カマドは北壁に構築されていた。規模は残存値で長さ220cm、幅210cm、両袖部の内法は82cmを測り、大型である。袖部はにぶい黄橙色砂質粘土と黒褐色土や暗褐色土などの混合土を用いて構築されている。天井部は崩落しており、2~7層がそれに該当すると考えられる。燃焼部から煙道部には、広い範囲にわたって焼土が堆積しており、火床面は赤化している。煙道の奥壁も焼土がみられた。また、火床面の奥から煙道直下にかけては、灰黄褐色の粘土を敷設していた。カマドの火床面の上のレベルからは、土師器・須恵器片が多く出土した。

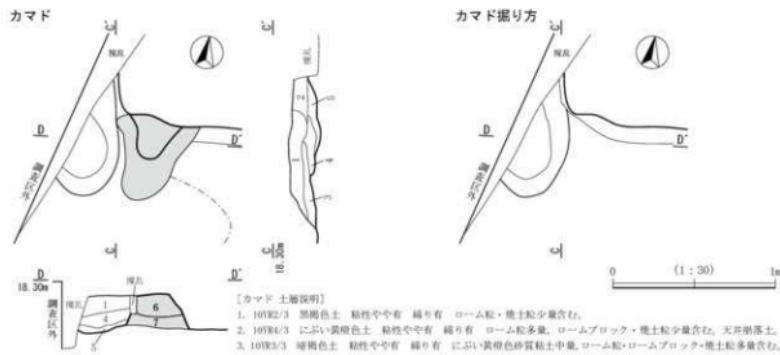
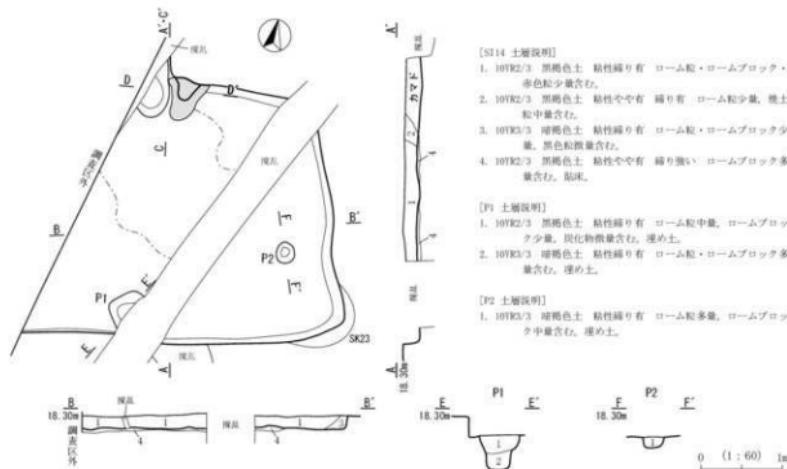
**覆土** 7層に分けられる。2~7層は、ロームブロックやカマド構築材等を多く含み、建物廃絶時の人为的な埋め土と考えられる。また、P2以南の2層中に、貼床状の硬い褐色土ブロックが南から投棄された状態でまとまって検出された。8~11層は貼床であるが、特にカマド前の9層は被熱粘土塊や焼土が多く含まれており、P4覆土も含めてこの場所でカマドの修築等が行われた可能性もある。

**遺物** 土師器196点(环・鉢・甕)、須恵器124点(环・高台付环・环蓋・盤・壺・壺・円面環)

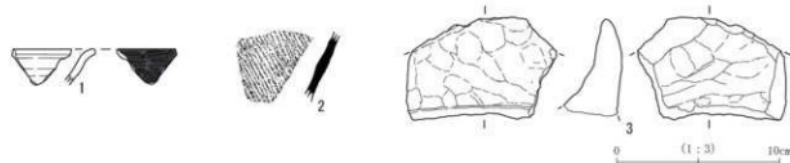


第37図 S113出土遺物





第38図 S114



第39図 S114 出土遺物

第26表 S114出土土器観察表

No.	器種	法徴(cm)	器形・技法の特徴	法徴欄 ( )前元組、( )後市組		
				①胎土・②焼成・③色調	出土位置	備考
1	土師器 环	口径: - 器高: - 底径: -	口縁部片。口縁部は外反する。口縁部外面ヨコナギ。内面はヘラミガキ。黑色處理。	① 磨砂板を含む。 ② 良好。 ③ 外面灰褐色。内面黒褐色。	北東部 覆土	
2	須恵器 甕	口径: - 器高: - 底径: -	体部片。外面は平行タキ目。内面はヘラナギ。外面自然釉輝灰。	① 長石・石英粒を含む。 ② 良好。 ③ 外面灰褐色。内面灰色。	北東部 覆土	
3	不明 土製品	長さ: 6.6cm 幅: 6.9cm 厚さ: 3.3cm	下端剥落痕。左右両端欠損し。器形不明。内外面指頭で調査。後内外面下半部一帯横様の指ナギ。	① 小鏡・長石・石英粒を含む。 ② 良好。 ③ 外面灰褐色。内面灰褐色。	北東部 覆土	

坦て、中央部からカマド前にかけて硬化していた。

ピット 建物跡の南端に1基(P1)、南東に1基(P2)確認された。P1は攪乱により東半分を消失する。規模は残存値で54×24cm、深さ42cmを測り、覆土はロームブロック混じりの埋め戻したような土である。P2は24×21cm、深さ15cmを測る。P1は、位置からみれば出入口に伴うものと推定される。

カマド 北壁の中央に構築されている。袖部の規模は残存値で全長78cm、幅82cm、両袖部の内法36cmを測る。袖部はにぶい黄橙色砂質粘土と暗褐色土、褐色土の混合土を用いて構築されている。天井部は崩落しており、1~3層がそれに該当すると考えられる。燃焼部から煙道部には、広い範囲にわたって焼土が堆積しているが、明瞭な火床面は確認できなかった。

覆土 3層に分けられる。黒褐色土と暗褐色が流れ込んだような堆積を示し、自然堆積と考えられる。4層は貼床である。

遺物 土師器47点(环・甕)、須恵器13点(环、高台付环)、土製品1点(不明製品)が検出されたが、遺物の量は少ない。図化した遺物は3点である。1は内黒処理の土師器环、3は手づくねで作られた不明製品の破片であるが、下方は接合していたと思われる。

時期 出土遺物から、9世紀と推測される。

## S115

位置・重複関係等 B区東端、L・M-2グリッドに位置する。西側3分の2が調査区外に延びる。P30を切り込み、北東隅をP25に切り込まれている。南西隅からカマド直上にかけて攪乱に壊されている。

形状と規模 平面形は方形か長方形と推定される。規模は残存値で南北1.74m、東西3.7m、深さ28~46cmを測る。主軸方位は、N-100°-Eを示す。

壁 最大壁高は46cmを測り、ほぼ垂直に掘り込まれている。カマド以北の東壁西半部に沿って、浅い掘り込みの棚状施設が構築されていた。規模は長さ南北2.03m、幅40~67cm、確認面からの深さ3~5cmを測る。

壁溝 カマド前を除き、確認部分を全周する。幅10~20cm、深さ3~6cmを測る。

床 地山のⅢ層上面を床としていた。床面は概ね平坦で、カマド前から中央にかけて硬化していた。

ピット カマドの前方の貼床の下から1基確認された(P1)。残存値で42×36cm、深さ39cmを測る。覆土はロームブロック混じりの埋め戻したような土である。

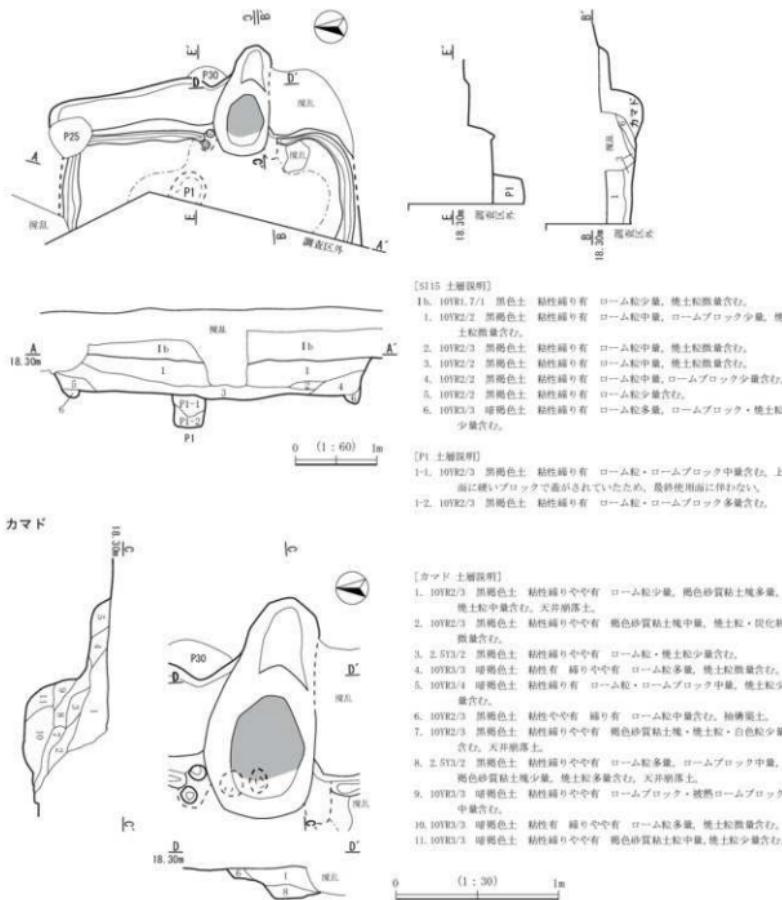
カマド 東壁の中央南寄りに構築されていたが、遺存状態は悪かった。規模は残存値で長さ140cm、幅92cm、両袖部の内法59cmを測る。燃焼部と煙道部の間は約30cmの段差がついており、煙道部の深さは5cm程の浅い掘り込みとなっている。袖部は褐色砂質粘土と黒褐色土や暗褐色などの混合土を用いて構築されていたが、壁際に僅かに残るのみであった。燃焼部には、広い範囲にわたって厚く焼土

が堆積しており、火床面は赤化していた。焚口付近から、直径10cm、深さ5~8cm程のピットが4基検出された。カマドの火床面上からは、土器・須恵器片が多く出土した。

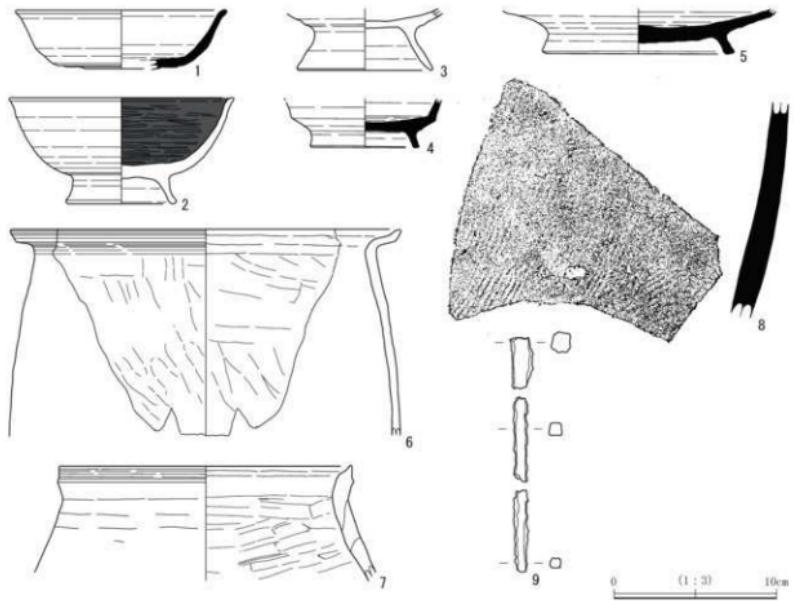
**覆土** 6層に分けられる。黒褐色土が流れ込んだ様相を示し、自然堆積と考えられる。

**遺物** 土器99点(壺・高台付壺・高台付塊・甕)、須恵器19点(壺・高台付壺・壺蓋・盤・甕)、金属製品1点(釘)が出土した。図化したのは9点である。2・3は高い高台の内黒の塊と思われるが、2はSI07-6に類似する器形であり、同年代であろう。1・4・5の須恵器は混入と考えられる。

**時期** 出土遺物からは、10世紀後葉~11世紀前葉と推測される。



第40図 SI115



第41図 S115出土遺物

第27表 S115出土土器観察表

No.	器種	法徴(cm)	器形・技法の特徴	法徴欄: ( ) 前天端, ( ) 後舟端		
				①胎土・空燒成・②色調	出土位置	備考
1.	須恵器 片	口径:(13.0) 器高:3.6 底径:7.0	平底から体部は内溝しながら立ちあがり、口縁部は外反する。底部外 面は凹面へフタ切り後、外縁は内輪へフタケツリ。口縁部下面はヨコナガ。 内面はヨコナガ。	①長石、石英粒を含む。 ②普通。 ③外面黄褐色。内面灰褐色。	カマド内	
2.	土師器 高台付塊	口径:(13.0) 器高:6.5 底径:6.8	平底から口縁部は内溝して立ちあがる。高台部は各締して黏付。高台 部内外面は内輪ナガ。体部外表面はヨコナガ。下位は回転ヘタケツリ。内 面はヨコナガ。黑色焼成。	①微細粒を含む。 ②普通。 ③外面灰褐色。内面黒褐色。	南半部 床面	被熱。
3.	土師器 高台付塊	口径:- 器高:(3.8) 底径:9.4	平底から体部は内溝して立ちあがる。高台部は高く、外傾して黏付。 体部は下位ヨコナガ。内面は削落し調整は不明。高台部内外面回転 ナガ。高台部内輪ケツリ。	①微細粒を含む。 ②普通。 ③外面灰褐色。内面褐色。	カマド内	被熱。
4.	須恵器 高台付杯	口径:- 器高:(3.0) 底径:6.7	体部下位に外傾して斜傾して立ちあがる。高台部は内輪ナガ。内面 はやや外傾して斜傾。端面は平切。体部外表面下位と内面はヨコナガ。	①長石、石英粒を含む。 ②良好。 ③外面青灰色。内面灰褐色。	カマド内	
5.	須恵器 盤	口径:- 器高:(2.8) 底径:-	底部から体部は外傾して立ちあがる。底部回転ヘタ切り後。高台部は 外傾して黏付。端部は平切。高台部内外面回転ナガ。内面はヨコナガ。	①長石、有茎粒を含む。 ②良好。 ③埋没。	カマド内	内面焼成している。
6.	土師器 甕	口径:(24.0) 器高:(12.6) 底径:-	瓶頸はくびれ。口縁部はくの字状に立ちあがる。外縁口縁部、瓶頸は ヨコナガが施され。体部は斜傾のナガ。内面はヨコナガ、斜傾のナガ。 内面はヨコナガ。	①小窓、長石、石英粒。當母を含む。 ②良好。 ③微焼成。	床面	
7.	土師器 甕	口径:- 器高:7.0 底径:-	体部の瓶頸部。口縁部に向けて内傾して立ちあがり。口縁部は直立し、 瓶頸部は突起気味となる。外縁の口縁部。瓶頸部はヨコナガ。体部はナガ。 内面はヨコナガ。	①小窓、長石、石英粒。當母を含む。 ②普通。 ③外面赤褐色。内面褐色。	カマド内	
8.	須恵器 甕	口径:- 器高:- 底径:-	体部片。外縁に羅位。斜傾の平行タタキ目。内面は横方向の丁寧なナガ。	①長石、石英粒を含む。 ②良好。 ③外面灰褐色。内面黄褐色。	覆土	内外面体部被熱 剥落。

第28表 S115出土金属製品観察表

No.	器種	法徴(cm)	重量(g)	特徴	法徴欄: ( ) 前天端, ( ) 後舟端		
					出土位置	備考	
9.	鉄製品 針	長さ:(13.2) 厚さ:0.7-1.2	(22.6)	3つに分かれた断片。断面形は方角を呈する。尖端部は欠損する。	北半部 覆土		

## S116

位置・重複関係等 B区北東端, K・L-3グリッドに位置する。東側3分の1が調査区外に延びる。南西隅から北東隅は擾乱溝に壊されている。

形状と規模 平面形は東西方向を長辺とする方形か長方形と推定される。規模は残存値で南北3.55m, 東西3.56m, 深さ22~30cmを測る。主軸方位は, N-84°-Eを示す。

壁 最大壁高は30cmを測り、急傾斜で掘り込まれている。

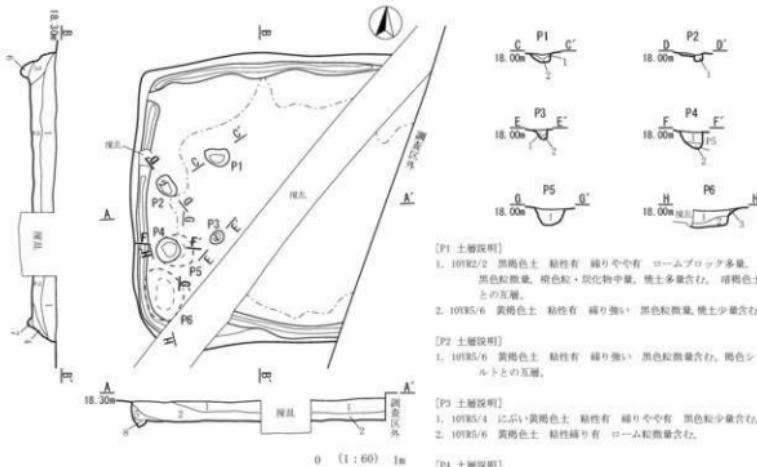
壁溝 確認部分を全周する。幅11~18cm, 深さ3~7cmを測る。

床 地山のⅢ層上面を床としていた。床面は概ね平坦で、壁際を除いた全面が硬化していた。

ピット 西壁寄りに4基確認された(P1~4)。P1が36×21cm, 深さ12cm, P2が30×18cm, 深さ6cm, P3が18×15cm, 深さ12cm, P4が30×24cm, 深さ21cmを測る。P2は、位置からすると出入口に伴う可能性がある。また西南角付近の硬化面の下からピット2基(P5・6)が確認された。P5はP4と西側で重複している。規模はP5は残存値で39×36cm, 深さ18cm, P6は大型で、平面形は梢円形を呈し、規模は残存値で65×48cm, 深さ23cmを測る。

カマド 調査区内では確認されなかった。

覆土 8層に分けられる。黒褐色土と暗褐色土が流れ込んだような堆積を示し、自然堆積と考えられる。



### S116 土層説明

1. 10TR2/2 黑褐色土 粘性有 繰りやや有 ローム粒・ロームブロック少量、堆土粒・炭化物微量含む。
2. 10TR2/3 黑褐色土 粘性有 繰りやや有 ローム粒中量、ロームブロック少量、堆土粒少含む。
3. 10TR3/3 錆褐色土 粘性繰り有 ローム粒・ロームブロック中量含む。
4. 10TR2/2 黑褐色土 粘性有 繰りやや有 ローム粒多量、堆土粒・炭化物微量含む。
5. 10TR3/2 錆褐色土 粘性繰り有 ローム粒・ロームブロック中量、堆土粒少含む。
6. 10TR2/3 黑褐色土 粘性有 繰りやや有 ローム粒多量、ロームブロック中量含む。
7. 10TR2/2 黑褐色土 粘性有 繰りやや有 ローム粒多量、ロームブロック少量、堆土粒微量含む。
8. 10TR2/2 黑褐色土 粘性有 繰りやや有 ローム粒多量、ロームブロック中量含む。

### [P1 土層説明]

1. 10TR2/2 黑褐色土 粘性有 繰りやや有 ロームブロック多量、黒色粘少量、褐色粒・炭化物中量、堆土多量含む。褐褐色土との互層。
2. 10TR5/6 黄褐色土 粘性有 繰り強い 黑色粘少量、堆土少量含む。

### [P2 土層説明]

1. 10TR5/6 黄褐色土 粘性有 繰り強い 黑色粘微量含む。褐色シルトとの互層。

### [P3 土層説明]

1. 10TR5/6 にぶい黄褐色土 粘性有 繰りやや有 黑色粘少量含む。
2. 10TR5/6 黄褐色土 粘性繰り有 ローム粒微量含む。

### [P4 土層説明]

1. 10TR3/2 黑褐色土 粘性有 繰りやや有 黑色粘少量含む。径5cm以下の黒褐色シルトブロック混入。柱穴。

2. 10TR5/6 黄褐色土 粘性有 繰り強い 炭化物少量含む。

### [P5 土層説明]

1. 10TR3/2 黑褐色土 粘性繰り有 ローム粒・ロームブロック少量含む。P4に構造され、上面が硬化する。

### [P6 土層説明]

1. 10TR3/2 黑褐色土 粘性繰り有 ローム粒・ロームブロック少量含む。

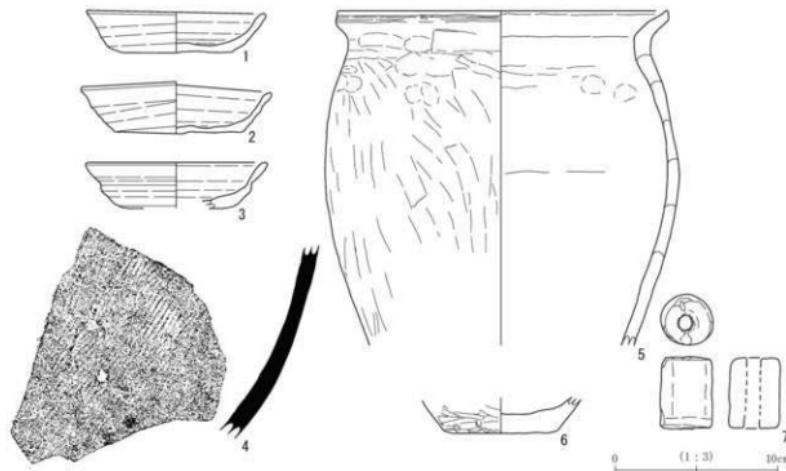
2. 10TR4/3 にぶい黄褐色土 粘性繰り有 ローム粒多量含む。

3. 10TR4/2 黄褐色土 粘性繰り有 ローム粒少量含む。

第42図 S116

遺物 土師器 137点(环・高台付环・皿・鉢・甕), 須恵器 49点(环・高台付环・环蓋・盤・壺・甕), 土製品 1点(土鍾), 製鉄関連 1点(鐵滓)である。図化した遺物は 7 点, 写真のみ掲載が 1 点である。1~3 は底部回転ヘラ切りの土師器環である。いずれも底形が大きく、類似する器形・寸法である。5 は器壁が厚い常縫型甕の年代的には新しいタイプと思われる。7 は 53g を量る管状土鍾である。8 は鐵滓であるが(覆土から出土; 写真図版 19), SI07からの混入と思われる。

時期 出土遺物からは、10世紀後葉~11世紀前葉と推測される。



第43図 S116出土遺物

第29表 S116出土土器観察表

No.	器種	法寸(cm)	器形・技法の特徴	追記欄: ( )前元組, ( )既存組		
				①歯土・②焼成・③色調	出土位置	備考
1	土師器 环	口径:11.0 器高:2.6 底径:7.0	平底から縁部は外傾して立ちあがる。内外面ヨコナギ。底部外表面は回転ヘラ切り。	①長石・石英粒を含む。 ②良好。 ③黄褐色。	東北部	
2	土師器 环	口径:11.7 器高:3.2 底径:7.7	平底から縁部は外傾して立ちあがる。内外面ヨコナギ。底部外表面は回転ヘラ切り。	①長石・石英粒を含む。 ②普通。 ③黄褐色。	南部部 壁塗内	内外面剥落。
3	土師器 环	口径:(11.2) 器高:(2.8) 底径:-	平底から縁部は内渦しつつ立ちあがり。縁部は外傾する。中段にくびれあり。内外面ヨコナギ。底部外表面は回転ヘラ切り。	①長石・石英粒を含む。 ②普通。 ③黄褐色。	覆土	破壊。
4	須恵器 甕	口径:- 器高:- 底径:-	体部片。外面に斜位の平行タタキ目。内面にヨコナギ。	①小窓・長石・石英粒を含む。 ②良好。 ③表面青灰色。内面灰色。	P6 覆土	
5	土師器 甕	口径:20.5 器高:(22.3) 底径:-	体部上位に最大径を有す。縁部へ縁部はぐの字状に立ちあがる。縁部は織みみだす。外表面ヨコナギ。体部はナグ。内面は上位はヨコナギ。下位はナグ。	①長石・石英粒を含む。 ②普通。 ③灰褐色。	東北部 覆土	破壊。
6	土師器 甕	口径:- 器高:(7.0) 底径:-	平底から縁部は外傾して立ちあがる。底部外表面、体部下位はヘラケズリ。内面はナグ。	①小窓・長石・石英粒を含む。 ②良好。 ③褐色。	南西部 覆土	内外面剥落。

第30表 S116出土土製品観察表

No.	器種	法寸(cm)	重量(g)	器形・技法の特徴	追記欄: ( )前元組, ( )既存組		
					①歯土・②焼成・③色調	出土位置	備考
7	土製品 管状土鍾	長さ: 4.4 口径: 3.2 厚さ: 0.9	53.0	両端が切断され。長軸に孔を有する。孔径: 5mm。側面は丁寧にナグが施される。	①長石・石英粒を含む。 ②良好。 ③赤褐色。	南西部 床面	

## S117

位置・重複関係等 B区南西端, P-1グリッドに位置する。大部分は西側の調査区外に延びる。

形状と規模 平面形は方形か長方形と推定され。規模は残存値で南北2.70m, 東西0.85m, 深さ36cmを測る。主軸方位は, N-86°-Wを示す。

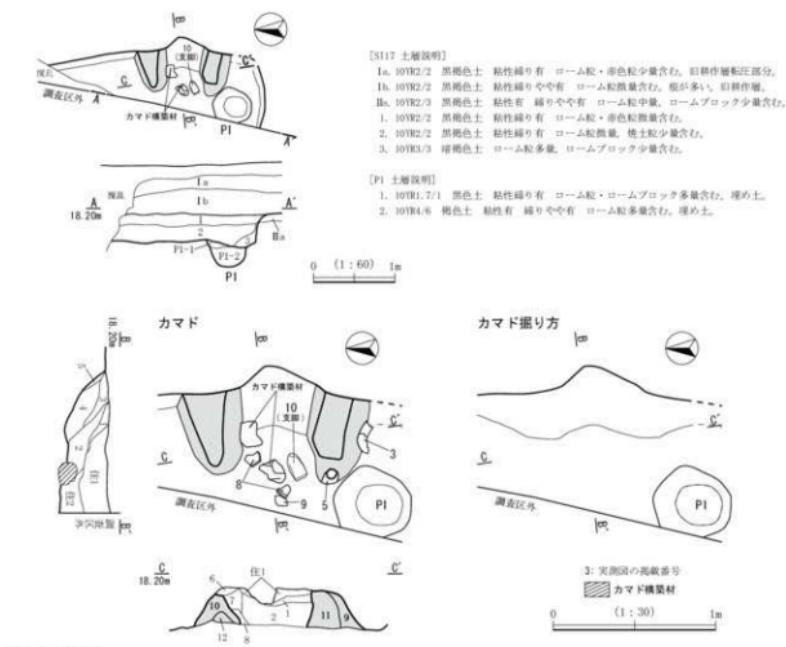
壁 最大壁高は36cmを測り、ほぼ垂直に掘り込まれている。

壁溝 調査区内では確認されなかった。

床 地山のⅢ層上面を床としていた。床面は概ね平坦で、全面にわたって硬化していた。

ピット 南東隅に1基確認された(P1)。規模は残存値で48×42cm, 深さ32cmを測る。ロームブロック混じりの埋め戻したような覆土である。形状・規模と位置から、主柱穴ないし貯蔵穴と考えられる。

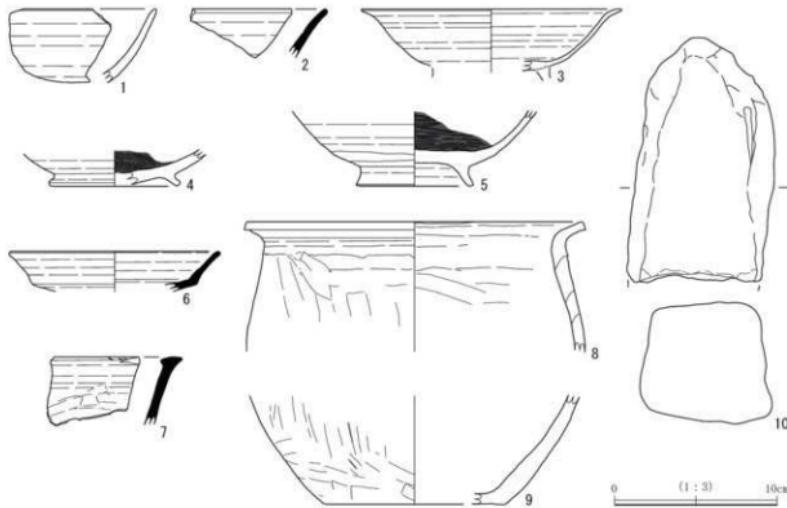
カマド 東壁の中央南寄りに構築されていた。規模は全長75cm, 幅117cm, 兩袖部の内法46cmを測る。



### [カマド 土層説明]

- 住 1. 10YR2/2 黒褐色土。[S117-1と同]
- 住 2. 10YR2/2 黒褐色土。[S117-2と同]
1. 10YR4/3 塚褐色土。粘性繊りやや有 ローム粒・桃土粒少量。ロームブロック微量含む。
2. 10YR2/4 塚褐色土。粘性繊りやや有 ローム粒・桃土粒・桃土粒中量含む。大井崩落土。
3. 10YR4/3 にふい黄褐色土。粘性繊りやや有 同色底。桃土粒中量含む。大井崩落土。
4. 10YR3/3 塚褐色土。粘性繊りやや有 ローム粒少量。桃土粒中量含む。
5. 10YR3/3 塚褐色土。粘性繊り有 ローム粒・桃土粒少量含む。
6. 10YR3/1 黑褐色土。粘性有 繊りやや有 ローム粒微量含む。
7. 10YR4/3 にふい黄褐色土。粘性繊り有 同色底。桃土粒中量含む。壁面崩落土。
8. 10YR3/3 塚褐色土。粘性なし 繊りやや有 桃土粒多量含む。壁面の地成部。
9. 10YR3/3 塚褐色土。粘性繊り有 ローム粒少量。同化物・赤褐色微量含む。抽構築土。
10. 10YR2/3 黑褐色土。粘性有 繊りやや有 ローム粒・桃土粒少量含む。抽構築土。
11. 10YR4/3 にふい黄褐色土。粘性繊り有 同色粒中量。ロームブロック・桃土粒少量含む。抽構築土。
12. 10YR4/4 棕褐色土。粘性繊り有 棕褐色塊主体。桃土粒少量含む。抽構築土。

第44図 S117



第45図 S117出土遺物

第31表 S117出土土器観察表

No.	器種	法量(cm)	器形・技法の特徴	①耐土・②焼成・③色調	出土位置	備考
1	土鍋器 杯	口径: - 器高: - 底径: -	体部から口縁部は内溝して立ちあがる。内外面ヨコナダ。	①長石、石英粒を含む。 ②普通。 ③外面部黄褐色、内面部灰色。	カマド 燃焼部	
2	須恵器 环	口径: - 器高: - 底径: -	口縁部は外反する。内外面ヨコナダ。	①黒色粒を含む。 ②良好。 ③灰色。	カマド内	
3	土鍋器 高台付環	口径: (9.6) 器高: (3.8) 底径: (8.0)	底部から体部は内溝して立ちあがり、口縁部は強く外反する。高台部は剥落、薄手。高台部内面剥落あり。外面部ヨコの体部回転ヘラケズリ。外面部ヨコナダ。	①微砂粒を含む。 ②良好。 ③褐色。	カマド 左袖外側	
4	土鍋器 高台付環	口径: - 器高: (2.2) 底径: (8.0)	底部から体部は内溝して立ちあがる。高台部は低いが外傾して貼付。端部は丸みをもつ。高台部外面剥落ナダ。体部外面ヨコナダ。内面はヘタミガキ。黑色絶縁。	①微砂粒を含む。 ②良好。 ③外面部褐色、内面部黑色。	カマド内	
5	土鍋器 高台付環	口径: - 器高: (4.6) 底径: (7.2)	底部から体部は内溝して立ちあがる。高台部は外傾して貼付。端部は平底。内面はヘタミガキ。内面は暗褐色。	①微砂粒を含む。 ②良好。 ③外面部褐色、内面部暗褐色。	カマド 左袖先	
6	須恵器 盤	口径: (12.0) 器高: (2.5) 底径: -	体部中位に縦があり、口縁部は外反する。内外面ヨコナダ。	①小窓、長石、石英粒を含む。 ②良好。 ③灰色。	カマド内	
7	須恵器 盤	口径: - 器高: - 底径: -	体部から口縁部にかけて外傾して立ちあがる。口縁部は幅広く平坦。口縁部内面ヨコナダ。	①長石、石英粒を含む。 ②良好。 ③灰色。	床面	
8	土鍋器 盤	口径: (21.0) 器高: (9.0) 底径: -	底部から口縁部はV字状に立ちあがる。口縁部は平坦に作出される。外面部ヨコの体部回転ヘラケズリ。内面部ヨコナダ。体部ヘラナダ。	①長石、石英粒、雲母を含む。 ②普通。 ③外面部褐色、内面部暗褐色。	カマド内	口縁部内外面に保有者。
9	土鍋器 盤	口径: - 器高: (6.7) 底径: (11.2)	平底から体部は外傾して立ちあがる。体部外面下位は縱後のナダ。体部下端は横後のケズリ。内面はナダ。	①長石、石英粒、雲母を含む。 ②普通。 ③赤褐色。	床面	被熱し、内外面剥落。

第32表 S117出土石製品観察表

No.	器種	法量(cm)	重量(g)	特徴	石材	出土位置	備考
1B	石製品 支脚	長さ: 34.0 幅: 8.0 厚さ: 6.8	489.5	円角柱で、頂面は尖る。横断面は方形を呈する。側面は腹壁のヘラケズリ。色調は灰黄色。	凝灰岩	カマド内	外面部剥離。

壁外への突出部分は小さい。袖部はにぶい黄橙色砂質粘土と黒褐色土や暗褐色などの混合土を用いて構築されていた。天井部は崩落しており、2・3層がそれに該当すると考えられる。燃焼部から煙道部には、広い範囲にわたって焼土が堆積しているが、明瞭な火床面は確認できなかった。焚口部付近には、被熱して赤化した凝灰岩の破片が検出された。カマドの内部からは、土師器・須恵器片が出土しており、焚口部には凝灰岩製の支脚(10)が奥に向かって倒れた状態で出土した。

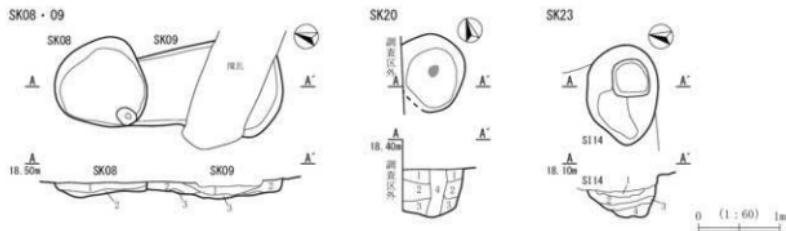
**覆土** 3層に分けられる。黒褐色土と暗褐色土が流れ込んだような堆積を示し、自然堆積と考えられる。

**遺物** 土師器70点(环・高台付塊・小型甕・甕)、須恵器20点(环・盤・甑・甕)、石製品1点(支脚)である。図化した遺物は、10点である。3は薄手の土師器高台付塊で11世紀第2四半期か。4・5は高台が低く、ハの字形に広がる内黒の高台付塊で、年代は10世紀後半である。8は厚手の常縫型甕で、年代的には新しい。10は凝灰岩を面取りして四角柱に加工している。

**時期** 出土遺物からは、10世紀後葉～11世紀前葉と推測される。

## 2 土坑

この時期の土坑は4基検出した。出土場所はA区南側で2基、B区内で2基である。覆土と出土遺物の様相からこの時期としたが、SK20は柱痕跡がみられることから柱穴の可能性もある。形態は円形を中心とし、一部長方形もある。規模は長軸・短軸共に100cm内外である。出土遺物は土師器片が多く、図化可能な遺物はない。



[SK08 土層説明]

1. 10YR2/5 黒褐色土 粘性強い 繰り有 焼土和・炭化物  
微量、褐色粘少量含む。
2. 10YR4/6 楊色土 粘性強い 繰り有 ローム主体層。
3. 10YR3/2 黒褐色土 粘性強い 繰り有

[SK20 土層説明]

1. 10YR2/3 黒褐色土 粘性なし 繰り有 ローム粒・黑色粘少量含む。埋め土。
2. 10YR3/3 墓兩色土 粘性強い 繰り有 ロームブロック少量、黑色粘少量含む。埋め土。
3. 10YR2/2 黒褐色土 粘性強い 繰り有 ローム・黒色粘微量。ロームブロック中量含む。埋め土。
4. 10YR3/2 黒褐色土 粘性強い 繰り有 ローム粘少量、黑色粘少量含む。

[SK09 土層説明]

1. 10YR2/2 黒褐色土 粘性なし 繰り有 ローム粒微量含む。埋土。
2. 10YR2/3 黑褐色土 粘性強い 繰り有 ローム・黒色粘微量含む。ロームブロック微量含む。
3. 10YR4/4 楊色土 粘性やや有 繰り有 褐色粘微量含む。

[SK23 土層説明]

1. 10YR2/3 黑褐色土 粘性強い 繰り有 ロームブロック少量含む。
2. 10YR3/3 墓兩色土 粘性強い 繰り有 ロームブロック微量含む。黑色粘少量含む。
3. 10YR2/2 黑褐色土 粘性強い 繰り有や少 ローム粘少量、ロームブロック微量含む。
4. 10YR4/4 墓色土 粘性強い 繰り有 ローム主体層。

第46図 奈良・平安時代の土坑(SK08・SK09・SK20・SK23)

第33表 奈良・平安時代の土坑一覧表

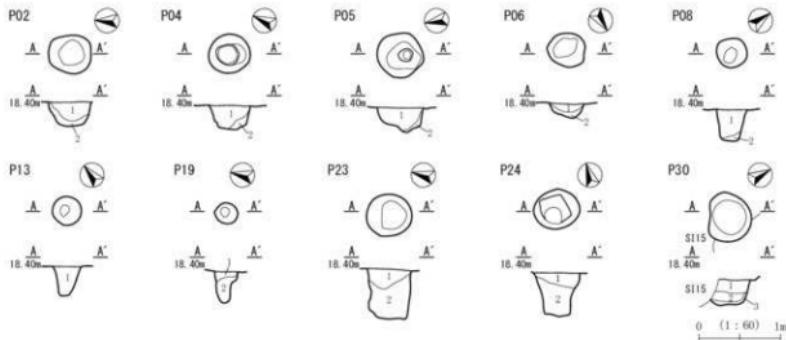
土坑名	区	グリッド	平面形	断面形	寸法(cm)			切り合せ開拓	出土遺物(総数、単位点)等
					長軸	短軸	深さ		
SK08	A区	G-9+10	不整円形	圓形	115	108	18	SK09を切る。	土師器11环、环甕、小型甕、甕、須恵器2环甕
SK09	A区	G-11+10	不整長方形	圓形	(166)	111	18	SK08に切られる。	土師器2环
SK20	B区	Q-1	不整横円形	逆台形	94	(86)	57	-	なし、柱窓あり
SK23	B区	N-2	不整横円形	逆台形	122	88	42	S114に切られる。	なし

\*出土遺物: 開口の遺物2。その遺構に伴う時代の遺物のみ記載している。

### 3 ピット

この時期のピットは10基検出した。出土場所はA区南側に集中する傾向があるが(6基),並びのみられるものはない。覆土と出土遺物の様相からこの時期とした。ピットの形態はいずれも円形を中心とし,規模は26~72cm,深さは17~61cmで,柱痕跡が認められるものはなかった。出土遺物は土師器の破片が主であり,図化可能な遺物はなかった。

(小野・鈴木)



[P02 土層説明]

1. 10TR2/2 黒褐色土 粘性やや弱い 繊り有 ローム粘・褐色粘微量含む。
2. 10TR3/3 墓褐色土 粘性やや有 繊り有 褐色粘微量含む。

[P04 土層説明]

1. 10TR2/2 黑褐色土 粘性やや有 繊り有 ローム粘・黒色粘微量含む。
2. 10TR3/4 墓褐色土 粘性やや有 繊り無い ローム粘中量。ロームブロック微量含む。

[P05 土層説明]

1. 10TR2/2 黑褐色土 粘性強い 繊り有 ローム粘・黒色粘・褐色粘微量含む。
2. 10TR4/4 黄褐色土 粘性弱い 繊り無い コーム主体層。

[P06 土層説明]

1. 10TR2/2 黑褐色土 粘性強い 繊り有 ローム粘・ロームブロック・褐色粘微量含む。
2. 10TR3/3 墓褐色土 粘性繊り有 ロームブロック・褐色粘微量含む。

[P08 土層説明]

1. 10TR2/2 黑褐色土 粘性繊り有 ローム粘・ロームブロック中量含む。
2. 10TR5/8 黄褐色土 粘性繊り有 ローム粘多量含む。

[P13 土層説明]

1. 10TR2/3 黑褐色土 粘性繊り有 ローム粘・ロームブロック中量含む。

[P19 土層説明]

1. 10TR2/1 黑褐色土 粘性繊り有 ローム粘中量。ロームブロック少量含む。
2. 10TR2/1 黑褐色土 粘性繊り有 ローム粘・ロームブロック少量含む。

[P23 土層説明]

1. 10TR2/2 黑褐色土 粘性繊り有 ローム粘中量。黑色粘微量含む。
2. 10TR2/2 黑褐色土 粘性繊り有 ローム粘多量。ロームブロック少量。黑色粘微量含む。

[P24 土層説明]

1. 10TR2/2 黑褐色土 粘性繊り有 ローム粘少量。ロームブロック中量。赤色粘微量含む。
2. 10TR2/3 黑褐色土 粘性繊り有 ローム粘有 ロームブロック少量含む。

[P30 土層説明]

1. 10TR2/1 黑褐色土 粘性やや有 繊り有 ローム粘・ロームブロック少量含む。
2. 10TR2/2 黑褐色土 粘性やや有 繊り有 ローム粘少量含む。
3. 10TR2/2 黑褐色土 粘性繊り有 ローム粘・ロームブロック中量含む。

第47図 奈良・平安時代のピット  
(P02・P04・P05・P06・P08・P13・P19・P23・P24・P30)

第34表 奈良・平安時代のピット一覧表

ピット名	IK	グリッド	平面形	断面形	寸法(cm)				切り合ひ關係	出土遺物(総数、単位点)等
					長軸	短軸	深さ	底面標高		
P02	A1K	H-9	不整規円形	逆台形	72	63	59	17.70	-	土師器: 隅1
P04	A1K	G-9	円形	橢形	52	48	29	18.00	-	土師器: 隅2, 重窓器: 斧柄1
P05	A1K	G-9	不整規円形	四字形	54	53	30	17.95	-	なし
P06	A1K	G-8	不整規円形	圓形	47	42	17	18.10	-	土師器: 斧柄1
P08	A1K	B-9	円形	逆台形	39	37	38	17.85	-	なし
P13	A1K	F-9	円形	逆台形	35	35	36	17.90	-	なし
P19	A1K	C-10	円形	浅形	29	26	40	17.85	-	なし
P23	A1K	G-7	円形	箱形	57	52	61	17.65	-	土師器: 隅9
P24	A1K	G-6	不整規円形	逆台形	57	49	54	17.65	-	土師器: 隅1, 重窓器: 斧1
P30	B1K	L-2	不整規円形	箱形	60	(54)	31	17.80	S115に切られる。	なし

\*「出土遺物」欄の箇所は、その遺物に伴う特徴的遺物のみ記述している。

## 第5節 中・近世

### 1 溝跡

#### SD01

位置・重複関係等 A区南端, H-9~11, I-9~12グリッドに位置し, A区の南端に沿って東西方向に延びている。SD03を切り込んでいる。南壁の大部分と、両端部は調査区外に延びている。

形状と規模 規模は残存値で全長18.5mを測る。走行方向はN-86°-Wを示す。東半部と西半部で断面形及び底面の形状が異なる。東半分は、幅4.14m、深さ0.93~1.33mを測り、断面形は箱築研状を呈する。北側に長さ8.06m、幅1.30~1.42mの平場が設けられている。平場の確認面からの深さは24~42cm、溝の底面からの高さは69~93cmを測り、壁面は比較的急傾斜で掘り込まれている。溝の底面は概ね平坦で、幅0.42~0.6mを測る。西半分は、南側が調査区外のため全容は不明ではあるが、残存値で幅2.6m、深さ76~102cmを測り、断面形は逆台形を呈する。壁面は比較的急傾斜で掘り込まれている。底面は概ね平坦で、残存値で幅2.12mを測る。東西両端の底面標高は、西高東低で37cmの高低差が認められる。流水、滯水の痕跡は確認されなかった。

覆土 東端付近で13層、中央付近で4層の計17層に分けられる。ローム粒とロームブロックを多く含んだ黒褐色と暗褐色土を中心としており、基本的には埋め土と考えられる。

遺物 東端に近い覆土上層から土器の焰烙が2点(1・2)、陶器大甕の破片が、覆土下層から1点(3)、断面Aの3層から1点(4)、B付近の上層から1点(5)の計3点が出土した。

時期 覆土の様相と出土遺物から、中・近世の所産と考えられる。内耳土器からは近世にまで下る可能性がある。

#### SD02

位置・重複関係等 A区南側中央、G-8~12グリッドに位置するが、東西両端は消失している。SD04を切り込み、SD03に切り込まれている。東側を部分的に撹乱で壊されている。

形状と規模 走行方向は東西方向で、長軸方向はN-84°-Wを示す。規模は残存値で全長17m、幅0.54~1.22m、深さ3~14cmを測る。断面形は皿状を呈し、浅い。東西両端の底面標高は、東高西低で16cmの高低差が認められる。流水、滯水の痕跡は確認されなかった。

覆土 3層に分けられる。ローム粒を少量含んだ黒褐色土を中心としており、自然堆積と考えられる。

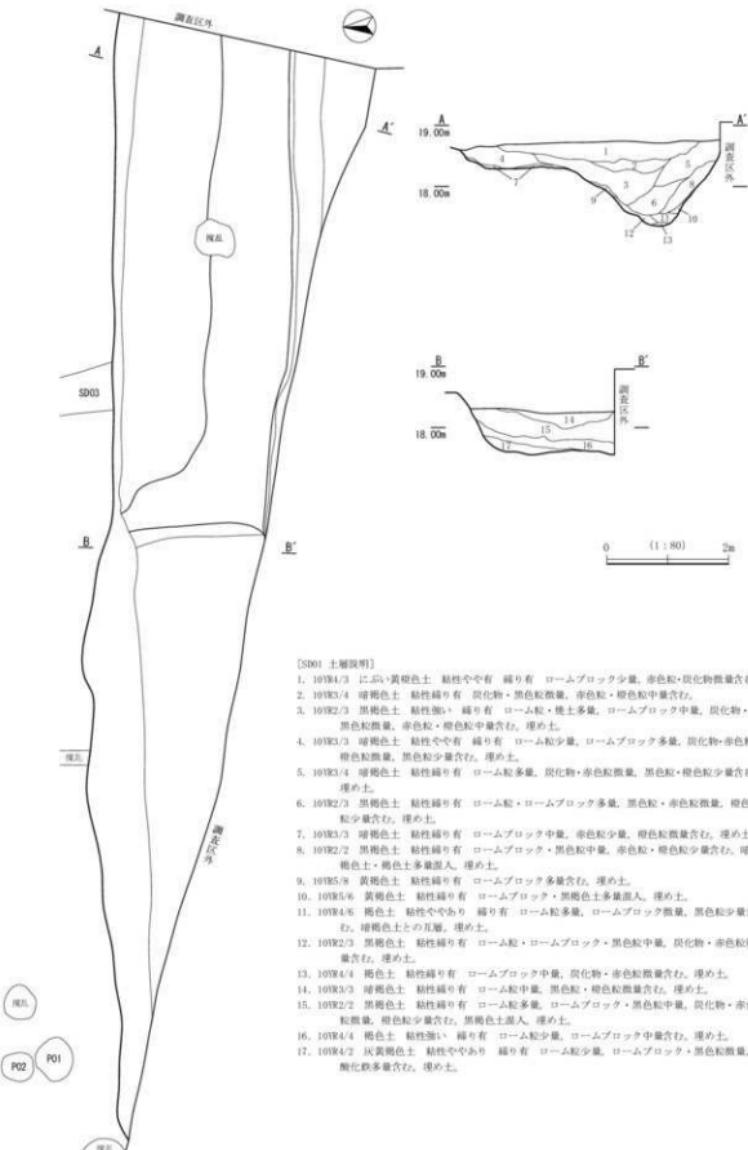
遺物 本遺構に伴う遺物はない。

時期 覆土の様相と走行方向から、中・近世の所産と考えられる。

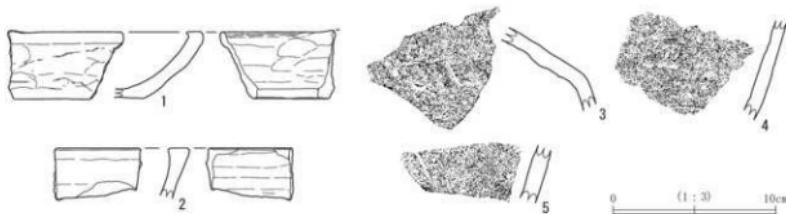
#### SD03

位置・重複関係等 A区南側、F-6~11、G・H-11グリッドに位置し、掘り込み面はIIa層上面である。SD02・04を切り込み、SD01に切り込まれて欠失する。

形状と規模 走行方向はF-10グリッドで東西方向から向きを変えて南東方向に変える。F・G-6~10グリッドでは3m弱の間隔でSD04と並行する。全長32.92m、幅0.44~1.08m、深さ20~28cmを測る。長軸方向は、N-18°-WからN-87°-Wへと変わる。掘り込み面から残る西壁の断面Eでは、幅1.5m、幅0.94m、深さ66cmを測り、断面形は逆台形を呈する。底面はやや起伏を持つものの、概ね平坦である。本溝の西と両端の底面標高は、南高西低で17cmの高低差が認められる。流水、滯水の痕跡は確認されなかった。



第48図 SD01



第49図 SD01出土遺物

第35表 SD01出土陶器・土器観察表

No.	器種	法縦 (cm)	器形・技法の特徴	法縦解説 ( ) 厚さ値、( ) 残存層		
				①断土・芯焼成・③色調	出土位置	備考
1	土器 盤形	口径: - 器高: - 底径: -	瓦質。平底から体部は外傾して立ちあがる。口唇部は平坦で、内側部は突出する。体部外面は織成り成形で、内外面共にココナヂ。体部下端はへたり目で仕上げられる。	① 長石、石英粒、雲母を含む。 ② 普通。 ③ 黑褐色。	1~5層 1~12グリッド	外表面保付着。 17~19世紀。
2	土器 盤形	口径: - 器高: - 底径: -	瓦質。体部から縁部は外傾して立ちあがる。口唇部は平坦に作出する。口縁部と体部外面はココナヂ。	① 長石、石英粒を含む。 ② 普通。 ③ 黑褐色。	1~5層 1~12グリッド	外表面保付着。 17~19世紀。
3	陶器 大甕	口径: - 器高: - 底径: -	肩部から体部共に内面はココナヂ。外表面灰。	① 長石、石英粒を含む。 ② 良好。 ③ 外表面灰白色。内面暗褐色。	1~5層 1~12グリッド	常満底 14~15世紀。
4	陶器 大甕	口径: - 器高: - 底径: -	体部は輪積みで成形され、内外面共にココナヂ。	① 長石、石英粒を含む。 ② 良好。 ③ 外油時赤色。内面灰。	土層断面Aの 3層 1~12グリッド	常満底 14~15世紀。
5	陶器 大甕	口径: - 器高: - 底径: -	体部片。内外面共にナマ。	① 長石、石英粒を含む。 ② 良好。 ③ 布市褐色。	1~5層 1~10グリッド	常満底 14~15世紀。

覆土 5層に分けられる。ローム粒を少量含んだ黒褐色土を中心としており、自然堆積と考えられる。

遺物 本遺構に伴う遺物はない。

時期 覆土の様相と走行方向から、中・近世の所産と考えられる。

#### SD04

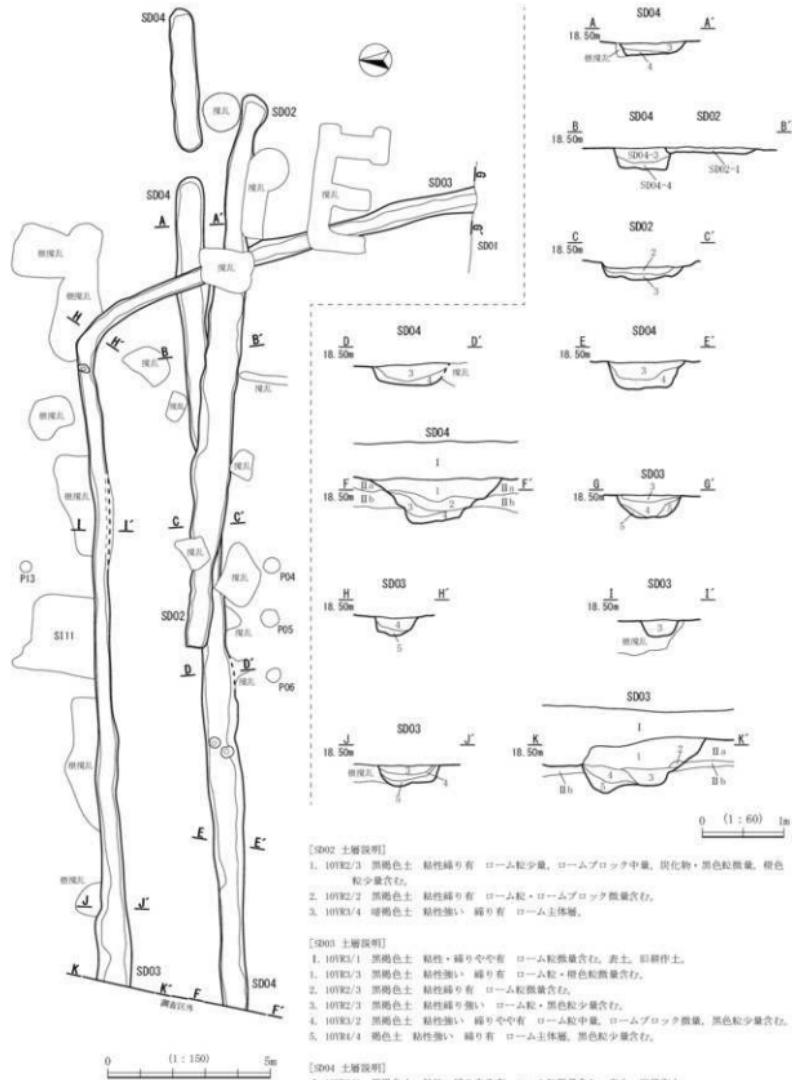
位置・重複関係等 A区南側中央、G-6~12グリッドに位置し、掘り込み面はIIa層である。東端は浅くなり消失しており、西側は調査区外へ延びる。F・G 6~10グリッドでは3m弱の間隔でSD03と並行する。SD02・03に切り込まれている。

形状と規模 走行方向は東西方向で、方向はN-87°-Eを示す。残存値で長30.84m、幅0.64~1.08m、深さ18~34cmを測る。掘り込み面から残る西壁では幅1.82m、底面幅0.64m、深さ54cmを測り、断面は逆台形を呈する。底面は概ね平坦である。本溝の東西両端の底面標高は、東高西低で8cmの高低差が認められる。流水、滯水の痕跡は確認されなかった。

覆土 西壁の断面Fで4層に分けられる。ローム粒とロームブロックを少量含んだ黒褐色土を中心としており、自然堆積と考えられる。

遺物 本遺構に伴う遺物はない。

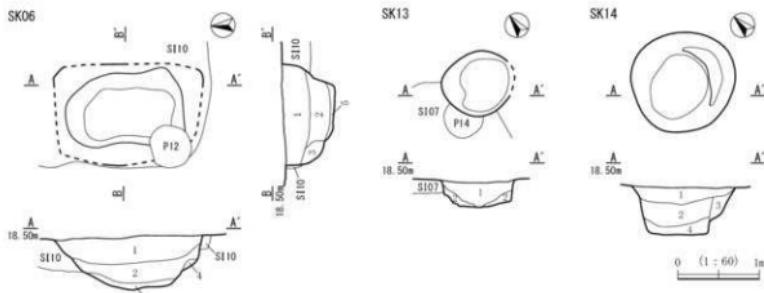
時期 覆土の様相と走行方向から、中・近世の所産と考えられる。



第50図 SD02・SD03・SD04

## 2 土坑

この時期の土坑は4基検出した。出土場所はA区で3基、B区で1基である。覆土と出土遺物の様相からこの時期とした。形態は平面形ではSK06が長方形、SK13・14が円形である。規模はSK06が長軸で170cm以上、SK13・14は80~130cm、深さは30~65cmを測る。出土遺物はSK13から羽口と鉄滓がみられるが、これは小鍛冶址と推定されるSI07を切り込んで構築されていることから、混入と考えられる。但し本報告ではSK13出土遺物として他の遺物も含めて掲載した。



[SK06 土層説明]

- 10YR3/3 黑褐色土 粘性強い 繼り有 ロームブロック 黑褐色土塊・黑色粘多量、燒土塊・炭化粘多量、褐色粘多量、赤色粘少量含む。埋め土。
- 10YR3/2 黑褐色土 粘性強い 繼り有 ロームブロック中量、黑褐色土塊・黑色粘少量、非色粘多量含む。埋め土。
- 10YR2/2 黑褐色土 粘性強い 繼り有 ロームブロック多量、褐色粘少量、黑色粘多量含む。埋め土。
4. 10YR5/6 黄褐色土 粘性強い 繼り有 ローム主体層、堆積土との互層。埋め土。
5. 10YR5/6 黄褐色土 粘性強い 繼り有 ロームブロック中量、黑色粘多量含む。埋め土。

[SK13 土層説明]

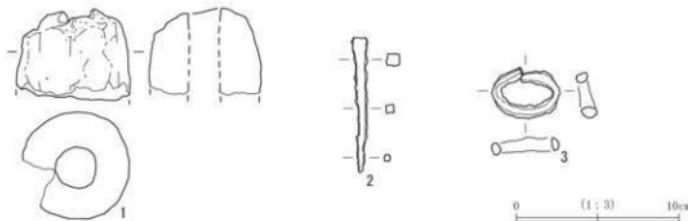
1. 10YR2/1 黑褐色土 粘性強り有 ローム粘少量、燒土塊中量、赤色粘少量含む。埋め土。
2. 10YR2/2 黑褐色土 粘性強り有 ローム粘少量、ロームブロック半量含む。埋め土。
- [SK14 土層説明]
1. 10YR3/4 黑褐色土 粘性やや有 繼り有 ローム粘少量、黑色粘多量含む。
2. 10YR4/2 黑褐色土 粘性やや有 繼り有 ローム粘少量、ロームブロック・黑色粘・褐色粘多量含む。燒土塊含む。
3. 10YR4/4 黄褐色土 粘性強い 繼り有 ローム主体層。
4. 10YR4/6 黄褐色土 粘性やや有 繼り有 黑色粘多量含む。

第51図 中・近世の土坑(SK06・SK13・SK14)

第36表 中・近世の土坑一覧表

土坑名	IK	グリッド	平面形	断面形	寸法(cm)			切り合ひ・側壁	出土遺物(総数、単位点)等
					長軸	切軸	深さ		
SK06	A IK	H-30	長方形	楕円形	177	125	65	SI 30・P 32を切る。	伴う遺物はなし。
SK13	A IK	G-8	不整円形	楕円形	92	80	34	SI 07・P 14を切る。	金具製品2、土製品1、鉄滓2。
SK14	A IK	D-11	不整円形	設形	130	125	57	なし。	なし

\*出土遺物: 製作遺物は、その遺構に伴う時代の遺物のみ記載している。



第52図 SK13出土遺物



## 第6節 遺構外出土遺物

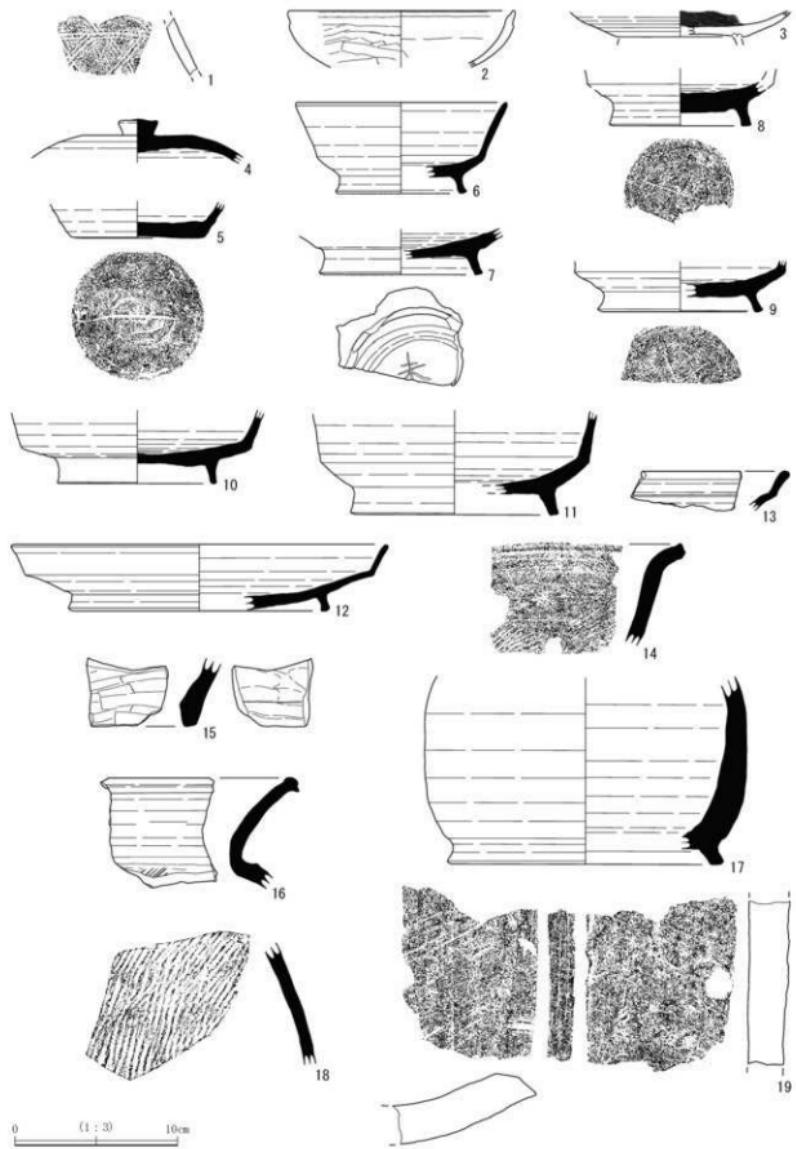
遺構以外から出土した遺物、その遺構に伴わない時代の遺物計25点の実測図を掲載した。前者は7点、後者は18点である。SD01は奈良・平安時代の遺物の多く出土するが、これはSD01の規模が大型であること、東南側隣接地点(第8地点第3次調査)にも奈良・平安時代の竪穴建物跡や掘立柱建物が存在することからの混入と考える。SD03からの出土遺物も多いが、これも同様の理由が考えられる。

4は須恵器擬宝珠形摘みの付く坏蓋。5は底部回転ヘラ切りの木葉下窓跡群産の須恵器坏、6～11は須恵器高台付坏で木葉下窓跡群の製品も多いと思われる。年代は12・13の盤も含めて下限は8世紀後半と考えられる。これらは今次調査の竪穴建物跡で検出されているのと同タイプの製品が目立つ。19～21は平瓦であるが、裏面はいずれも斜方向の削り痕が顕著である。22は丸瓦で内面側には布目痕が残る。23は底部内面に渦巻を残す中世のかわらけである。底部は右回転糸切である。24・25は縄文時代の石器である。24は砂岩製の敲石で裏面に窪みがみられる。25は黒曜石製の凹基跡である。

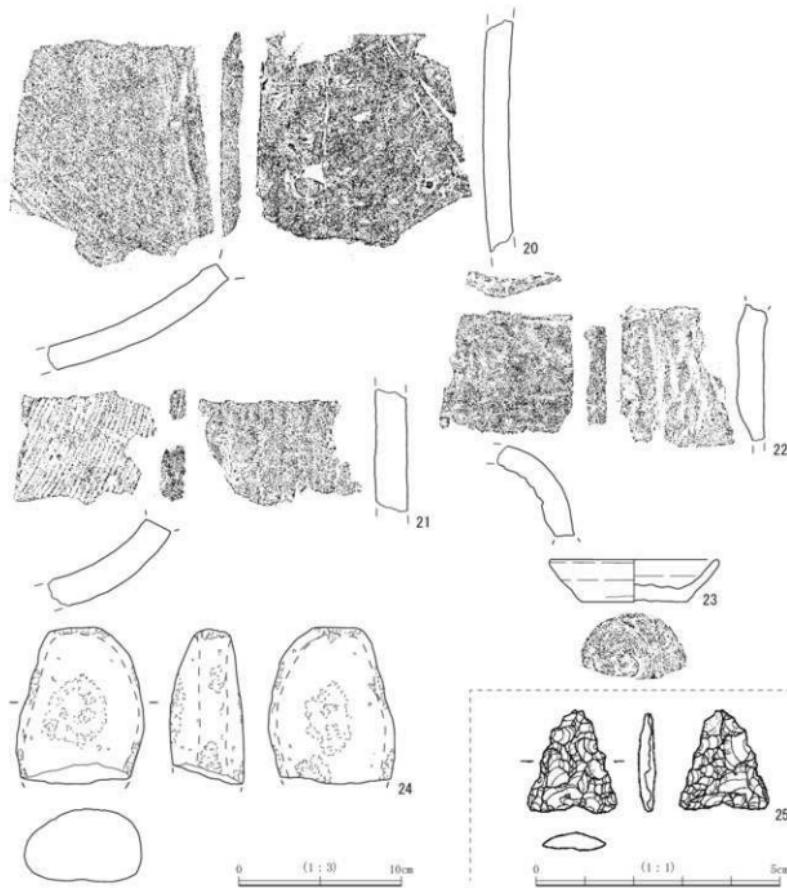
## 第7節 出土遺物集計表について

第44～49表に全出土遺物の時代別、材質別、器種別の集計表を掲げた。これは破片数を数えたものを「破片」数とし、その器種の底部片の数を「個体」数とした。個体数の換算法をこの方法にしたのは、土師器の表が沢山の破片になりやすく、破片数と個体数の間に大きな誤差が生じることによる。また土師器表は薄い破片が多いため、口縁から底部までの全形を把握できる個体の復元がしづらいことから、部位の破片で代表させることとした。それには多くの破片になりやすい口縁部ではなく、底部片を採用した。とはいってこの数は、より実数に近い数を表しているにすぎないものもあるが(この実数は第44表の土師器表の破片数と個体数の差をみれば一目瞭然である)。この集計方法は弥生土器、中・近世の出土遺物でも同様であり、実測遺物も「破片」数、「個体」数のどちらかに含まれる。なお「土製品」「石器」「金属製品」「製鉄関連」等のもともと出土量が少なく、個体資料としての認識がしやすい資料は「個体」数として換算した。各集計表の右端の「総数」が、その遺構の総破片数となる。

(鈴木)



第54図 遺構外出土遺物(1)



第55図 遺構外出土遺物(2)

第40表 遺構外出土器観察表

No.	器種	法長(cm)	器形・技法の特徴	法面(—)背元(○)既存(△)		
				①新土・②地成・③色調	出土位置	備考
1	弥生土器 壺	口径:— 器高:— 底径:—	瓶部へ体部が、3条単位の沈線で瓶部と体部を区画し、斜格子目文を施す。体部の上部には上向き連弧文。	①長石・石英粒を含む。 ②良好。 ③暗褐色。	F-11グリッド 覆瓦。	
2	土師器 壺	口径:(14.0) 器高:(3.5)	丸底小口。体部は内溝して立ちあがり、口縁部は直立する。口縁部は丸り気味に作出され、くの字状。体部外表面はヘラケヅリ、口縁部はヨコナガ、内面はヨコナガ。	①長石・石英粒。雲母を含む。 ②普通。 ③内外曲面褐色、褐色。	S001 1-11グリッド 覆瓦。 1~5+7層	
3	土師器 高台付壺	口径:— 器高:(1.6) 底径:(8.0)	平底小口。体部は外傾しつつ立ちあがる。高台部は削窓、内外面はヨコナガ。体部下段へ底部外表面は円周ヘラケヅリ。内面はハミガキ、黑色処理。	①小範、長石・石英粒、斜状物を含む。 ②良好。 ③外曲面褐色、褐色。	S003 1-11グリッド 覆瓦。	
4	吳器 壺	口径:— 器高:(2.7)	縹み径2.4cm。天井部は平坦に作出さず、逆円錐台形の縹みを駆け付、周面に向て内窪する。天井部は円周ヘラケヅリ。内面はヨコナガ。外周部に自然崩壊。	①長石・石英粒を含む。 ②良好。 ③灰色。	S003 F-8グリッド 覆瓦。	









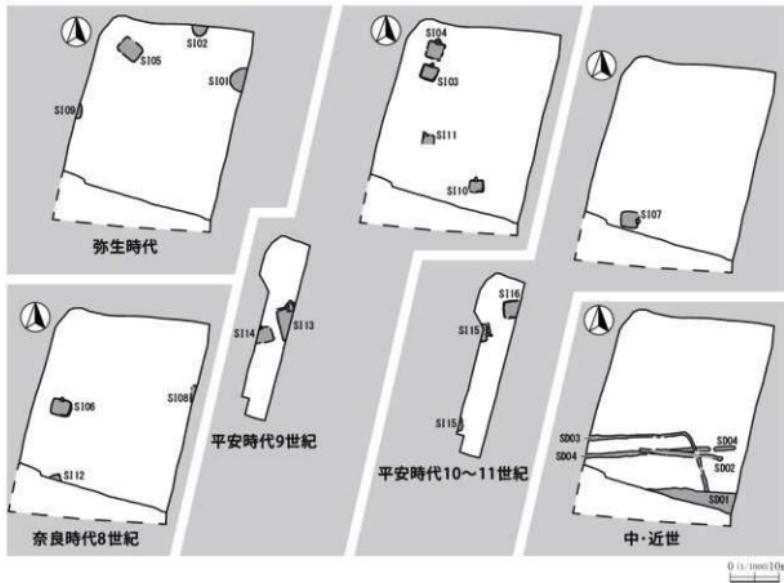


## 第4章 総括

本地点の調査で検出された遺構は、奈良・平安時代、中・近世と断続的ではあるが、3つの時代にまたがる。ここではその土地利用の変遷を遺構・遺物からまとめてみることとしたい。

**弥生時代** 検出された竪穴建物跡は4軒で、A区北半部に10~15m間隔で単独で立地しており、台地の縁辺に寄る傾向がみられる。建物跡の平面形は円形のSI01・02と長方形のSI05・09に大別される。一方出土土器はSI01・02・05では後期前半の東中根式でも3,4条単位の施文具で波状文や連弧文を描いており、型式学的にはそれほどの差異は認められないと考える。建物跡の平面形は東中根式1式から2式への移行時の特徴として正円形が表われるとされるが(鈴木他2010)、本地点の土器の型式はいずれも東中根1式の範疇と推定され、大きく外れるものもないようである。鶴見貞雄によれば那珂川下流域と恋瀬川流域には弥生時代後期前半に炉石が出現するが(鶴見1996)、SI01は炉石が検出されている。いずれにせよ本調査は那珂川下流右岸域の水戸市域においての弥生時代後期前半の竪穴建物集落として初検出であった。なおSI01では福島県浜通り南部域の「輪山式」の系譜と推測される同心円施文がみられる土器(第9図-1)があることを特記しておく。

**奈良・平安時代** この時期は竪穴建物跡13軒が検出された。これらは出土遺物の様相から(特に須恵器坏の口径底径比)、8世紀と9世紀前葉～中葉、10世紀後葉～11世紀前葉の3時期に分けられる。8世紀の竪穴建物跡はSI06・08・12の3軒である。8世紀中葉～後葉のSI12を本地点での奈



第56図 遺構の変遷 (1/1,000)

良時代の初現とし、8世紀後半はSI06・08の2軒である。建物間の距離は10～20m空いている。北西に隅カマドをもつSI12は全貌が不明であるが、9世紀のSI11と同様に居住するには小さすぎるサイズの竪穴建物跡であり、具体的な用途は不明であるが、居住を伴わない作業場や非日常的な行為のための空間などが想定される。

9世紀は前葉～中葉のSI11、中葉のSI03・04・10・13と、年代の特定できないSI14を含めれば6軒となる。このうちSI03・04・10・13は須恵器環の器形・寸法は同タイプであり、3～6個体が揃っている。同時期の廃絶の可能性もあるが、SI03とSI04は1m強しか離れておらず、同時存在には疑問がある。SI13は本地点内では最も大きい竪穴建物跡である。カマドも他の建物跡よりひとり大きい。壁溝内にはビットが数基検出されており、これは重量のある上屋構造を補強するためと考えられる。A区中央に位置するSI11は北西隅にカマドを持つ小型の建物跡である。上記のSI12と同様な空間と推測する。遺物もSI03からは4点、SI10からは1点の墨書のある環が出土している。また、SI13からは円面鏡の破片が出土している。これらの遺物の存在から官衙関係の想定もできよう。

10世紀後葉～11世紀前葉に展開するのは、SI07・15・16・17の4軒である。検出場所は最も近いSI15・16間が約3mであるが、あとは15～20mの間隔で点在する。カマドはいずれも東向きであり、8・9世紀の竪穴建物跡は北向きであったとのことは相違する。出土遺物から見た年代では、SI07を10世紀後葉としたが、ハの字状に聞く高い高台の内黒の塊は、SI15にも共通する器種であり、SI07の下限が下がる可能性もある。またSI07は中央部の床面に小鍛冶址と推定されるビットを有する。鍛造削片も検出されており、この集落の村の鍛冶屋的な存在を担っていたとも思われる。

空間的な広がりを考えてみると、東側に隣接する第8地点第3次調査でも8世紀後半、9世紀前半、10世紀第2四半期以降の3時期の竪穴建物跡が15軒検出されており、本地点と同様な年代での集落の展開となっている。10世紀以降の竪穴建物跡のカマドの向きは、検出された7軒の内6軒が東カマドであり、本地点の同時期の竪穴建物跡のカマドの向きと同じである。同一の集落と捉えることが妥当であろう。なお、3次調査ではこの年代の掘立柱建物も3棟検出されており、これらも伴っての集落が継続して営まれていたと推測される。

**中・近世** A区南半部で東西を走行方向とする溝が検出された。SD01はA区南端にかかる幅も広く、深さも深い大型の溝で、その北側6mに位置するSD02と走行方向は同じである。一方SD03とSD04はSD01・02より走行方向は北にずれるが、並行する部分がある。奈良・平安時代の竪穴建物跡の軸方向とは明らかに相違しており、竪穴建物跡(SI11)も切っている。SD02～04は遺構に伴う遺物はないが、SD01は中世後半の陶器と近世の土器が出土しており、これは廃絶時期を示していると推測される。検出されたのは一部のみであり、その性格を語るのは早急ではあるが、大型のSD01は敷地の境界を示すためや、居館の周囲の区画溝、また規模が小さく、一部走行方向が並行するSD03・04は道の側溝などの可能性をあげておく。近代初期の地図(特に道や字名など)との整合も必要になってくると思われる。

東前原遺跡では本地点も含めて約10地点の発掘調査が行われている。1地点1地点の調査は、遺跡の中では点の調査にすぎない。まずは遺跡の全貌を把握するための作業が急務と考える。

(小野・鈴木)

## 【引用・参考文献】

- 秋元古郎校注 1958「常陸國風土記」「風土記」日本古典文学大系2 岩波書店
- 浅井哲也 1991「茨城県内における奈良・平安時代の土器（1）」『研究ノート創刊号』財團法人茨城県教育財团
- 1992「茨城県内における奈良・平安時代の土器（II）」『研究ノート2号』財團法人茨城県教育財团
- 伊東重敏 1976『大六天古墳（森戸古墳群第12号墳）』茨城県東茨城郡常澄村教育委員会
- 井上義安 1985『水戸市下畠遺跡 市道酒門8号線拡幅工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』水戸市教育委員会
- 1994『水戸市大串遺跡 市道常澄8-1495号線埋蔵文化財発掘調査報告書』茨城県水戸市
- 1998『伊豆屋敷跡確認調査報告書』墓地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』水戸地方埋蔵文化財研究会
- 井上義安・金子浩正 1996『水戸市大串遺跡 常澄中学校増改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』茨城県水戸市
- 井上義安・千葉隆司 1995『水戸市北屋敷古墳 市道常澄7-0057号線埋蔵文化財発掘調査報告書』茨城県水戸市
- 太田有里内・土生朗治 2015『小原遺跡（第3地点） 都計道7・6・1号外3路線道路改良及び流域関連下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』水戸市教育委員会
- 小川和博・大瀬淳志・川口武彦・木本學周・渥美賢吾・閑口慶久・株式会社京都科学 2008『大串遺跡（第7地点）一介護老人保健施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一』水戸市教育委員会
- 樺村宣行 1995『一般国道6号東水戸道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書II 梶内遺跡』財團法人茨城県教育財团
- 川口武彦 2005『水戸市下入野町出土の神子柴型尖頭器』『婆良岐考古』第27号 婆良岐考古同人会
- 2008『水戸市百合ヶ丘町出土の神子柴型尖頭器』『婆良岐考古』第30号 婆良岐考古同人会
- 川口武彦・小川和博・大瀬淳志 2002『水戸市元石川町所在 小仲根遺跡発掘調査報告書』水戸市教育委員会
- 桐生直彦 2007『集落遺跡検討の一視点－茨城県花房・大日遺跡の分析を中心として－』『婆良岐考古』第29号 婆良岐考古同人会
- 小玉秀成 2010『東中根1式土器の細部とそれに併行する土器群』『茨城県考古学協会誌』第22号 茨城県考古学協会
- 齋藤 洋・米川暢敬 2016『小原遺跡（第16地点） 都市計画道路7・6・1号線道路改良及び流域関連下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』水戸市教育委員会
- 佐々木義則 2009『武田遺跡群における平安時代土師器杯・小皿編年』『婆良岐考古』第31号 婆良岐考古同人会
- 鈴木素行 2010『弥生時代後期「十王台式」の集落構造』鈴木素行・佐々木義則・稲田健一・長沼正樹『武田遺跡群総括・補遺編』ひたちなか市教育委員会
- 高野浩之 2016『東前原遺跡（第8地点第3次）区画道路10-2号線道路改良（その1）及び流域関連下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 鶴見貞雄 1996『炉石住居遺跡－茨城県の弥生・古墳時代住居例から－』『研究ノート5号 平成7年度』 財團法人茨城県教育財团
- 中山信名 1979『新編常陸国誌』宮崎報恩会
- 水戸市教育委員会 1999『水戸市埋蔵文化財分布調査報告書（平成10年度版）』

# 写真図版



S101(南東から)





A区 完掘全景(南東から)



B区 完掘全景(北東から)



A区 基本層序(東から)



A区 調査前現況(南西から)



B区 調査前現況(南から)



SI01 完掘(南東から)



SI01 遺物出土状況(西から)



SI01 炉 完掘(南西から)

写真図版 2



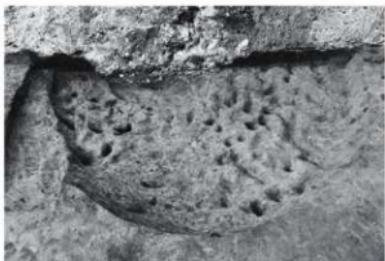
SI01 掘り方 完掘(南東から)



SI02 完掘(南から)



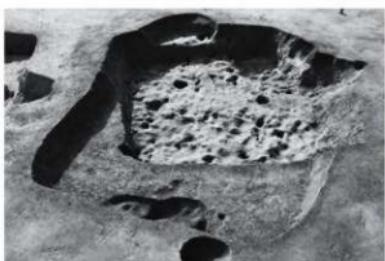
SI02 遺物出土状況(西から)



SI02 掘り方 完掘(南から)



SI04・SI05 検出状況(東から)



SI05 完掘(東から)



SI05 土器(第13図-3)出土状況(西から)



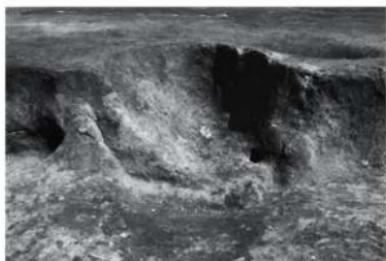
SI09 完掘(東から)



SI03 完掘 (南西から)



SI03 遺物出土状況 (南西から)



SI03 カマド 完掘 (南西から)



SI03 挖り方 完掘 (南西から)



SI04 東西土層断面 (南から)



SI04 完掘 (南西から)



SI04 遺物出土状況 (南西から)



SI04 鉄製品 (第20図-12) 出土状況 (南西から)

写真図版 4



SI04 カマド 完掘(南西から)



SI04 掘り方 完掘(南西から)



SI06 検出状況(西から)



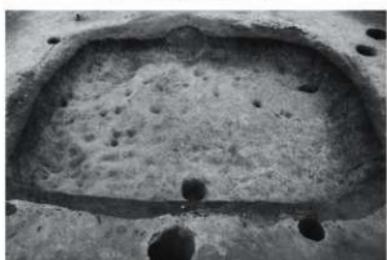
SI06 完掘(南西から)



SI06 遺物出土状況(西から)



SI06 カマド 完掘(南西から)



SI06 掘り方 完掘(南西から)



SI07 完掘(西から)



SI07 遺物出土状況 (西から)



SI07 鉄製品 (第25図-II) 出土状況 (北から)



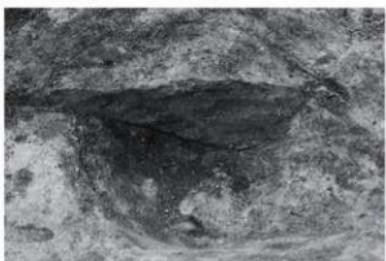
SI07 カマド 遺物出土状況1 (西から)



SI07 カマド 遺物出土状況2 (北から)



SI07 カマド 完掘 (西から)



SI07 P5 土層断面 (南から)



SI07 振り方 完掘 (西から)



SI08 完掘 (南から: 桁線内が今回調査部分)

写真図版 6



SI08 完掘西部 (東から: 線縁内が今回調査部分)



SI08 須恵器環 (第27図-2) 出土状況 (東から)



SI10 完掘 (南から)



SI10 カマド 遺物出土状況 (南から)



SI10 カマド 完掘 (南から)



SI11 完掘 (南から)



SI11 須恵器環 (第31図-1) 出土状況 (南から)



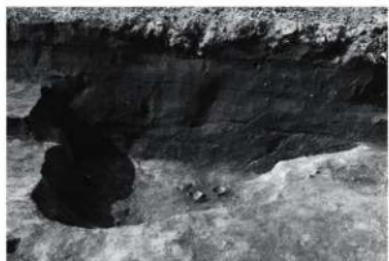
SI11 カマド 完掘 (南から)



SI12 完掘 (北東から)



SI12 土師器坏 (第33図-1~3) 出土状况 (北から)



SI12 土層断面 (北から)



SI12 カマド 完掘 (北東から)



SI12 カマド 土層断面 (北から)



SI13 完掘1 (南から)



SI13 完掘2 (西から)



SI13 土層断面 (北西から)

写真図版 8



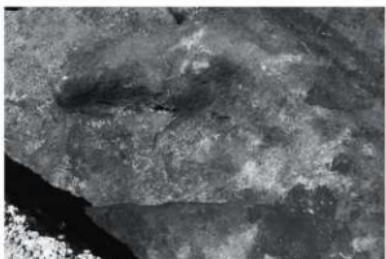
SI13 須恵器壺蓋 (第37図-5) 出土状況 (南から)



SI13 カマド 遺物出土状況 (南から)



SI13 カマド 完掘1 (南から)



SI13 カマド 完掘2 (東から)



SI13 P4 土層断面 (西から)



SI13 南西隅 粘土塊出土状況 (北西から)



SI13 挖り方 完掘 (南から)



SI14 完掘 (南東から)



SI14 カマド 完掘(南東から)



SI15 完掘1(西から)



SI15 完掘2(東から)



SI15 鉄製品(第41図-9)出土状況(南から)



SI15 カマド 完掘(西から)



SI15 棚状遺構 完掘(北から)



SI16 完掘(西から)



SI16 遺物出土状況(西から)



SI16 土師器甕(第43図-5)出土状況(西から)



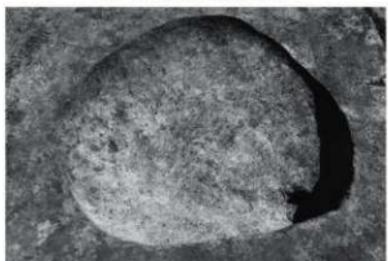
SI17 完掘(西から)



SI17 遺物出土状況(北東から)



SI17 カマド 完掘(西から)



SI08 完掘(西から)



SI09 完掘(西から)



SI20 完掘(南から)



SI23 土層断面(西から)



SD01 完掘全景 (東から)



SD01 完掘全景 (西から)



SD01 完掘西半部 (東から)



SD01 完掘東半張出部 (西から)



SD01 土層断面 A (西から)



SD02 完掘 (東から)



SD02 (右)・SD03 (左) 完掘 (西から)



SD03 完掘東半部 (北から)



SD03 土層断面K (東から)



SD03(左)・SD04(右) 完掘 (西から)



SD04 土層断面F (東から)



SK06 完掘 (東から)



SK06 土層断面 (西から)



SK13 完掘 (北東から)



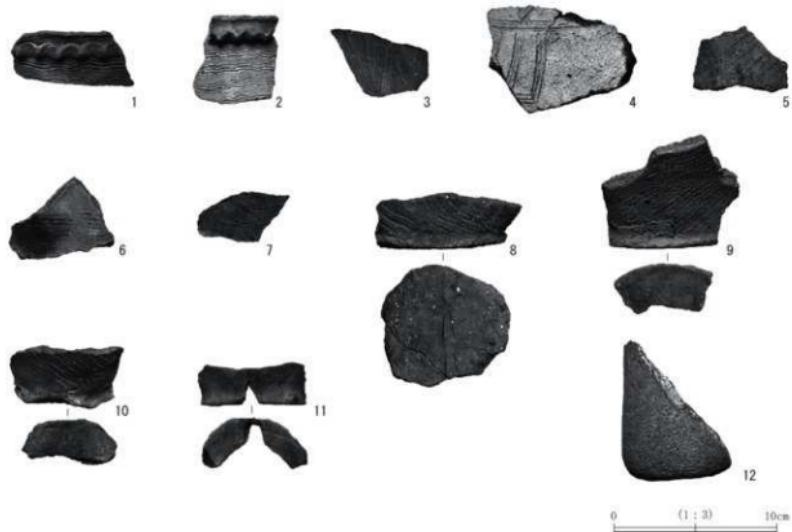
SK13 羽口 (第52図-1) 出土状況 (北東から)



SK14 完掘 (西から)

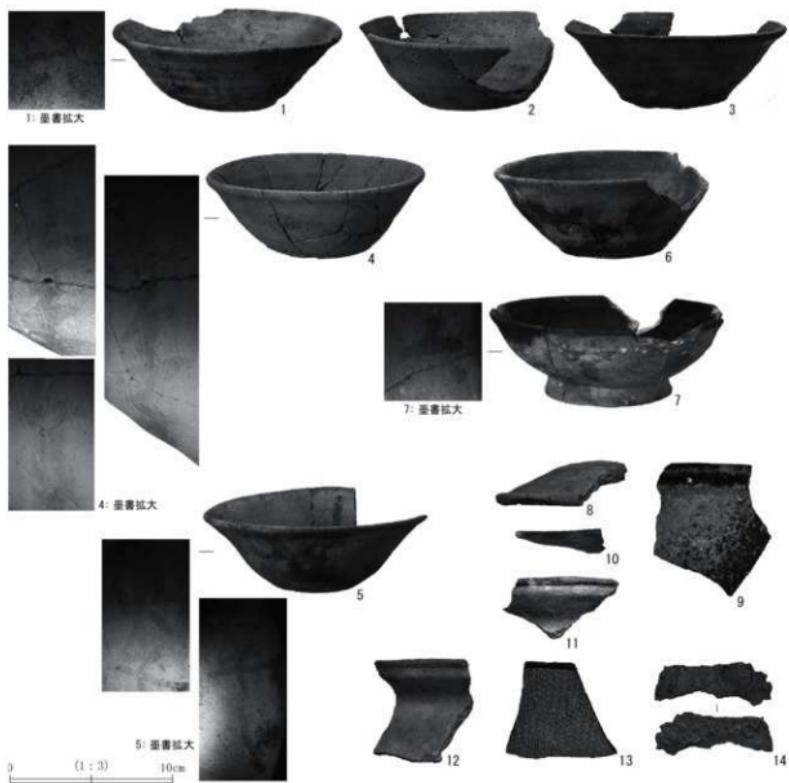
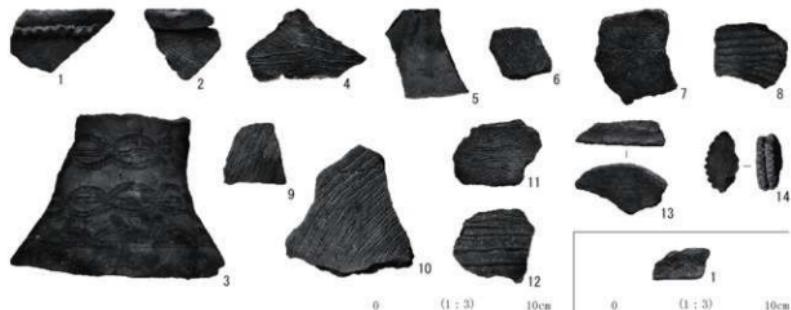


1. SI01 出土遺物



2. SI02 出土遺物

写真図版 14





1. SI04 出土遺物



2. SI06 出土遺物

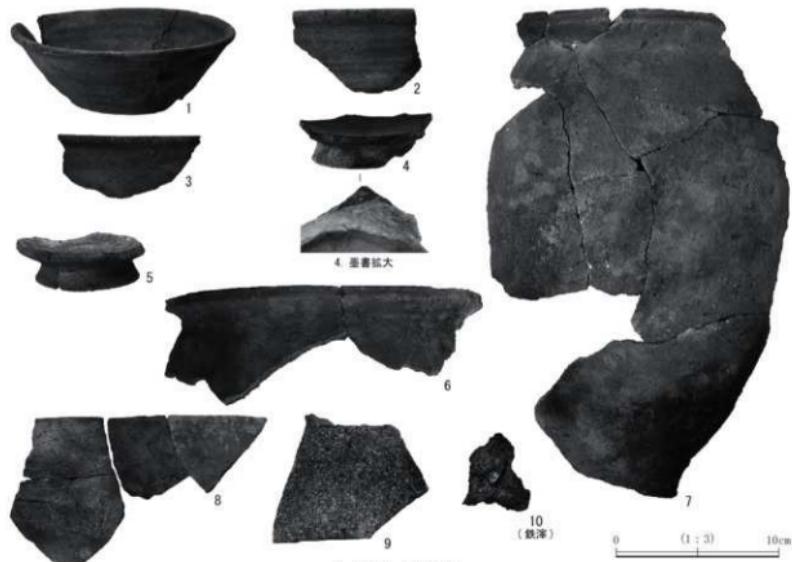
写真図版 16



1. SI07 出土遺物



2. SI08 出土遺物



1. SI10 出土遺物



2. SI11 出土遺物



3. SI12 出土遺物

写真図版 18



1. SI13 出土遺物



2. SI14 出土遺物



3. SI15 出土遺物



1. SI16 出土遺物



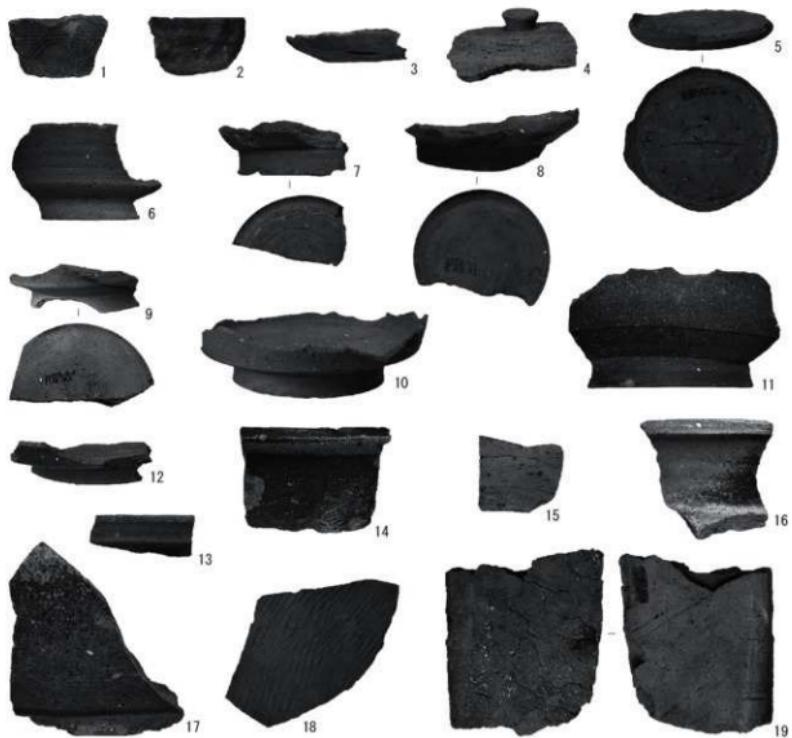
2. SI17 出土遺物



1. SD01 出土遺物



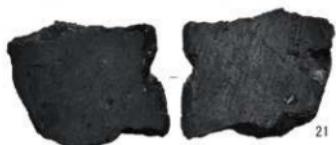
2. SK13 出土遺物



3. 遺構外出土遺物 (1)



22



21



23



24

0 (1 : 3) 10cm



25

0 (1 : 1) 2cm

1. 遺構外出土遺物 (2)



水戸市埋蔵文化財調査報告 第83集

## 東前原遺跡

(第8地点第4次)

一区画道路6-27号線道路改良及び造成並びに流域関連下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一

印刷 平成28(2016)年9月30日

発行 平成28(2016)年9月30日

編集・発行 水戸市教育委員会

〒310-8610 茨城県水戸市笠原町978-5

Tel: 029-306-8132 (歴史文化財課)

印刷 株式会社 東ブリ

〒144-0052 東京都大田区蒲田4-41-11

Tel: 03-3732-4155